

児玉町文化財調査報告書 第6集

橋ノ入遺跡Ⅱ

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書4

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第6集

はし 橋 ノ 入 遺 跡 II

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書4

1986

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

「豊かな緑につつまれた児玉町をより明るく心豊かなふれあいのあるまちにする」。この、児玉町民憲章の冒頭の一節が示すように、この町は、町域の約半分を山地が占める緑豊かな自然環境に恵まれている。ここに報告する橋ノ入遺跡もまた、このような山中に所在しているのである。

しかし、すでに縄文時代においても原生林は切り開かれて姿をかえつつあったことを知るにつけ、我々の言うところの「自然」とは、実はその隅々にまで人の手が加わったものであることがわかる。したがって、我々の見る自然環境は、純粋な自然ではなく、祖先達の営為によって徐々に形づくられた歴史的環境であるとなることができる。つまり、我々の周辺環境は、この土地を愛し環境を保全した人々の、絶ゆまぬ努力の積み重ねによって形成されていることが理解されるのである。

このような文化遺産としての歴史的環境を継承してゆくことは、ひとりひとりの繋がりや営みの大切さを理解し自覚してゆく、ひとつの前提であろう。この自然と歴史にはぐくまれた児玉町の、文化遺産の伝達とその保全もまた、我々の社会教育の目標のひとつである。

このささやかな報告書が、町民の皆様や、教育・研究にたずさわる皆様の御参考になりえるならば幸いである。私どもも、郷土の文化遺産の保護をはかりつつ、社会教育活動に努力してゆく所存であり、皆様のこれまで以上の御協力と御叱正を心より念願するものである。

昭和61年3月10日

児玉町教育委員会教育長

石 井 栄 一

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字太駄字橋ノ入に所在する橋ノ入遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、畑地の深耕に先立つ児玉町内遺跡群保存事業として、昭和56年度に児玉町教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および整理・報告書刊行に要した経費は、国庫補助金（文化庁）・県費補助金（埼玉県教育委員会）および町費である。
4. 本書は、縄文時代の遺構・遺物を中心に編集したもので、奈良・平安時代にかかる資料等については、すでに『橋の入遺跡Ⅰ』として昭和59年度に刊行している。
5. 発掘調査および本書作成にあたって、下記の方々や機関等から御助言・御協力を賜った。記して感謝の意を表わしたい。（順不同、敬称略）

赤熊浩一、石井 寛、石塚和則、出縄康行、稲村晃嗣、井上尚明、井上 肇、梅沢太久夫、岡本幸男、金子章、雄岡恵一、駒宮史朗、笹森健一、篠崎 潔、志村哲、菅谷浩之、外尾常人、田島三郎、田村 誠、利根川章彦、中村倉司、西口正純、野口泰宣、長谷川勇、飛田正美、本間岳史、増田一裕、茂木忠太郎、矢内勲、山口逸弘、埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県立自然史博物館、児玉郡市文化財担当者会、日本大学考古学研究会、東海大学考古学研究会

6. 本書作成の主な作業分担は、次のとおりである。

土器接合・復元・拓本（林和代、田口照代、山崎やす子）
土器実測（成田千鶴子、江原英）、製図（尾内俊彦）、
土器観察表（峰村篤、江原英）、石器観察表（徳山寿樹）、
遺物位置図操作（大屋道則、酒井隆）、図表作成（永尾順一、大屋道則、徳山寿樹）、写真（永尾順一、徳山寿樹、尾内俊彦）、編集（鈴木徳雄）

目 次

序

第Ⅰ章 橋ノ入遺跡の基本層序と古環境	1
1. 基本層序	1
2. 古環境（花粉分析および樹種の同定）	3
第Ⅱ章 縄文時代の遺構の概要	9
1. 検出住居址の概要	9
2. 検出土坑の概要	9
第Ⅲ章 縄文時代の遺物の概要	31
1. 出土土器の概要	31
2. 出土土製品の概要	35
3. 出土石器の概要	81
第Ⅳ章 住居埋没過程の検討	95
1. 遺物位置の検討	95
2. フク土及び、フク土と遺物の関係	97
3. 小結	101
第Ⅴ章 縄文中期の集落用益圏と生態的居住型	103
1. 集落間の距離の規則性	103
2. 集落用益圏と移住	108
3. 生態的居住型と集団領域	112

写真図版

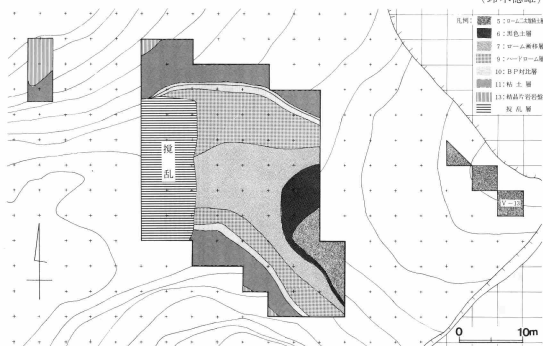
第Ⅰ章 橋ノ入遺跡の基本層序と古環境

1. 基本層序

橋ノ入遺跡は、上武山地内の緩斜面上にあり、地形の傾斜等の変化によって、土層の堆積状態が異なっている。基本的には、三波川系結晶片岩の基盤の傾斜によって堆積土層に厚薄が認められ、基盤層の低い発掘区中央では土層の堆積は厚く周辺では薄く、鞍状の地形をなしている(第1図)。またC-8区付近では、基盤の結晶片岩が大きく突出して露頭となり、遺跡の周辺でも急傾斜の部分では表土は薄くあるいは露頭が認められる。この基盤層上に堆積する土層は、地点によって欠落が認められるものの、基本的には第2図のような層序が確認できる。このような層序は、当遺跡の沢戸沢を挟んだ対岸でも認められており、更に基盤層の差異と各土層中に風化した結晶片岩の粒子を含む点を除けば、丘陵部や平野部の土層・層序とも類似していることから、当地域の一般的な層序であると考えてよい。当遺跡付近の沢筋においては、片岩の露頭や砂礫層が発達し、河床には多くの結晶片岩の転石が認められるが他の石材を見つけることはできない。

橋ノ入遺跡の層序の個性性は、表土層である第Ⅰ層(1~5層)において認められ、4層が古代の耕作土層、5層が縄文中期の集落形成期に近い時期の二次堆積土層であると推定される。なお、発掘調査区中央部は、調査以前に削平され攪乱が認められるが、それほど大規模な削平ではなかったものと推定される。

第1図 基本土層
平面分布図



第2図 橋ノ入遺跡基本土層

A層	褐色土	削平時の客土。	A B	客土層(Ia, b)
B層	黄褐色土	A層に同じ。	1	現耕作土層(Ic)
第1層	暗褐色土	浅間山系A軽石・ローム粒・岩粒を含み疎である。現耕作土層。	2	中〜近世耕作土層(Ic)
第2層	黒褐色土	1層に類似するが、A軽石は含まれない。近世前半〜中世の耕作土層。	3	旧表二次堆積土層(Ie) (国分、縄文包含)
第3層	黒茶褐色土	ローム粒・岩盤粒を含み密であるが、粘性は弱い。旧表土の二次堆積土層。平安期の遺物を主として包含。	4	古代耕作土層(If) (国分式包含)
第4層	黒茶褐色土	ローム粒・岩盤粒・焼土粒を含み、3層より黒みが強く密である。旧表土の二次堆積土層。縄文中期の遺物を主として包含。	5	ローム二次堆積土層(Ilg) (縄文中期包含層)
第5層	暗茶褐色土	ロームブロック・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む。ロームの二次堆積土層。縄文中期の遺物を主として包含。	6	縄文期表土層(II)
第6層	黒色土	黒色の縄文時代地表面の累積層。	7	ローム漸移層(III)
第7層	黄褐色ローム	5層に似るがよりロームに近い。遺物は包含されない。ローム漸移層白色のYPを下部に多く含む。しまりは弱い。	8	Y, P, 対比層(IVa)
第8層	明黄褐色火山灰	明黄褐色のYP対比のテフラ。斜面にたまっている。	9	ハードローム層(IVb)
第9層	暗褐色ローム	上部では白色のYPを少し含む。	10	B, P, 対比層(V)
第10層	橙褐色火山灰	黄褐色のBP対比のテフラ。他の構成要素として径5mm程の片岩礫が見られる。	11	粘土漸移層(VIa)
第11層	茶褐色粘質土	径2cm程度の片岩礫を多く含み、粘性が強い。粘土化しかけているローム。	12	粘土層(VIb)
第12層	灰色粘土			
第13層	片岩の基盤		13	結晶片岩層(VII)

2. 古環境（花粉分析および樹種の同定）

橋ノ入遺跡の調査では、当遺跡の古環境とその変遷を推定するために、基本土層および各時期の住居址覆土から花粉分析のための試料を採取した。ここで採取した試料は、基本層の3～7層、また加曽利EⅡ期の第2号住居址、国分期の第5号住居址および第6号住居址のものである。また、第5号住居址のカマド内から検出された薪材と考えられる炭化材の樹種の推定を行った。

《花粉分析》

1. 試料 分析に供された試料は10点である。

第1表はその試料表で、試料番号、採取地点、層、岩質、花粉孢子化石産出傾向をまとめ記載した。

2. 分析方法 試料20g～100g 秤量 → HCl処理 → HF処理 → 重液分離 → アセトリシス法 → KOH処理 → 封入

3. 分析結果 花粉分析の結果は、第2表に各試料について花粉孢子化石の検出総個体数を基数として百分率で表示した。なお、№1、3、4、5、は花粉孢子化石が非常に少なかったため検出個体数で表示した。主な花粉孢子化石については、第3図にダイアグラムを作製したので参照されたい。同様に、写真図版、図版、A・B、を作製したので参照されたい。

今回の分析の結果、以下に列挙した花粉・孢子化石が検出された。

〈A P-1（針葉樹花粉）〉

Abies(モミ属)、Pinus(マツ属)、Tsuga sieboldii(ツガ)、Tsuga (Unknown)、Cryptomeria(スギ属)

〈A P-2（広葉樹花粉）〉

Alnus(ハンノキ属)、Carpinus(クマシデ属)、Corylus(ハシバミ属)、Castanea(クリ属)、Lepidobalanus(コナラ亜属)、Celtis-Aphananthe(エノキ属)、Ulmus(ニレ属)、Zelkova(ケヤキ属)、Moraceae(クワ科)、Aesculus(トチノキ属)、cf. Trachelospermum(テイカカズラ)、Acer(カエデ属)、

〈N A P (草本花粉)〉

Persicaria(サナエタデ節)、Fagopyrum(ソバ)、Thalictrum(カラマツソウ)

第1表
試料表

試料番号	採取地点	層	岩質	花粉・孢子化石産出傾向
1	HN	第Ⅱ層(6層)	黒色土	R. R.
2	〃	第Ⅲ層(7層)	バミス泥り褐色土	R.
3	HN-2, N-16	59-XⅡ	暗褐色ローム	R. R.
4	〃	59-XⅤ	〃	R. R.
5	〃	59-XⅤⅢ	〃	R. R.
6	HN-V-13	深掘セクション第3層	黒色土	R.
7	〃	深掘東側セクション第4層	〃	R.
8	〃	〃 第5層	暗茶褐色土	R.
9	HN-5, K-9	51-VⅡ	暗褐色土	R.
10	HN-6	床直	〃	R.

※R: 少ない

R.R: 極く稀れ

属)、Umbelliferae(セリ科)、Carduoideae(キク亜科)、Artemisia(ヨモギ属)、Cichorioideae(タンポポ亜科)、Gramineae(イネ科)、Cyperaceae(カヤツリグサ科)、Patrinia(オミナエシ属)、Gentianaceae(リンドウ科)、Campanulaceae(キキョウ科)、Geranium(フウロソウ属)

〈F P (形態分類花粉)〉

Trizonocolpate(三帯状溝型花粉)、Trizonocolporate(三帯状孔型花粉)

〈F S (羊歯類孢子)〉

Osmunda(ゼンマイ科)、Polypodiaceae(ウラボシ科)、Pteris(イノモトソウ属)、Monolete spore(単条溝型孢子)、Trilete spore(三条溝型孢子)、Lycopodium(カニクサ属)

次に各試料について述べる。

No.1 HN 第Ⅱ層(6層:縄文時代表土層)

花粉孢子化石が非常に少なかった。検出されたものとして、ハンノキ属、コナラ亜属、エノキ属、カラマツソウ属、キク亜科、ヨモギ属、タンポポ亜科、イネ科、リンドウ科、ウラボシ科、単条溝型孢子、三条溝型孢子、等があげられる。このうち、比較的多く検出されたものとしてコナラ亜属、キク亜属、イネ科、単条溝型孢子、がある。

これらのことから、古環境は、コナラ、クヌギ等の広葉樹から成る疎林と、キク亜科、イネ科、シダ類、等から成る草地の存在が考えられる。しかし、花粉・孢子化石が非常に少なかったので、裸地的環境と考えられ、他の植物がどの程度存在していたかは、判断し難い。

No.2 HN 第Ⅲ層(7層:ローム漸移層)

シダ類孢子が非常に多く、全体の80%を超える。そのほとんどが、単条溝型孢子であった。花粉化石は、マツ属、Tsuga、ハンノキ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、イネ科、等が検出され、ヨモギ属、タンポポ亜科、が比較的多い。

古環境は、シダ類、ヨモギ属、タンポポ亜科等から成る裸地と考えられるが、シダ類が、どの程度生育していたかは不明である。

No.3、4、5 第2号住居址、N-16、59-XⅡ、XⅤ、XⅤⅢ(縄文中期)

この3試料は、いずれも花粉・孢子化石が非常に少なく、マツ属、コナラ亜属、カエデ属、イネ科、タンポポ亜科、ウラボシ科、イノモトソウ属、単条溝型孢子が僅かに検出されたにすぎない。

従って、古環境について述べ難い。

No.6 HN-V-13 深掘セクション第3層(中世包含層)

草本花粉のヨモギ属が優勢、イネ科がこれに続く。また、シダ類孢子的単条溝型孢子も比較的多い。樹木花粉では、コナラ亜属、ケヤキ属、カエデ

属、等が僅かに検出されたにすぎない。

従って、古環境は、コナラ亜属、ケヤキ属、カエデ属、等の樹木が僅かに生育した裸地と考えられ、そこにはヨモギ属、イネ科、キク亜科、タンポポ亜科、セリ科、オミナエシ属、フウロソウ属、シダ類、等の草本類が生育していたといえよう。しかし、花粉・胞子化石の量が少なかったため、それほど多く生育していなかったかもしれない。

No.7 HN-V-13 深掘東側セクション第4層（奈良・平安時代包含層）

この試料は、Na.6 とほとんど同じ花粉・胞子化石の構成をしている。従って、古環境もNa.6 とほぼ同じといえよう。

No.8 HN-V-13 深掘東側セクション第5層（縄文中期包含層）

シダ類胞子の単条溝型胞子、ウラボシ科、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、が多く、樹木では、ケヤキ属、コナラ亜属、カエデ属、ハンノキ属、スギ属、等が少ないながらも産出する。

古環境は、ケヤキ属、コナラ亜属、カエデ属、ハンノキ属、スギ属、等が生育する疎林、又は裸地的環境にウラボシ科、イノモトソウ属、等のシダ類、及びイネ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、オミナエシ属、等の草本が生育していたものといえよう。

No.9 第5号住居址、K-9、51-V11II（奈良時代）

シダ類胞子が70%以上を占めている。そのほとんどが、単条溝型胞子、ウラボシ科、イノモトソウ属、の三者である。草本花粉と樹木花粉は共に少なく、ヨモギ属、イネ科、キク亜科、コナラ亜属、ハンノキ属、等が低率で産出するに過ぎない。

従って、古環境は、シダ類の良く生育した草地、又は裸地と考えられるが、花粉・胞子化石の数が少ないので判断し難い。

No.10 第6号住居址、床直（平安時代）

樹木花粉のスギ属が、約60%の産出を占め、非常に多い。そして、マツ属、Tsuga、クマシデ属、ハシバミ属、クリ属、コナラ亜属、等を伴う。

草本花粉では、イネ科、キク亜科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ソバ、サナエタデ節等、シダ類胞子では単条溝型胞子、ウラボシ科、イノモトソウ属、三条溝型胞子、等が検出された。

従って、古環境はスギ属が繁茂した林地と考えられ、マツ属、クマシデ属、クリ属、ハシバミ属、コナラ亜属、等も一緒に生育していたであろう。

そして、林地の周辺また下草として、キク亜科、ヨモギ属、イネ科、シダ類、等が生育していたものといえよう。

以上の結果をまとめると次の様になろう。

○Na.1、3、4、5は、花粉・胞子化石が非常に少なく、古環境を推定する

には不十分であった。Na 6、9 においても必ずしも十分とはいえない。

○Na 2、9 はシダ類孢子が非常に多く、シダ類の生育が認められるものの、古環境を推定するには、必ずしも十分なものではなかった。

○Na 6、7、8 はNa 8 からNa 6 にかけて下から上へほぼ連続して、採取したものである。下部のNa 8 では、草本花粉、シダ類孢子が多く、裸地的な環境を示している。そして、ケヤキ属を始めとする樹木の種類も多く、林地まで発達していないが樹木の生育がこれより上位よりも多いといえよう。Na 7、6 になると、ヨモギ属が、優占する草地、又は裸地と考えられ、僅かながらの樹木も生育していたといえよう。

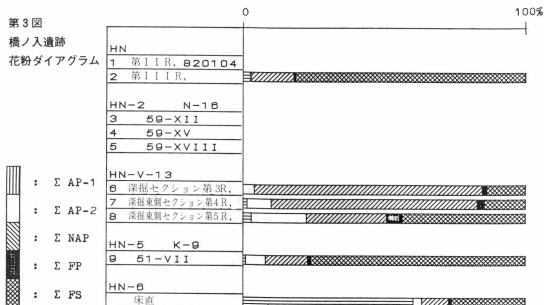
○Na 10 は、スギ属の繁茂する林地の存在が推定される。

○今回検出された花粉化石のうち、花粉・孢子の構成から *Cryptomeria* はスギ、*Lepidobalanus* はクヌギ、ナラ、カシワ、*Zelkova* はケヤキ、*Artemisia* は、ヨモギ等と考えられる。

第3図

橋ノ入遺跡

花粉ダイアグラム



図版一A・B

状況写真

第59
XII層



第59
XV層



第2表
橋ノ入遺跡
花粉分析結果

Pollen and Spores		Sample No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
				HN 第III R, 820104	HN 第III R,	HN-2 N-15 59-XII	HN-2 N-16 59-XV	HN-2 N-16 59-XVII	HN-V-13 深掘セクション第3 R,	HN-V-13 深掘セクション第3 R,	HN-V-13 深掘セクション第3 R,	HN-5 K-9 51-VII 820917	HN-6 株直
AP-1	Abies										0.5		
	Pinus				2.0					1.0			0.5
	Tsuga sieboldii						1						
	Tsuga (Unknown)			0.5								1.0	0.5
	Cryptomeria									0.5	2.5		50.5
AP-2	Alnus			3	0.5					1.0	2.0	4.0	
	Carpinus										1.5		0.5
	Corylus									0.5	0.5		0.5
	Castanea									0.5	0.5		0.5
	Lepidobalanus			12		1			1.0	2.0	4.0	2.0	1.5
	Celtis-Aphananthe			1							2.0		
	Ulmus										1.0		
	Zelkova								0.8	4.5	4.5		
	Moraceae										1.0		
	Aesculus										0.5		
	cf. Trachelospermum											1.0	
NAP	Acer						1		1.0		2.0		
	Persicaria												0.5
	Fagopyrum												1.0
	Thalictrum			3						0.5	0.5		
	Umbelliferae								0.8				
	Carduoideae			10					1.0	1.0	3.0	3.0	1.5
	Artemisia			3	1.5				57.6	38.5	7.0	7.0	1.5
	Cichorioideae			1	9.0			2	2.4	2.5	0.5		
	Gramineae			10	3.0	1			10.8	28.0	16.0	5.0	4.0
	Cyperaceae				1.5	1							1.0
	Patrinia								0.8	1.0	0.5		
	Gentianaceae			1									
FP	Campanulaceae									0.5	1.0		
	Geranium								0.8	1.0			
FS	Trizonocolpate			2	0.5					0.5	3.0		0.5
	Trizonocolporate			4		1	1		1.0	2.0	2.5	1.0	0.5
FS	Osmunda								1.0			1.0	
	Polypodiaceae			3		4			1.0	0.5	10.0	23.0	5.0
	Pteris					1				1.0	3.0	12.0	2.0
	Monolete spore			18	78.5	0	3	0	0.0	12.0	26.0	39.0	14.5
	Trilete spore			1	3.0					1.0	4.0	1.0	4.5
	Lycopodium								0.8		0.5		
TOTAL	Σ AP-1			0	2.5	0	1	0	0.0	1.5	3.0	1.0	80.5
	Σ AP-2			10	0.5	1	1	0	4.0	8.5	19.5	7.0	3.0
	Σ NAP			34	15.0	2	0	2	80.8	73.0	28.5	15.0	9.5
	Σ FP			6	0.5	1	1	0	1.0	2.5	5.5	1.0	1.0
	Σ FS			22	81.5	11	3	0	13.0	14.5	43.5	76.0	26.0
Σ Pollen & Spores (N)				78	200	15	6	8	125	200	200	100	200
Pseudoschizaea				2		2			1		1		

1, 3, 4, 5は
個体数で示す

《材 鑑 定》

1. 試 料

試料は、第5号住居址カマド内から検出された炭化材1点で直径約3 cmの小枝あるいは、灌木と思われる。

2. 鑑 定 方 法

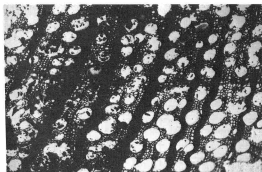
試料が炭化材なので合成樹脂により、木口面、征目面、板目面の徒手切片を作成し、顕微鏡観察および走査型電子顕微鏡での断面観察を行なった。また木口面(Tr)、板目面(Tg)、征目面(Rd)の三方向の写真(35倍)を図版—Cとして作成した。

3. 鑑 定 結 果

試料は散孔材であり、道管は単独のものが多く大きさはほぼ均等で均一に分布する。細胞壁は薄く卵形～多角形を示す。階段せん孔を有し階段の数は10本前後で巾がやや広い。壁孔は、大型で交互状～対列状に配列し密度は低い。放射組織は異性で1～6の細胞巾、3～4の細胞巾のものが多い。密度は高く管孔1～3ヶ毎に配列し細胞高は15～20で比較的低い。柔組織は、はっきり確認されなかったが随伴散在～周囲柔組織と思われる。

以上のことから、当材(炭化材)は*Rhododendron* sp (ツツジ科一種)とすることができる。

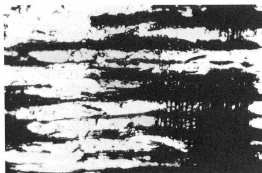
(バノリ・サーヴェイ)



木口面 (Tr)



板目面 (Tg)



征目面 (Rd)

図版—C

炭化材断面
の顕微鏡写真

第Ⅱ章 縄文時代の遺構の概要

1. 検出住居址の概要

橋ノ入遺跡では、縄文時代の住居址8軒が北向きの緩斜面に、全て重複して検出された。調査は、このうちの6軒を完掘し、他の2軒は保存が可能なためその一部を調査し埋め戻した。

第1号住居址(第9図)は、床面は堅く、その床面上に唐草文系土器の伏襲があった。また床面から少し浮いた状態で石皿や磨石を含む配石址(第8図)が検出されている。本址は、北側の一部が削平されており、主柱穴は確認された4本の他に1本推定されることから5本主柱穴の住居址であると考えることができる。炉址(図版1-2)は、深い掘り込みの中に炉体土器(第25図1)を据えたものである。

第2号住居址はa～dの4軒が検出され、このうちのa～c住は、1号住および3号住に切られている。またこの2号住中で最も新しいと考えられる2a号住は、4a号住を切って構築されている。2a号住の炉址は、石囲いを有する埋襲炉(第6図)であり、炉体土器は第26図1に示した。主柱穴は、2a号住のものが5本検出されているが、その位置からSX-3の位置にもう1本が推定され、6本主柱穴の構造をとると考えることができる。

第3号住居址は、2号住との重複部分および50cm幅の試掘調査を行なったものである。炉址は、埋襲炉(図版5-1)である。その炉体土器は、第28図2であり、その上面からは第28図1が出土している。

第4号住居址(第7図)は、2軒の重複が認められ、4a住が4b住を切っている状態が確認された。4a住についてみると、炉址は地床炉であり、主柱穴は5本検出されている。

なお、各住居址の重複関係と各々の推定時期は、第4表のとおりである。

2. 検出土坑の概要

本遺跡で検出された土坑は34基であり、以下のように分類することができる。

A種は、円形を呈するもので、ほぼ正円形を呈する1類(SK-1,2,8-12、15,17,24ab,25,31,34;第10～第14図)と、ややゆがんだ形状を呈する2類(SK-6,23;第15図)、やや袋状を呈する3類(SK-3;第19図)に類別される。

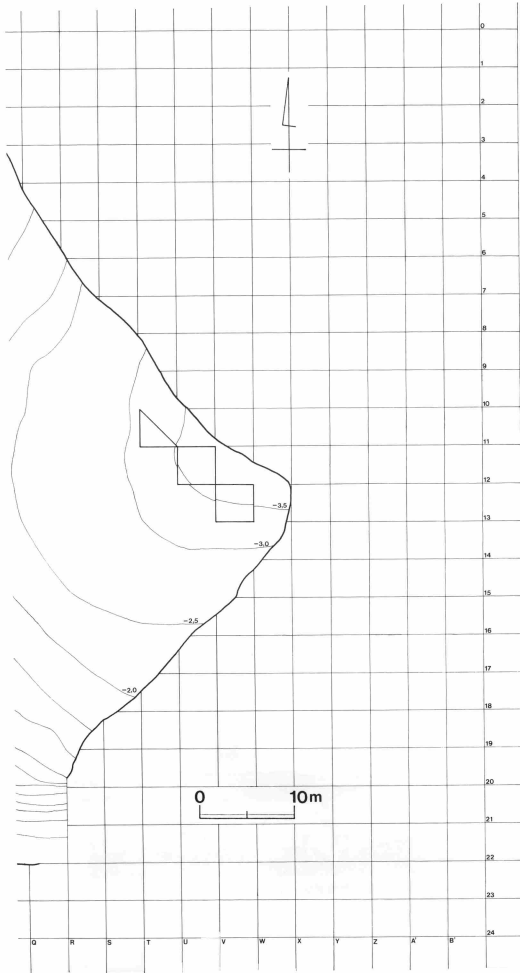
B種は、楕円形を呈するもので、やや小さい規模の1類(SK-22,30,32;第16図)と、やや角をもつ形態をとる2類(SK-21,29,5;第17図)、若干大型の3類(SK-13,28;第18図)に類別される。

C種は、いわゆる袋状土坑であり、SK-17の1基のみが検出されている。

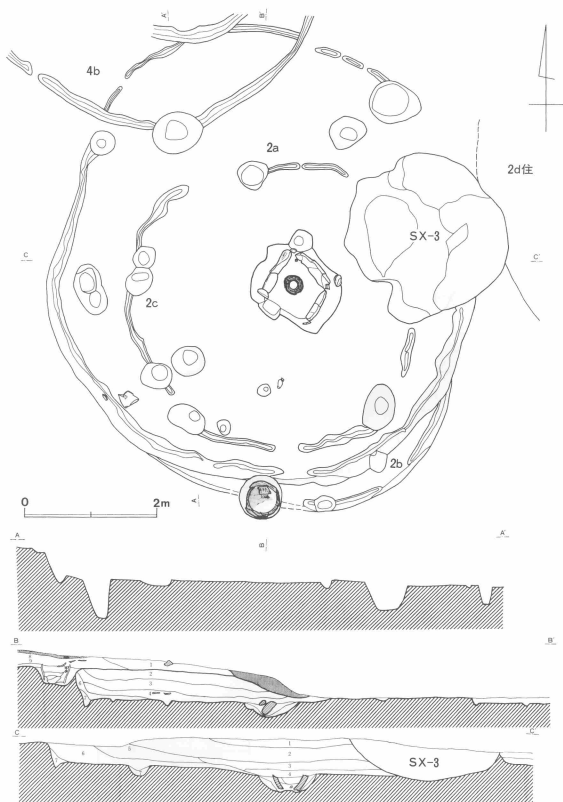
D種は、集石を伴う土坑であり、SK-7(第20図)およびSK-33の2基が検出されている。

(鈴木徳雄)





第4図
橋ノ入遺跡
全測図



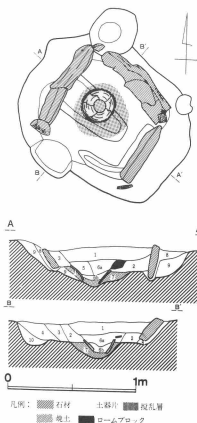
第5図 第2号住居址 (S=1/60)

2 a 号住居址土層説明

- 第1層：茶褐色土 粒子は細かく均質。遺物を含まず、地山（最上層）の片岩をまばらに含む。全体にしまりがある。
- 第2層：黒褐色土 粒子は細かく均質。1層に比べ色調は暗い。土器片を多く含む。地山の片岩の包含量は1層と同程度であるが、緑泥片岩の含有が特色となっている。全体に1層よりしまりを欠く。
- 第3層：茶褐色土 粒子は細かく均質。炭化物を多く含む。土器片も含むが、2層より少ない。しまりはない。
- 第4層：褐色土 粒子は対比層3層に比べて粗い。ローム粒子の混入が顕著である。全体にしまりを欠く。
- 第5層：茶褐色土 粒子は2層より粗い。炭化物を非常に多く含む、土器片をまばらに含む。結晶片岩を含み、ローム粒子は2層より多く含んでいる。しまりはない。
- 第6層：褐色土 炭化物を含む粒子の細かい層である。ローム粒子を多く含む全体の色調は対比層に比べて明るい。しまりはある。
- 第7層：明茶褐色土 粒子はやや粗い。ローム粒子を多く含む、しまりはない。

2 b 号住居址土層説明

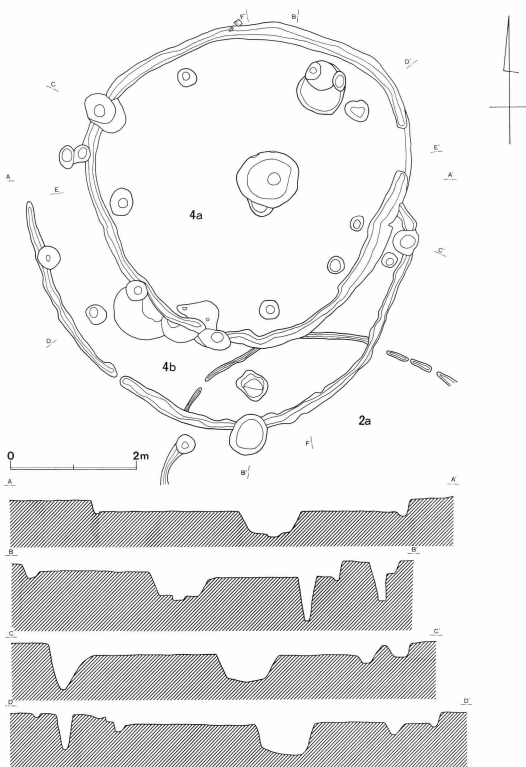
- 第8層：褐色土 粒子は細かく均質。炭化物を含み、全体にしまりがある。
- 第9層：暗黄褐色土 粒子は8層と比較して粗い。人為痕跡物は何も含んでいない。全体によくしまっている。



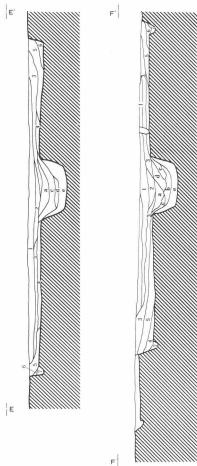
第6図 第2号住居址カマド

2号住居址土層説明

- 第1層：暗茶褐色土 白色テフラ、ローム粒子を多量に、炭化物、焼土粒子を少量含む、地山礫を若干含む。やや硬質。
- 第2層：暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。白色テフラは、1層より少なめである。炭化物粒子を少量含む、焼土粒子は、微量である。やや軟質である。
- 第3層：暗褐色土 白色テフラを多量に含む。焼土粒子、炭化物粒子を若干含む。含有物は他層より密である。やや硬質。
- 第4層：暗黄褐色土 ローム分を他の層に比べ、多量に含む。白色砂粒、炭化物粒子を若干含む。やや軟質である。
- 第5層：暗褐色土 白色テフラ、ローム粒子を少量含む。地山礫を若干含まれている。やや軟質である。
- 第6 a 層：暗褐色土 ローム粒子、白色砂粒を若干含む。軟質である。焼土が層下部に集中。
- 第6 b 層：暗褐色土 6 a 層より暗く、軟質である。6 a 層に比べ含有物の密度が低い。
- 明 度 明 4 > 1 > 3 > 5 > 2 > 6 a > 6 b 暗
- 硬 度 硬 3 > 1 > 2 > 5 > 4 > 6 a > 6 b 軟
- 第7層：赤褐色土 焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。白色粒子も顕著にみられる。粒子は粗くしまりはない。
- 第8層：茶褐色土 白色粒子を少量含む。ローム粒も若干含まれる。粒子は細かく、均質によくしまっている。
- 第9層：暗黄褐色土 ローム土の風化したものがほとんどであり黒色土層との混合土層、ローム層に比して軟質である。炭化物を多く含む。
- 第10層：黒褐色土 炭化物を多量に含んでいる。ローム粒をわずかに含む。粒子は細かくしまっている。



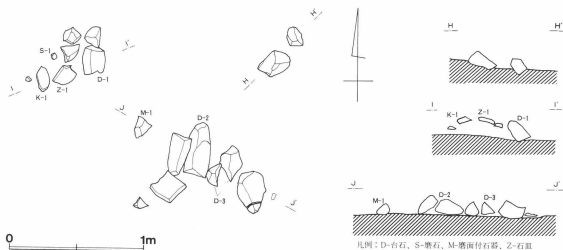
第7図 第4号住居址 (S=1/40)



第4 a号住居土層説明

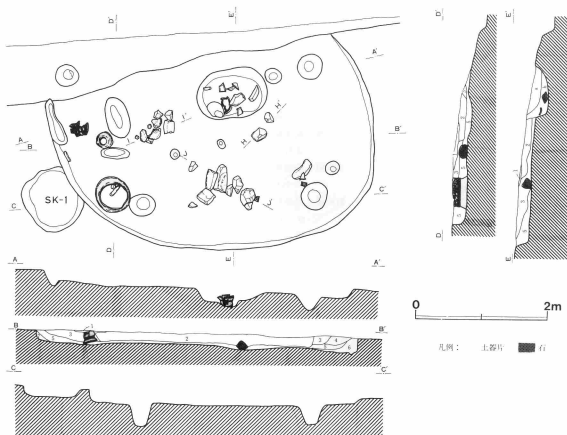
- 第1層：黒褐色土 白・赤テフラ・ローム・炭化物粒を含み、均質・緻密である。
- 第2層：黒褐色土 1層に類似するが、結晶片岩粒を含みザラついている。
- 第3層：暗褐色土 1層に類似するが、ローム粒の量が多く、やや粒子が細かい。
- 第4層：暗茶褐色土 多量の炭化材、炭化物、濃肌色の焼土と小礫を含む。不均質で粗い。
- 第5層：暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を含み緻密であるが、やや不均質である。少量の炭化物を含む。
- 第6層：暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を多量に含み、不均質かつ粗い。炭化物を含まない。
- 第7層：褐色土 ロームブロック、ローム粒を多量に含み不均質・緻密である。

- a層：暗褐色土 3層に類似するが、炭化物粒、焼土粒、ローム粒を多く含む。小礫も混在する。
- b層：暗褐色土 3層に類似するが、炭化物、小礫を多く含む。
- c層：暗茶褐色土 4層に類似するが焼土粒が少ない。
- d層：赤褐色土（焼土） ほぼ焼土塊より成り、多くの小礫を含み、よくしまっている。
- e層：黄褐色土 ロームブロック、炭化物、焼土ブロックにより構成された層でよくしまっている。掘り方部である。



凡例：D-台石、S-礎石、M-磨面付台石、Z-石置

第8図 第1号住居址内配石址

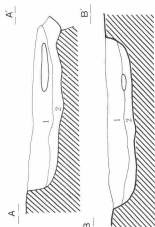
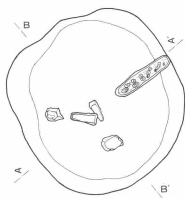


第9図 第1号住居址 (S=1/60)

1号住居址土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層 細かな（1mm）ローム粒子を多量に含み、粘性はなく、よくしまっている。また炭化粒子も多く含む。岩盤ブロック（径5mm）は少量含まれる。
- 第2層：暗黒褐色土層 ローム粒子（1mm）を全体的に、またロームブロック（1～2mm）をまばらに含み、炭化粒子を多量に含む。また、焼土粒（2mm～5mm）も少量含み、細かな岩盤もまばらに少量含む。粘性はなく、よくしまっている。
- 第3層：明褐色土層 ロームブロック（5mm）とローム粒子（1～2mm）をまばらに少量含む。岩盤風化粒子も全体的に多く含む。炭化粒子・焼土等は、極く少ない。粘性はなくよくしまっている。
- 第4層：明茶褐色土層 ローム粒子・岩盤風化粒子をわずかに含み炭化粒を少量まばらに含む。粘性はないが、しまりはよい。
- 第5層：褐色土層 ローム粒、ロームブロックをまばらに含む。岩盤風化粒は少量、炭化粒は少ない。粘性なく、よくしまっている。
- 第6層 暗茶褐色土層 ローム粒子を全体的に多く含み、また岩盤風化粒子及びブロックもまばらに少量含まれる。
- | 明 度 | 明 | 4 | 3 | 5 | 1 | 6 | 2 | 暗 |
|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ローム粒 | 多 | 5 | 1 | 6 | 2 | 4 | 3 | 少 |
| 炭化粒 | 多 | 2 | 3 | 5 | 4 | 6 | 1 | 少 |
| 岩盤風化粒 | 多 | 3 | 5 | 4 | 6 | 2 | 1 | 少 |

SK-1



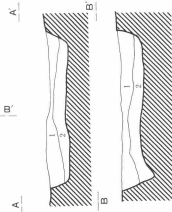
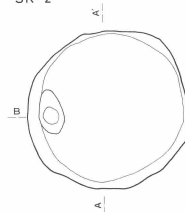
SK-1 土層説明

- 第1層 暗黒褐色土 炭化物を多く含む。
第2層 暗褐色土 ロームブロック及び炭化物を若干含む。

SK-2 土層説明

- 第1層 明褐色土 均等に含まれるロームブロック、ローム粒子を主成分として黒色土が混合した層。
第2層 褐色土 二次黒色土中に若干のローム粒子が含まれる。この層の下部にはロームブロック(径3cm)が含まれている。

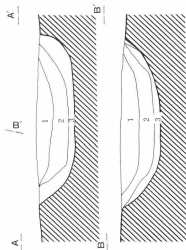
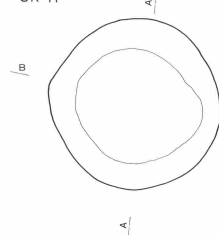
SK-2



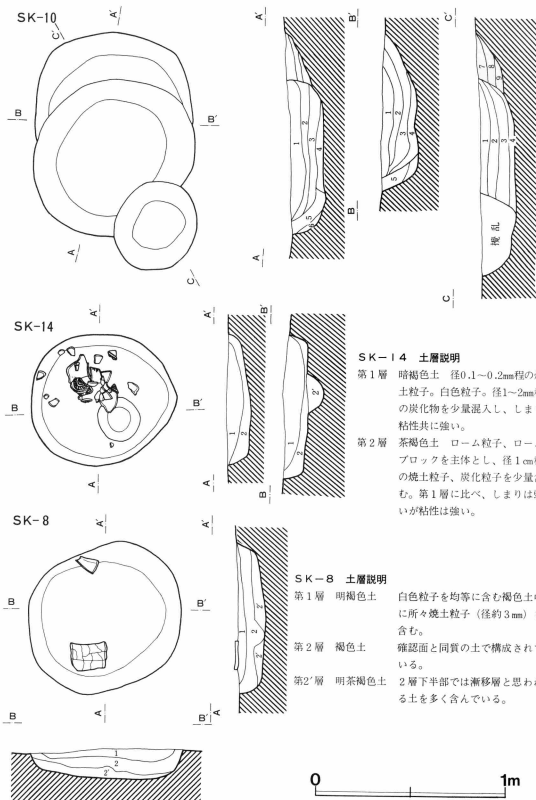
SK-11 土層説明

- 第1層 暗褐色土 白色粒子、赤色スコリア、炭化粒子、ロームブロック(径1~2cm)、ローム粒子を含む。しまりがあり、粘性弱い。
第2層 暗褐色土 白色粒子、炭化粒子、ローム粒子を含み、粘性、しまり共第1層より強い。
第3層 暗褐色土 炭化粒子、ローム粒子を含み、ソフトロームブロックを多く含む。第2層に比べしまり、粘性とも強い。

SK-11



第10図 土坑(1): A種1類



第11図 土坑(2): A種1類

SK-9 土層説明

第1層	暗褐色土	ローム粒子、炭化粒子を含む。
第2層	暗褐色土	ローム粒子（径2～3mm）をまばらに含む。炭化粒子も含む。
第3層	暗褐色土	ロームブロック（径2～3cm）を少量、ローム粒子を多量に含み、炭化粒子も含む。
第4層	黄褐色土	ローム粒子を主体とする。
第5層	黄褐色土	第4層に比べ、しまり、粘性共にやや弱い。

SK-10 土層説明

第1層	暗褐色土	赤色粒子、ローム粒子を含み、若干の小礫を含む。しまりがあるが粘性はない。
第2層	暗褐色土	第1層と成分が類似しているが、しまり、粘性とも弱い。
第3層	暗褐色土	径2～3mmのローム粒をまばらに、径0.5mm以下のローム粒を多量に含み、しまり、粘性共ややある。
第4層	黄褐色土	ローム粒子を主体とし、ソフトロームブロックを含み粘性がある。
第5層	暗褐色土	ローム粒子を多量に含み、径1～1.5cm程のソフトロームブロックを含む。粘性ややあり。
第6層	黄褐色土	径2～5mmのローム粒子を多量に含み、ソフトロームブロックを含む。粘性あり。
第7層	暗褐色土	ローム粒子を含み、しまりはあるが粘性は弱い。
第8層	暗褐色土	ローム粒子が第7層より多く、粘性、しまり共ややある。
第9層	黄褐色土	ソフトロームブロックを主体とし、ローム粒子を多量に含む。粘性強く、しまりはややある。

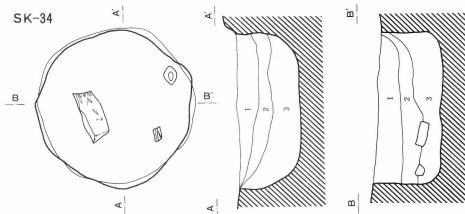
SK-15 土層説明

第1層	暗褐色土	赤色粒子、白色粒子、炭化粒子、ローム粒子を含み、しまりは強く粘性はやや弱い。
第2層	暗褐色土	第1層と同質の粒子を含むが漸移層としてのロームが混入している。第1層と比べしまりは弱い粘性がある。
第3層	黄褐色土	ロームブロック、ローム粒子を主体とし、上層の褐色土を含む。粘性強くしまりはやや弱い。
第4層	茶褐色土	白色粒子、赤色粒子を多量に含み、しまりが強く粘性もややある。
第5層	褐色土	径1～2mm程の赤色粒子、炭化粒子、白色粒子を少量含み、ローム粒子及び漸移層土を混入させる。粘性があり、しまりは第4層より強い。
第6層	茶褐色土	径1mm程の炭化粒子及びローム粒子を含む。粘性強い。

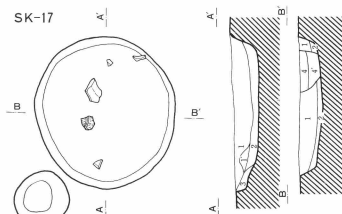
SK-34 土層説明

第1層	黒色土	フク土は均質で緻密であり風化している。細かいローム粒子やテフラ、炭化物粒子等を多く含んでいる。（その他、無文の土器片が一片出土）
第2層	黒色土	フク土が不均質になり、黒色土とロームのブロックが混入している。炭化物粒が多く含まれているが、第1層に比べると少ない。（その他、第2層の下部から第3層の上部にかけて礫が流入した形で出土）
第3層	暗褐色土	フク土が不均質で風化しておりローム土を含む割合が大きい。炭化物粒は依然として多いが、1・2層ほどではない。（その他、上の二層に比べて親指大以下の小石が多く含まれている。）
明度比	明	3<2<1 暗

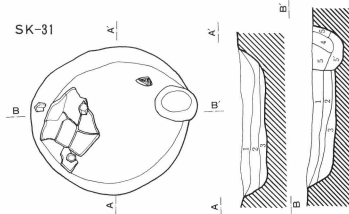
SK-34



SK-17



SK-31



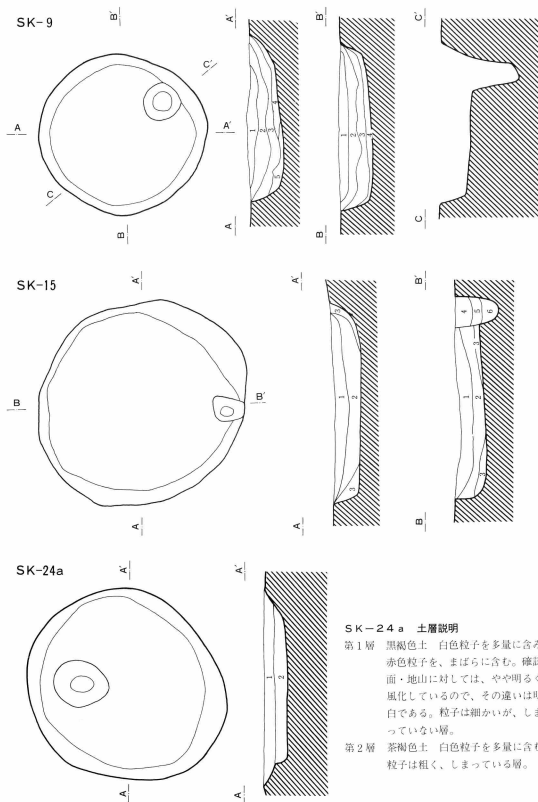
SK-17 土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム、赤色、白色
粒子を均等、炭化粒子を少量含
む。しまりが有り、粘性弱し。
- 第1'層 明褐色土 第1層に比べローム
粒子を多く含む。
- 第2層 暗褐色土 漸移層の土を主体に
白色、炭化、ローム粒子を含む。
- 第3層 黄褐色土 ソフトローム主体で
暗褐色土を含む。粘性は強くや
ゝしまっている。
- 第4層 暗褐色土 炭化、赤色、ローム
粒子を均等に含み、第1層に比
べ白色粒子を多く含む。しまり
があり粘性なし。
- 第4'層 暗褐色土 第4層とほぼ同一で
色調がやや、暗い。

SK-31 土層説明

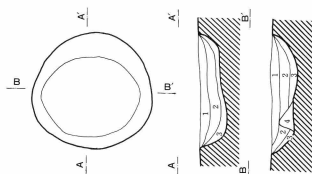
- 第1層 暗茶褐色土 赤色、白色、炭化、
ローム粒子を含む。粘性あり、
しまり弱い。
- 第2層 暗茶褐色土 第1層とほぼ同一
でロームブロックを含む。粘性
弱く、しまりあり。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒子を多量、
炭化粒子をや、多めに含む。し
まり粘性共あり。
- 第4層 黄褐色土 ローム、白色、赤色
粒子を含む。粘性あり。
- 第5層 茶褐色土 ローム、黒色、赤色
粒子を含む。しまりなし。

第12図 土坑(3): A種1類



第13図 土坑(4)：A種1類

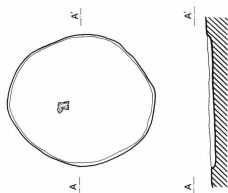
SK-12



SK-12 土層説明

- 第1層 暗褐色土 径1～1.5cm程のロームブロックをわずかに含み、ローム粒子、炭化粒子を含む。粘性はないが、しまりは強い。
- 第2層 暗褐色土 白色粒子、炭化粒子を含み、第1層に比べローム粒子を多く含む。粘性あり、しまりもややある。
- 第3層 黄褐色土 径2～3cm程のロームブロックを含み、ローム粒子も多量に混入している。粘性強く、しまりもある。
- 第4層 黄色土 ロームブロック主体。

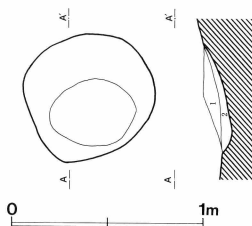
SK-25



SK-25 土層説明

- 第1層 や、明るい褐色土 ローム粒子、ロームブロックを濁点状に含む層。

SK-24b



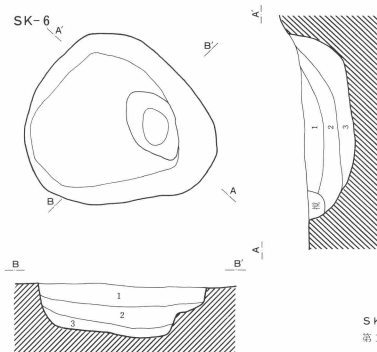
SK-24b 土層説明

- 第1層 茶褐色土 白色粒子を多量に含む。炭化物・土器粒子が微量含まれている。地山の風化したものが埋没土である。付近の地山と比較して、やや明るい。粒子は細かく、しまっている層。
- 第2層 褐色土 白色粒子とローム粒子を多量に含む。付近の地山の風化土である。粒子は細かく、しまりはない層。

明度比 明 2 > 1 暗

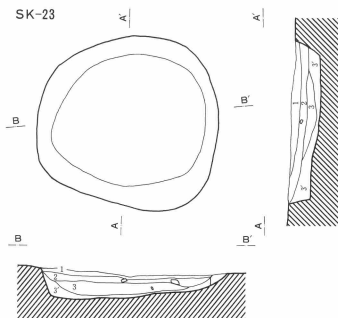


第14図 土坑(5): A種1類



SK-6 土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子を含む褐色土中にロームブロックが所々見られる。
- 第2層 明褐色土 褐色土中にロームブロック、漸移層土を濁点状に含み、第1層よりも明るい。
- 第3層 明褐色土 褐色土中にロームブロックを多く含むため、第1・2層よりも明るい。

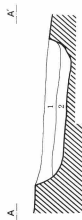
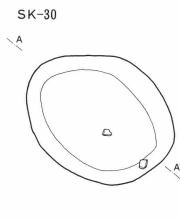
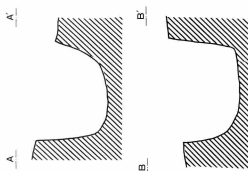
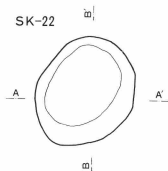


SK-23 土層説明

- 第1層 黒色土層 混入物は、ほとんどない。若干しまりがあるが、バサバサしていて粘性は、あまりない。
- 第2層 暗茶褐色土 白色粒子・片岩粒子(黄色、径0.3mm程度)が少量混じる。
- 第3層 暗褐色土 白色粒子・片岩粒子(黄色)が少量(第2層よりは多く)混じる。しまり、粘性は、ややある。
- 第3'層 暗褐色土 第3層に準ずる層で、第3層よりも白色粒子・片岩粒子は多い。

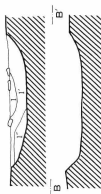
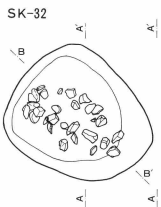
明度比 明 2>3>3'>1 暗
粘性比 強 3'>3>2>1 弱

第15図 土坑(6): A種2類



SK-30 土層説明

- 第1層 茶褐色土 黒色粒子・赤色粒子・ローム粒子を含む。しまりがあり、粘性の弱い層。
- 第2層 茶褐色土 炭化物粒子・赤色粒子・ローム粒子及び、ロームブロック（径1cm程）を含む層。粘性は、第1層より強いが、しまりは弱い。

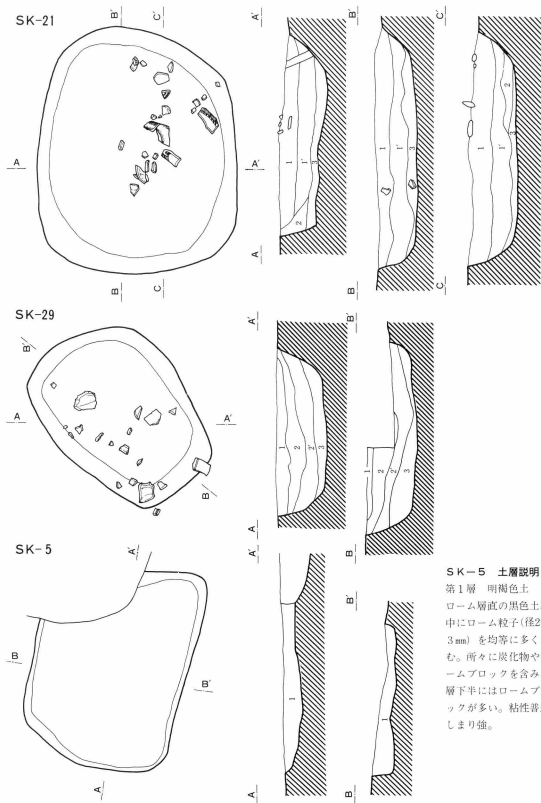


SK-32 土層説明

- 第1層 暗褐色土 白色粒子・黄色粒子・炭化物を含み、特に炭化物が多い。
- 第1'層 や、明るい暗褐色土 第1層よりロームを多く含む。
- 第1''層 暗褐色土 炭化物が少なく不均質な層。

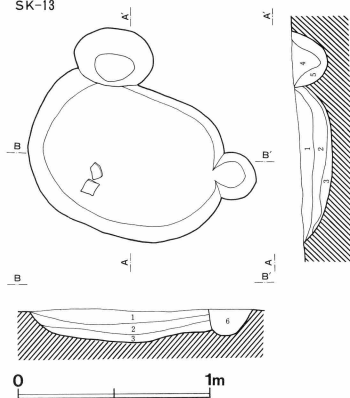


第16図 土坑(7): B種1類



第17図 土坑(8):B種2類

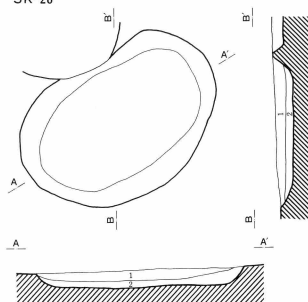
SK-13



SK-13 土層説明

- 第1層 暗褐色土 白色粒子、赤色ス
コリア、炭化粒子が混入し、
ローム粒子及びロームブロッ
クを含む。しまりはあるが粘
性がない。
- 第2層 暗褐色土 白色粒子、赤色ス
コリア、炭化粒子を含み、ロ
ーム粒子を混入している。第
1層に比べ、しまり・粘性共
にある。
- 第3層 黄褐色土 ソフトロームを多
く含み白色粒子、炭化粒子を
含む。粘性強くしまりもある。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子、白色
粒子を含む。しまりはあるが
粘性ない。
- 第5層 明褐色土 径0.1~0.3mm程の
ローム粒子及びソフトローム
ブロックを含む、粘性、し
まり共にある。
- 第6層 暗褐色土 ローム粒子、白色
粒子を含む。第1層に比べ粘
性、しまり共にない。

SK-28



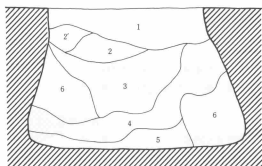
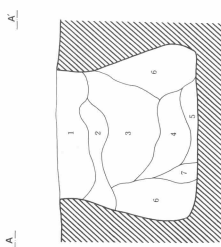
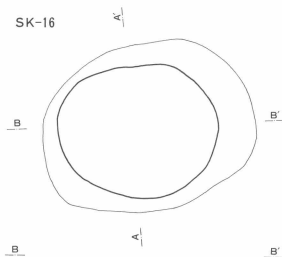
SK-28 土層説明

- 第1層 暗褐色土 土器片・ローム粒を濁点
状に含む層で、第2層より、白色粒
子が少ない。
- 第2層 褐色土 第1層より、ロームを多く
含むため明るい。壁際にロームブ
ロックが多い層。

明度比	明	2 > 1	確認面	暗
均質度	大	1 > 2		少

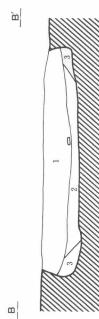
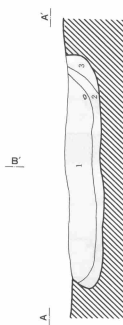
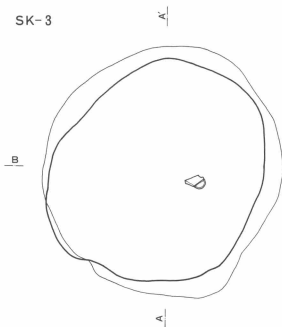
第18図 土坡(9): B種3類

SK-16



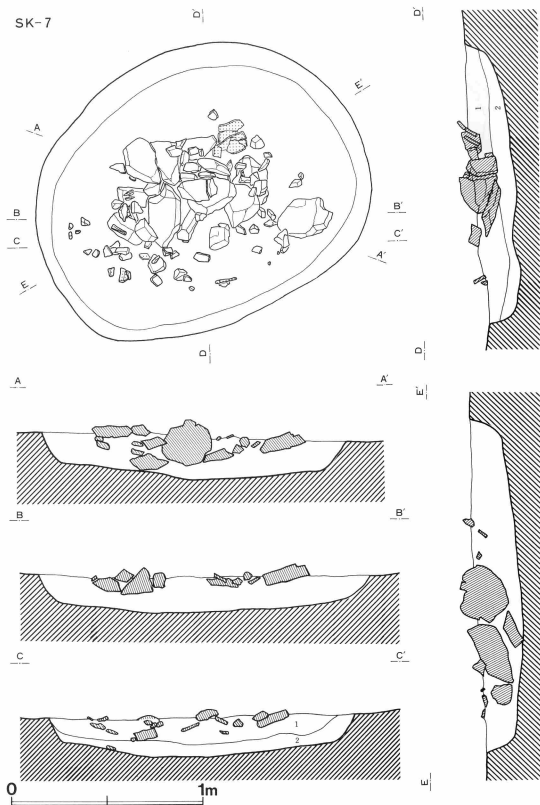
0 1m

SK-3



第19図 土坑(10)：C種およびA種3類

SK-7



第20図 土塚(11)：D種

SK-21 土層説明

第1層	黒褐色土	粘性強く、白色粒子を多く含み、焼土粒子が所々にみえる。確認面（黒褐色土層より若干明るくしまりのない層）である。
第1'層	黒褐色土	第1層よりや、明るく、白色粒子が少ない。
第2層	暗褐色土	第1層と同質で、ロームブロック（径4cm）や、漸移層に類似したブロックを、まだら状に含む不均質な層。
第3層	や、明るい褐色土	第1層よりも明るく、白色粒子を多く含む。褐色土層中にロームが濁点状に含まれている不均質な層。
明度比	明	3 > 2 > 1' > 1 > 確認面 暗
白色粒子	多	確認面=1' > 1 > 2 > 3 少

SK-29 土層説明

第1層	褐色土	白色粒子、炭化物粒子を少量含む、しまりのない層。
第2層	暗褐色土	白色粒子、地山礫粒、炭化物粒子を比較的多量に含む。
第2'層	暗褐色土	炭化物粒子、白色粒子を少量含む層。
第3層	黒褐色土	白色粒子、炭化物粒子を少量含む。地山に近似した層。
明度比	明	1 > 2' > 2 > 3 暗

SK-7 土層説明

第1層	粘質褐色土	粘質でしまり強く、粘質ロームを主成分とする。
第2層	砂質粘性褐色土	第1層よりわずかにザラザラしている。

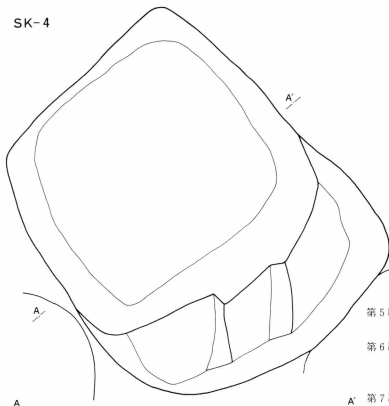
SK-16 土層説明

第1層	暗褐色土	白色粒子を全体に含み、ローム粒子を少量、焼土粒子をまばらに含む。粘性しまり共にあり。
第2層	暗黄褐色土	径2～3mmのローム粒子を多量に含み、白色粒子をまばらに含む。粘性なくしまりもない。
第2'層	暗黄褐色土	第2層に類似するが、色調暗く焼土粒子を含む。粘性なくしまりがある。
第3層	暗褐色土	径1～2cmのロームブロックをまばらに含み、焼土粒子、炭化粒子を少量含む。粘性なくしまりがある。
第4層	暗褐色土	径1～2mmのローム粒子及び白色粒子を少量含む。粘性がありしまりが無い。色調は3層に比べ明るい。
第5層	黒褐色土	径1～2mmのローム粒子を少量含む。粘性がありしまりが無い。
第6層	黄褐色土	径5～10cmのロームブロックをまばらに含みローム粒子を多量に含む。粘性しまり共なし。
第7層	暗黄褐色土	径1～2mmのローム粒子を多量に含む。粘性がありしまりが無い。

SK-3 土層説明

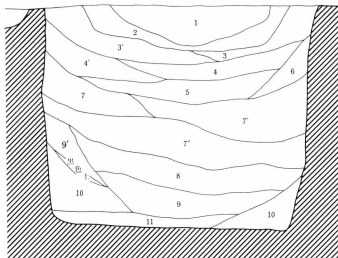
第1層	褐色土	黒色土及び褐色土中にロームブロック、ローム粒子がわずかに含まれている。しまりが強く、粘性は強くない。
第2層	や、明るい褐色土	1層と構成成分を同じにするが、ロームブロック（径1cm）を濁点状に多く含み、1層より色調は明るい。
第3層	明褐色土	2層よりも明るく、ロームブロックにより構成されている。しかも2層よりもロームブロックは大きい（径2cm）。

SK-4



A

A'



0

1m

SK-4 土層説明

- 第1層 や、暗い褐色土 ロームや粘質の褐色土を主に径3cm程の礫を含む。
- 第2層 や、明るい褐色土 1層に類似するが、1層よりロームを多く含みしまり、粘性共に強い。
- 第3層 や、暗い褐色土 小礫を比較的多く含む黒色土を主とし、わずかにロームブロックを含む。
- 第3'層 褐色土 第3層より明るく粘性が強い。
- 第4層 や、暗い褐色土 炭化物を所々に含むため、3層より黒みをおびる。
- 第4'層 や、暗い褐色土 第3層に類似している。
- 第5層 やや暗い褐色土 成分は3・4層と類似し、4層より明るい。
- 第6層 や、明るい褐色土 ロームを比較的多く含む砂質の層で、第5層より礫が少なく明るい。
- 第7層 褐色土 小礫を比較的多く含む褐色土を主とし、ロームや粘土を均等に含む。
- 第7'層 褐色土 第7層と第7'層との中間的様相を示す。
- 第7''層 や、暗い褐色土 7層と類似し、7層より暗く粘性が弱い。
- 第8層 や、明るい褐色土 ローム、褐色土及び黒色土の中にロームブロックが濁点状に混入。
- 第9層 や、明るい褐色土 第8層に類似し、小礫やロームブロックを含む。
- 第10層 黄褐色土 ローム及び褐色土の二次堆積で礫・粘質の土を含まない。ロームを主成分とするしまりのない層。所によりロームブロックを含む。
- 第11層 暗褐色土 粘性のあるローム、黒色土で砂質の層。

第21図 土坑(12)：その他

第Ⅲ章 縄文時代の遺物の概要

1. 出土土器の概要

本遺跡の縄文期の住居址は、8軒の全てが重複して検出されている。前期後葉および中期中葉から中期末葉までの土器が見られるが主体を占めるのは勝坂式後半から加曽利EⅢ式である。8軒の住居址のそれぞれの形成時期は、勝坂期1軒、加曽利EⅠ期2軒、加曽利EⅡ期3軒、加曽利EⅢ期2軒である。

分類 本遺跡から出土した土器は、文様要素・構成によって以下のように分類される。なお、大形破片及び完形品については章末に観察表を付した。



第22図
第Ⅰ群土器(1/5)

第1群土器 諸磯b式に属するもの。(第22図1、2)

これらは地文に縄文を用い、半截竹管による意匠をもつもの。D-8区周辺より比較的まとまって検出された。他に2号住居土からも出土している。

第2群土器 勝坂式に属するもの(図版21～5、第31、32図、第33図1～9、第49図、第53、54図)

a類 地文に縄文が施されないもの。

本類には、隆帯側面に爪形が施されるもの(第31図1～3、第32図1)、隆帯上に刻み目が施されるもの(第31図10～20、第32図14～16、第49図1～10、第53図3～23)、半肉形状沈線によるモチーフがあるもの(第32図4～10、17、18、第49図19、20、第54図15～18)などがある。

b類 地文に縄文・撚糸文が施されるもの。

本類には、隆帯上に刻み目が施されるもの(第33図1～3、5～9、第49図16、第54図1～3、6)、第54図13のように曲線の隆帯が施されているものなどがある。第33図5と7は同一個体で隆帯上に綾杉状の刻み目が施されている。

第3群土器 阿玉台式に属するもの(第31図4～9、第53図31、32)

いずれも胎土に金雲母を含んでいる。第53図31は把手である。

第4群土器 加曽利E式に属するもの。

a類 頸部無文帯をもつもの(第33図12～17、第34図1～16、第48図6～9、第55図1～9)

口縁部文様は第33図14のように隆帯により横S字状文が描かれている。地文は縄文が多いが55図2のように撚糸文を用いる例も見られる。本類は主に加曽利EⅠ式に比定される。

b類 頸部無文帯のないもの(第34図17～21、第55図10～13) 口縁部文様帯は胴部文様帯と明瞭な区画をもつ(第25図2、5、第26図7、第30図1) 口縁部文様は沈線による渦巻文が描かれるもの(第34図20、21、第55図10、12、13)。地文は第34図17、第55図10、11のように縄文を用いている。

本類は、主に加曽利EⅡ式に比定される。

e 類 口縁部文様帯と胴部文様帯の区画が明瞭でないもの(第28図1、27図1～4、第35図1、2、第46図1～4、第56図、第57図1～4)

口縁部文様は渦巻文(第34図23、31、第46図8、第56図11～19)や第46図1～4のような栴円文が描かれている。第27図1は、それらの組み合わせによるモチーフをもっている。また第34図22～31のような波状口縁が多く、第34図24、25や第35図1のように外反するものや第34図30、第35図1のように口唇部への施文がされるものがある。地文は27図1、第28図1のように縄文を用いている。

本類は主に加曽利EⅢ式に含まれるものである。

d 類 口縁部文様帯のないもの(第35図9、10、第46図10、11、第57図5～8、10～20)

第35図9、10は逆U字状沈線、第35図9、第56図20はワラビ手状沈線が施されている。本類には、口縁直下に刺突を廻らすもの(第35図12、第57図11～13)、沈線を廻らすもの(第35図17～23)、隆帯を廻らすもの(第35図14～16、第57図15、16)、縄文を施すもの(第35図24～27、第57図7)などがある。

本類は加曽利EⅢ式に含まれるものであるが一部はⅣ式に含まれるものと思われる。

第5群土器 いわゆる連弧文土器

a 類 2～3本1単位の弧線文を横位に連続させているもの(第26図1、3第39図、第40図1～20、第59図1～18、20～26)

口縁部と頸部に沈線を廻らすもの(第25図3、第26図3、第40図8～10)と交互刺突を廻らすもの(第24図1、第26図1、第26図5、第39図1、2)がある。地文は主に条線・撚糸文であるが沈線を用いるもの(第39図24、第59図23、24)や縄文を用いるもの(第25図1、第26図2、第40図1～4)も見られる。連弧文と頸部との間に“区画”を施しているもの(第25図3、第40図5～12、第52図24)や、連弧文の波頂部もしくは2段目に渦を巻くもの(第39図24、第24図1)、区画の間に小渦巻を配しているもの(第59図25、26)、胴下半部に懸垂文を施すもの(第59図21、22)などがある。

b 類 連弧文が波状もしくは単位文的モチーフのもの(第26図4、第40図21～26、第59図19) 本類は連弧文土器の中でも5群a類より後出のものである。

第6群土器 いわゆる曾利系に属するもの(第25図6、第26図6、第41図、第50図18～22、第60図)

地文は主に条線(第25図6、第41図19～22)もしくは沈線(第41図1～3、8～18)を用いている。第41図1、3は口縁部文様帯区画内に縦位へ斜位の沈線が充填されており、胴部には第41図8～18に見られるような綾杉状沈線が施されている。また第60図24～30は地文に列点が施されているものである。

以上のように出土土器の分類をおこなったが本遺跡出土土器一般に見られる

属性について若干の補足を加えておきたい。

1. 色調

2 群が暗赤褐色・暗褐色を呈しているのに対し 4 群は茶褐色・黄褐色のものが多い。5 群は暗茶褐色が多いが b 類には茶褐色も見られる。

2. 胎土

本遺跡出土土器全体の特徵として結晶片岩の粒子を多く含んでいることが挙げられる。その他角閃石・砂粒などは当地域の土器に一般的に認めることができるが、白色針状物質を多量に混入しているものがあり注意を要する。

3. 調整手法

5 群と 6 群の土器は器面調整が粗く 4 群はていねいにおこなわれる特徴が認められる。特に 4 群 c 類における調整・施文の最終工程での外面の研磨・ナデが顕著に見られる。また無文の浅鉢（第45図11～33）も特に口縁から内面にかけて研磨がよくおこなわれている。

4. 施文手法・ 文様の特徴

4 群は c 類に於て沈線による区画後に縄文を充填する手法をとる。この c 類は口縁部文様が退化しつつも楕円文や渦巻文が残る加曾利 E Ⅲ式でも(古)段階に相当する。また胴部文様の発達が認められる時期であり調整・施文手法との関連が注目される。これに対応するように 6 群でも綾杉状沈線の充填手法を用いていることが認められる。5 群は地文の縦効果と対比的に文様モチーフが横位に展開するを基本としている。

次に遺構別に各土器群の様相について触れておきたい。

第 1 号住居址

本住居址出土の土器は 4 群と 5 群が主体となっている。第30図6～13が 5 群 a 類に相当し第25図1の炉体土器も 5 群 a 類である。4 群では第30図1、14～16が b 類に相当する。これらのことから本住居址の時期は加曾利 E Ⅱ式期のものと推定される。第30図23・24は 4 群 c 類、第25図6、第30図2・4は 6 群である。

第 2 号住居址

本住居址出土の土器は 5 群 a 類が主体となっている。第26図1の炉体土器も 5 群 a 類であり、本住居址の時期は加曾利 E Ⅱ式期のものと認められる。2 群・4 群 a 類及び 6 群の出土は多いが 3 群・4 群 b 類の出土は少量である。その他深鉢以外の器種（第43図）や無文の深鉢（第45図1～10）及び浅鉢（第45図11～33）の破片も比較的多く出土しているが復元可能なものはない。

第 3 号住居址

本住居址は、第28図2の炉体土器により時期は加曾利 E Ⅲ式(古)のものと推定される。従って第2号住居址出土土器としたもののうちで 4 群 c 類・5 群 b 類・6 群の一部は第3号住居址に帰属する可能性が高い。また本住居址は、今回の調査の中で最も新しいことが推定される。

第 4 号住居址

本住居址出土の土器は、4 群 c 類が主体となっており時期は加曾利 E Ⅲ式(古)のものと推定される。6 群（第47図1～6、12・13・15）は比較的多く認められるが 5 群（第47図16・17）はわずかである。その他に 4 群 a 類（第48図6～9）d 類（第46図10・11）の出土が認められる。

土坑出土土器

勝坂期の土坑が多く、SK-10、SK-21、SK-33などでまとまって出土してい

る。ほとんどが2群a類でb類は第49図16・21・22のみである。

加曾利E期の土埴は、SK-7、SK-8、SK-17、SK-19、などが検出され、SK-7で4群c類及びd類、SK-8で4群a類、SK-17で4群c類の出土が認められる。SK-19は、胴部破片のみの出土であるが4群より6群が多い傾向が認められる。以下に各土埴出土土器と図版との照合表を掲載した。(第3表)

第2号

土層捻転址

第26図7及び第52図32の土器が出土している。前者は4群b類、後者は2群a類に属する。本遺構は2号住居土形成後の土層捻転址で、前者は3号住、後者は2号住に帰属する可能性が高い。

以上各遺構別に出土土器について概観してきたがここで土器群の混在が顕著な第2号住居址及び第4号住居址について検討しておきたい。

まず第2号住居址フク土に認められる4群c類は、第3号住居址に属するものと考えられる。その上で出土土器の傾向をみると、炉体土器でもある5群a類に次いで2群a類及び4群a類が多く認められる。第2号住居址は、未調査の第2D号住居址を除き3軒の存在が確認されたが、このうち最も新しいものは第2A号住居址でその時期は、炉体土器により推定される。また第2A号住居址に切られている第2B・2C号住居址の時期に帰属するものは、それぞれ第2A号住居址フク土で多く認められる2群a類及び4群a類がこれに相当すると推定される。

第4号住居址は、出土土器の主体が4群c類にあり、加曾利EⅢ式(古)期に比定される。第4B号住居址の帰属の時期は、その切り合い関係から2B・4A→4Bの変遷は確実であり、このことから4B号住居址の時期は、少なくとも勝坂期後半以後加曾利EⅢ期以前であると推定できる。ここでは、第4号住居址出土土器のうち第48図6～9がこれに相当するものと考えられ、この4群a類の土器を住居形成期のものと推定しておきたい。

各住居址の時期 以上をまとめて住居址の変遷を想定すると第4表のようになる。

土埴番号	図版掲載番号	土埴番号	図版掲載番号
SK-1	22図 3～9、16	SK-19	21図 14～22
2	23 1、2		22 7
3	23 3～5	20	23 15
4	23 6	21	20 1～14
6	23 7	23	23 16
7	21 1～9	24	23 18
8	21 10、11	28	23 19
9	23 8	29	23 20～26
10	23 9～12	30	23 27
13	23 13	31	23 28～30
14	22 10～15、7～26、28～30	32	23 31
15	2 14	33	20 15～22 図版21-5
17	21 12、13	34	22 1、2

第3表

土埴図版照応表

第4表

各住居址の
変遷(推定)

分類	2	4a	4a	4b	4b	4b	4c	4c
推定時期	勝坂	加曾利EⅠ	加EⅠ	加EⅡ	加EⅡ	加EⅡ	加EⅢ	加EⅢ
住居址	2B	4B	2C	2D	2A	1	4A	3
重複関係								

以上出土土器について概観したが、他の幾つかの特徴的な土器について補足しておきたい。

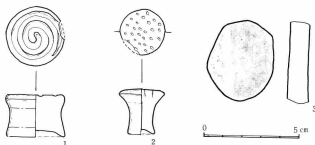
第39図24の土器は、連弧文土器として分類をおこなったが、地文に綾杉状の沈線を充填していることは注意されよう。そのことは曾利系からの影響が強く作用していたことが推定される。またSK-33で検出された第29図1は大木8a式(古)の強い影響下で成立したものであろう。

これら異系統土器の接触によって生じた土器の存在は、先に胎土の観察によって見られた遠隔地からの搬入品の存在とともに、第V章で述べられている領域集団の問題と深い関連性があると推定されるのである。(江原 英)

2. 出土土製品の概要

本遺跡から出土した土製品は以下の3点である。(第23図)。

1. 1号住居址出土の耳栓で、全体としてつづ



第23図 土製品

み状を呈し、浅い沈線による渦巻が施される。背面は剥落しているが、その周縁に側面から移行する平坦な面の一部が残存している。色調は上面が黒色、側面は黄褐色、剥落部は暗褐色を呈し、全面入念なナデ調整が施される。胎土は緻密で角閃石、白色粒子を含む。

2. 4号住居址出土の耳栓である。1.よりも小型で上面からやや窄まりながら内湾し、径の小さな裏面へと移行する。上面には細い棒状工具による刺突が施され、裏面はやや凹む。色調は概ね茶褐色を呈し、入念なナデ調整が施される。胎土はやや大粒の片岩粒や砂粒、そして雲母粒を含む。1・2共に覆土中からの出土で詳細な帰属時期は明確にし得ないが、他の出土遺物等から推定すると加曾利EⅡ～Ⅲ式の所産であろう。

3. 4号住居址出土の所謂土製円板である。加曾利EⅡ式土器の胴部破片を利用し、側面を磨ってやや楕円形に整形している。(峰村 篤)

橋ノ入遺跡出土土器観察表

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び成形、調整手法の特徴	施文手法と文様の特徴	色 調	胎土、備考
25-1	5-a	頸部径18 現存高12	頸部は緩やかに立ち上がり、頸部から外反する深鉢。上端欠損部頭状の輪積痕。内面荒い横位のナデ調整。	地文縄文RL(主に斜位回転)→推定3本1組の連弧文(8単位)・頸部区画文→胴部2本1組の懸垂文(対向して2単位)とその間に其々間隔を置いて2本の縦位蛇行文(計4単位)	⑤赤茶褐色 ⑥淡茶褐色 ⑦茶褐色 ⑧淡茶褐色	1号住炉体土器 片岩粒子、白色粒子を含み脆弱
25-2	4-b	口径(26.5) 現存高14	口縁部が直立気味になるキャリパー型の深鉢。内面入念な横位のナデ調整→口辺部横位の研磨。	口縁部：隆帯、凹線による区画文、渦巻文(隆帯直線ナゾリ)→胴部：若干左傾する2本1組の縦位沈線。縄文は口縁部胴部共にRLの充墳施文(口縁部横位または斜位、胴部縦位回転)で、胴部はある程度粘土が乾燥した後雑に施文しており、無文帯へのはみ出しが顕著。胴部無文帯はこの後縦位に研磨され、はみ出した縄文も磨消している。	⑤暗茶褐色～茶褐色 ⑥茶褐色	1号住 片岩粒子、雲母、砂粒。
25-3	5-a	口径(37.5) 現存高12	口縁部が外反する深鉢。下端欠損部に凹み状の輪積痕。内面入念な横位のナデ調整。	地文縄文RL(縦位回転)→口縁部区画文[頸部区画文]→上段連弧文→下段連弧文・棒状文→沈線ナゾリ	⑤淡茶褐色 ⑥黄褐色 ⑦茶褐色～淡茶褐色	2号住 片岩粒子、角閃石、砂粒、一部加熱を受けて赤化
25-4	6	口径(16) 現存高55	頸部から外反し、緩やかな波状口縁(推定4単位)を呈する深鉢。胴部は欠損するが、若干膨らむ器形を呈すると思われる。内外面共横位のヘラナデ。	口縁部は無文。頸部横位隆帯貼付→隆帯上小突起貼付(口縁部波長部と対応し、推定4単位)→隆帯上刻み、胴部地文(条線?)→隆帯下に横位沈線(一部胴部へ抜けていく)。	⑤暗茶褐色 ⑥暗茶褐色 ⑦淡茶褐色	2号住 片岩粒子、石英、長石、角閃石、砂粒
25-5	4-b	口径(14) 現存高(突起)9	小形の深鉢。口縁部には小突起を有する(渦巻文、小突起が2単位づつ交互に配されると思われる、推定4単位)。内面上半横位の研磨→下半横位の研磨。	口縁部：渦巻文、小突起間に南門形区画→区画内刻み状の縦位短沈線[→]胴部：地文RL(縦位回転)→口縁部渦巻及び小突起下から3本1組の懸垂文→沈線ナゾリ、口縁部無文部研磨	⑤淡茶褐色 ⑥茶褐色 ⑦黒茶褐色 ⑧黒褐色	2号住 片岩粒子、角閃石、砂粒、
25-6	6	口径25 現存高18.5	口縁部が外反する深鉢で、4単位の小突起を有する。内面胴部下半横位のナデ調整、上半横位のナデ調整(胴部付近に左→右のケズリが認められナデ調整に先行する)。外面口縁部左→右のケズリ→横位のナデ調整	口縁部は無文。頸部下縁杉状条線(地文)→胴部4本の横位区画文、うち2本の交互刺突による蛇行文→胴部渦巻文、連弧文(5単位)→頸部区画文下及び渦巻文下に縦位蛇行文(共に5単位で、2本沈線の交互刺突による)。	⑤淡茶褐色 ⑥茶褐色 ⑦黄褐色	1号住 片岩粒子、角閃石、砂粒、白色粒子
25-7	4	口径(17.5) 現存高11	所謂有孔鋳付土器の変形で、肩部には小型の把手が連続して配される。内外面共入念な研磨(内面、外面口縁部横位)	半肉彫り手法により曲線的なモチーフを掘く。内面に沈線の突出は認められない。	⑤茶褐色～暗茶褐色 ⑥暗茶褐色	4号住 片岩粒子、砂粒を含み緻密全面赤彩

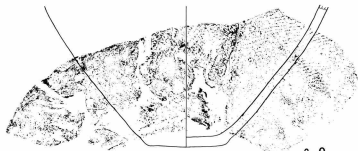
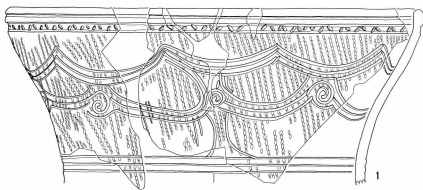
番号	分類	大きさ (cm)	器形及び成形、調整手法の特徴	施文手法と文様の特徴	色 調	胎土、備考
25-8	4-a	最大径(54) 最存高12	深鉢。内面横位のヘラナデ	燃糸文L(縦位回転)→横位隆帯貼付(上面ナデ調整、また側縁を一部指頭により押圧)→縦位隆帯貼付(上面ナデ調整、一部押圧)→無文部横位のヘラナデ(隆帯側縁施状工具によるナゾリ)	㉔赤茶褐色 ㉕暗茶褐色 ㉖茶褐色～ 暗茶褐色	2号住 片岩粒と雲母を多く含む。 石英、砂粒、
26-1	5-a	口径27 現存高14	頸部から緩やかに外反する深鉢。内面横位のナデ調整	地文燃糸文L(縦位回転)→口縁部4本の横位区画文、うち2本を交互刺突・(頸部区画文)→3本(一部2本)1組の連弧文(8単位)→連弧文下2本(一部一本)1組の棒状文→沈線一部ナゾリ	㉔茶褐色 ㉕淡茶褐色 ㉖暗茶褐色	2号住炉体土器 片岩粒子、石英、砂粒を含み脆弱。内面荒れている。
26-2	5	口径(17) 現存高13	胴部からほぼ直線的に立ち上がる深鉢。内面口辺部～口唇部入念な横位のヘラナデ→胴部縦位の入念なヘラナデ	地文縄文RL(縦位回転)→口縁部区画文、渦巻文、連弧文→沈線ナゾリ	㉔茶褐色～ 暗茶褐色 ㉕暗褐色 ㉖暗茶褐色	2号住
26-3	5-a	口径(30) 現存高11.5	頸部から緩やかに外反する深鉢で、胴部はやや膨らむと思われる。内面横位のナデ調整→口辺部～口唇部荒い横位の研磨	地文燃糸文L(縦位回転)→口縁部区画文、連弧文、頸部区画文	㉔暗茶褐色 ㉕黒褐色 ㉖淡茶褐色	2号住
26-4	5-b	口径(17) 現存高13	胴部は緩やかに外反し、口縁部に至ってやや内湾する深鉢。内面入念な横位のナデ調整→口唇部研磨	地文縄文RL(縦位もしくは斜位回転で、下半部斜位回転の傾向が強い)→口縁部2本の横位区画文(沈線内連続刺突)・上下波状文→逆U字状文→沈線ナゾリ	㉔茶褐色～ 暗茶褐色 ㉕暗褐色 ㉖暗茶褐色	2号住 片岩粒子、石英、砂粒
26-5	5-a	口径(49.5) 現存高11.5	若干内湾気味の口縁部を持つ深鉢。内面横位の研磨、外面口縁部横位の研磨	地文、やや細めの燃紐を密に巻いた原体を用いた燃糸文L(斜位回転)→口縁部4本の横位区画文、うち2本を交互刺突→上下の連弧文	㉔茶褐色～ 暗茶褐色 ㉕茶褐色	2号住 片岩粒子、雲母(多)、砂粒
26-6	6	口径(23) 現存高20	緩やかに外湾する口縁部からほぼ直線的な胴部へと移行し底部付近で窄まる深鉢。内面胴下半部縦位の研磨、上半部～口縁部横位の研磨	地文縄文LR(縦位回転)→口縁部区画文・波状文・胴部横位隆帯貼付[→隆帯の上側縁ナゾリ→上面指頭により時計回りに押圧]→縦位蛇行隆帯貼付[→上面ナデ調整、右側縁一部ナゾリ]	㉔黒褐色～ 茶褐色 ㉕茶褐色 ㉖暗茶褐色	2号住 片岩粒子、砂粒
26-7	4-b	口径(30.5) 現存高23	胴部から緩やかに外反していく深鉢。左傾する輪痕が認められる。内面胴上半部～口縁部横磨→下半部縦位の研磨(共に入念で器面は平滑)	口縁部：隆帯と沈線による区画文、渦巻文(隆帯側縁ナゾリ)→胴部：2本1組の縦位沈線(一ヶ所3本1組がある)、また縄文RLR(口縁部、胴部共縦位回転)を充填→口縁部及び胴部無文帯研磨(口縁部主に横位、胴部縦位、沈線ナゾリ)	㉔茶褐色 ㉕暗茶褐色 ㉖赤茶褐色	2号土層砂土器 址(2号住の土器)
27-1	4-c	口径42	若干内湾気味の口縁部を有する	口縁部：隆帯と凹線による区画文、渦巻	㉔黒茶褐	3号住

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び成形、調整手法の特徴	施文手法と文様の特徴	色 調	胎土、備考
27-2	4-e	現存高28 口径(20.4) 現存高18	キャリパー型の深鉢。右傾する輪積痕が認められる。内面横位の研磨。	文(隆帯側縁ナゾリ)→縄文RL(横位回転)を充填→空白部、凹線内研磨(凹線ナゾリ)、また胴部; 逆U字状文、蕨手文→縄文RL(縦位回転)を充填→空白部、凹線内縦位の研磨(凹線ナゾリ)	色 ㊦赤茶褐色	片岩粒子、石英、角閃石、砂粒
27-3	4-e	口径(22) 現存高17	内湾する口縁部を有するキャリパー型の深鉢。口縁部に小突起が付く。内面入念な横位のナデ調整→口唇部入念な研磨	口縁部; 小突起を波頂部とする波状文→縄文LR(縦位回転)を充填→沈線ナゾリ、また胴部; 口縁部突起下に逆U字状文及びその間に「S」状文→縄文LR(縦位回転)を充填→空白部入念な縦位のナデ調整(沈線ナゾリ)	㊦茶褐色 ㊦黒褐色 ㊦淡茶褐色	3号住 片岩粒子、角閃石、砂粒
27-4	4-e	口径(23) 現存高(波頂部から)9	波状口縁部を呈する深鉢。内面横位の研磨(波状部下外湾部に右→左のケズリが認められ研磨に先行する)。外面波状部、形状に沿って横位～斜位のヘラナデ	口縁部の波状文に胴部の逆U字状文が入り組み、空白部には蕨手文が垂下。また縄文はLR(縦位回転)の充填施文→空白部縦位のナデ調整、沈線ナゾリ	㊦㊦㊦茶褐色	3号住 片岩粒子、石英、角閃石、砂粒
28-1	4-e	口径(46) 現存高41	やや内湾する口縁部を有するキャリパー型の大型深鉢。内面左→右のケズリ→横位のナデ調整→口縁部入念なヘラナデ	口縁部; 平坦な隆帯と凹線により区画文、渦巻文が施され、2個1単位の小渦文が付加される→胴部; 凹線により器面を縦位に分割、また充填縄文(口縁部は図上の下2つの区画文がRL横位～斜位回転、上の渦巻文がLR横位回転。胴部はLR縦位回転)が施文される→胴部各区画内に蕨手文→口縁部及び胴部無文帯ヘラナデ(胴部縦位、凹線ナゾリ)	㊦黄褐色～暗褐色 ㊦暗褐色	3号住埋壘上 片岩粒子、石英、長石、砂粒、白色粒子
28-2	4-c	口径49 現存高31	内湾する口縁部を有するキャリパー型の大型深鉢。内面横位のナデ調整	口縁部; 隆帯、凹線による区画文、渦巻文〔(渦巻文+区画文)+(渦巻文+区画文)+(階円形区画文)+(渦巻文+区画文)+(階円形区画文)〕(下線は図示した部分)→胴部; 凹線により器面を縦位に分割、また充填縄文RL(口縁部横位、胴部縦位回転)が施される(胴部縄文帯、無文帯は其々12単位づつ)→口縁部、胴部無文帯ナデ調整(口縁部主に横位、胴部縦位、凹線ナゾリ)	㊦茶褐色～暗茶褐色 ㊦暗茶褐色 ㊦淡茶褐色 ㊦暗褐色	3号住埋壘 片岩粒子、砂粒 胴部下端打ち欠き
29		口径20.5 現存高(把手最頂部～)	所謂キャリパー型の口縁部を有する深鉢。対向する大型橋状把手が配され、また頸部にも段と	橋状把手; 下部(橋部)は縦位の隆線列。その下端両側から口縁部まで、4または3本の凹線列が施される。上部(突起部)	㊦㊦茶褐色 ㊦㊦茶褐色 ㊦茶褐色	33号土壇 片岩粒子、石英、長石、砂

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び成形、調整手法の特徴	施文手法と文様の特徴	色 調	胎土、備考
		20.5、(口縁部～) 11.5	凹線により作出された凸帯上に3単位の小突起が附加される。胴部は欠損するが、やや膨らむ形態を呈すると思われる。下端欠損部に凹み状の輪積痕。内面入念な横位のヘラナデ→口縁部研磨	は内外面共に立体的な横位「S」字文を中心とするモチーフ。上端にも円環状及び蛇口状の突起附加される。尚図上段段の把手の隆帯列右端から橋部上面には孔が貫通している。頸部：凸帯上3単位の円環状小突起→凸帯上横位沈線、上記の工程の後、地文縄文RL（主に横位回転）→口縁部区画→口縁部区画から垂下するモチーフ（半弧→縦位沈線）・橋状把手から垂下するモチーフ		粒を含み緻密
図版21-5	2-a	最大径(35) 現存高44	直線的に、やや外側へ開く円筒状を呈する深鉢。内面右→左のケズリ→横位のナデ	文様は縦位を基調として展開する。上面に刻み等を有する隆帯が施され、空白部を区画で充填していくモチーフが基本となる。そして区画内にもまた刻み列、半截竹管による連続刺突、三叉文等で充填される。文様施文後、入念なナデ調整が行なわれる。	⑤暗茶褐色 ⑥淡茶褐色	31号土壇 片岩粒子、長石、角閃石、砂粒
24-1	5-a	口径(43) 現存高18	頸部から緩やかに外反して口縁部に至ってやや直立気味になる深鉢。内面横位のナデ調整→口縁部研磨	地文擦糸文L（縦位回転）→口縁部3本の横位区画文、うち2本を刺突（施文具を傾けて交互刺突し、「ハ」の字状文を表出していく）・[頸部区画文]・3本1組の連弧文（推定8～9単位）→下段渦巻文を描き、その末端を（恐らく右→左に）延長するモチーフを連続し、上下に側線を加える→下段渦巻文付近から頸部区画文へ弧線を垂下させる	⑤暗茶褐色 ⑥淡茶褐色 ⑦茶褐色	N-13表土 片岩粒子、砂粒、白色粒子
24-2	4	最大径(30) 底径(8.5) 現存高15	底部から大きく外側へ開く深鉢。内面横位のナデ調整	一部縄文RL（縦位回転）を荒く施文	⑤茶褐色～ 暗茶褐色 （底面暗褐色） ⑥⑦暗茶褐色	H-8表土 大粒の片岩粒子を多く含む。 雲母、角閃石、脆弱 一部加熱を受けて赤化
43-10	4	——	口縁部が直立気味の壺形を呈し、口唇部は平坦に整形される。内外面共に横位の入念な研磨	内外面同一の文様が施される。2本の横位沈線→上下交互の列点文→研磨	⑤⑥茶褐色 ⑦暗褐色	2号住 片岩粒子、雲母、角閃石、白色粒子を含み緻密 全面赤彩
43-19	4	最大径(36) 現存高11	鉢。内外面共に入念な横位のヘラナデ	無文（赤色顔料により渦巻状のモチーフが描かれていたと思われるが、顔料の剥落激しく不明）	⑤⑥⑦黒褐色	2号住 片岩粒子、砂粒、全面赤彩

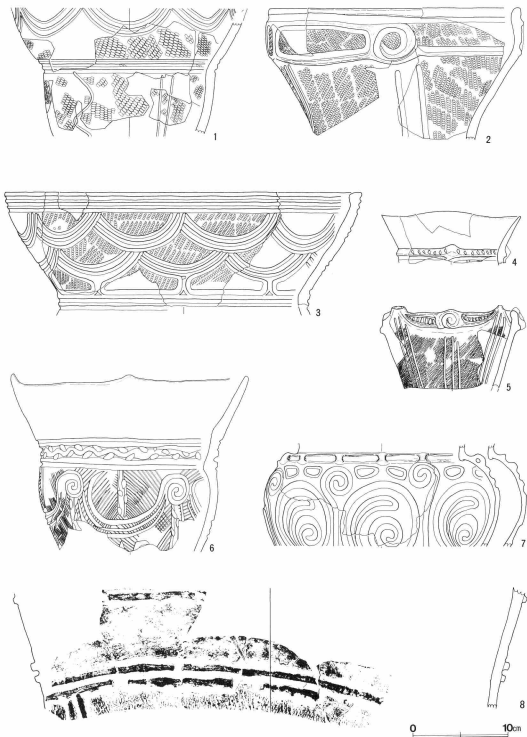
番号	分類	大きさ (cm)	器形及び成形・調整手法の特徴	施文手法と文様の特徴	色 調	胎土、備考
44-12	4	最大径(50) 底径(11.5) 現存高26	底部から外側へ広く深鉢。内面横位のナデ調整	地文、上半部撫糸文L（縦位回転）、下半部条線（総条体条痕？）→3本1組の懸垂文	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色 ㊨淡茶褐色 ～茶褐色	2号住床直片岩粒子と雲母を多く含む砂粒
46-16	4	最大径16.5 現存高8.5	キャリバー形を呈する深鉢。内面下半縦位、上半横のナデ調整	2本1組の沈線により器面を縦位に分割→縦位回転を充填（縄文帯、無文帯其々13単位づつ）→無文部縦位のヘラナデ（沈線ナゾリ）	㊦㊧㊨茶褐色 色	4号住片岩粒子、長石、角閃石、砂粒
48-23	4	最大径15 底径4 現存高10.5	底部から緩やかに湾曲しながら立ち上がる深鉢。内面縦位のナデ調整	2本または3本1組の沈線により器面を縦位に分割→縄文L.R（縦位回転）を充填（縄文帯、無文帯其々7単位づつ）→無文部縦位のナデ調整	㊦茶褐色～暗茶褐色 ㊧暗茶褐色 ㊨淡茶褐色 ～黒褐色	4号住片岩粒子、角閃石、砂粒、表面荒れていて観察が困難
48-24	4	最大径11.5 底径5.5 現存高6	キャリバー形を呈する深鉢。内面縦位のヘラナデ	2本1組の沈線により器面を縦位に分割→縄文RL（縦位回転）を充填（縄文帯、無文帯其々8単位づつ）→縄文帯に縦位蛇行文→無文部縦位のナデ調整（沈線ナゾリ）	㊦茶褐色～暗茶褐色 ㊧暗茶褐色 ㊨黒褐色	4号住片岩粒子、砂粒、白色粒子
50-10	4	——	大形深鉢。上下欠損部に輪積痕。上欠損部に棒状工具による刻み列があり、下欠損部にはその隔壁が残存する。上から3～4cm横位のヘラナデ、以下縦位のヘラナデ	回線により器面を縦位に分割→縄文RL（縦位回転）を縦に充填→無文部縦位の研磨（一部縄文磨消し、回線ナゾリ）	㊦淡黄褐色 ～暗褐色 ㊧暗褐色 ㊨灰褐色	8号土壇片岩粒子、角閃石、砂粒
55-2	4-a	——	キャリバー型を呈する深鉢の口縁部破片。内面横位のナデ調整	地文撫糸文L（横位回転）→隆帯貼付→隆帯側縁棒状工具によるナゾリ	㊦黄褐色 ㊧暗褐色 ㊨淡茶褐色	N-13表土片岩粒子、雲母、白色粒子、砂粒
55-4	4-a	——	キャリバー型を呈する深鉢の口縁部破片、下端欠損部に凹み状の成形痕。内面横位のヘラナデ外面頸部無文帯横位のナデ調整	地文縄文RL（横位回転）→隆帯貼付（図上右欠損部の隆帯貼付部に縄文が認められる）→隆帯側縁棒状工具によるナゾリ	㊦赤茶褐色 ～赤褐色 ㊧暗茶褐色 ㊨茶褐色～暗茶褐色	N-10表土片岩粒子、長石、砂粒
55-8	4-a	——	深鉢の胴部破片。内面斜位～横位のナデ調整	隆帯貼付→隆帯及び空白部縦位のヘラナデ	㊦茶褐色 ㊧淡茶褐色	N-13表土片岩粒子、雲母、砂粒
55-9	4-a	——	深鉢の胴部破片。内面横位のナデ調整、外面横位のヘラナデ	撫糸文L（斜位施文、図上右上端）→隆帯貼付→隆帯側縁棒状工具によるナゾリ	㊦㊧黒褐色 ～暗茶褐色 ㊨赤褐色	N-13表土片岩粒子、雲母、砂粒

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び成形、調整手法の特徴	施文手法と文様の特徴	色 調	胎土、備考
57-9	4	最大径26 現存高 8	キャリバー形を呈する深鉢の口縁部付近、内面横位のヘラナデ	沈線によるモチーフを描く→縄文LR（主に縦位回転）を充填→無文部ナデ調整（沈線ナゾリ）	⑤⑥⑦暗茶褐色	表採 片岩粒子、白色粒子、砂粒
58-30	4	——	深鉢の胴部破片、内面横位のヘラナデ	地文単節縄文LR（縦位施文）→細い隆帯によりモチーフを描く→隆帯側縁棒状工具によるナゾリ	⑧⑨淡褐色 ⑩黒褐色	表採 片岩粒子、石英、長石、砂粒を多く含む
59-5	5	——	口縁部はほぼ直立し、壺形を呈する。内面～口唇部横位のヘラナデ、外面口縁部横位のナデ調整	地文縄文RL（縦位回転）→口縁部、腹部、其々2本の横位区画文の交互刻突・上下段連弧文	⑪茶褐色 ⑫淡茶褐色 ⑬暗茶褐色	O-16表土 片岩粒子、雲母、長石、砂粒
63-3	4-c	——	波状口縁を呈する深鉢（推定4単位）で、波頂部には把手が付加される。内面入念な横位のヘラナデ→口縁部入念な研磨	口唇部には凹線が廻り、波頂部の渦巻文と片方で連続する。把手には蕨手文風の文様が施される。口縁部、把手下は隆線、凹線（隆線側縁ナゾリ）による区画文、渦巻文等が描かれ、一部胴部へ抜けてモチーフが展開すると思われる。縄文はLR（主に横位回転）の充填施文（施文後区画内凹線ナゾリ）。	⑭⑮茶褐色 ⑯暗茶褐色 ⑰淡茶褐色	4号住 片岩粒子、石英、砂粒

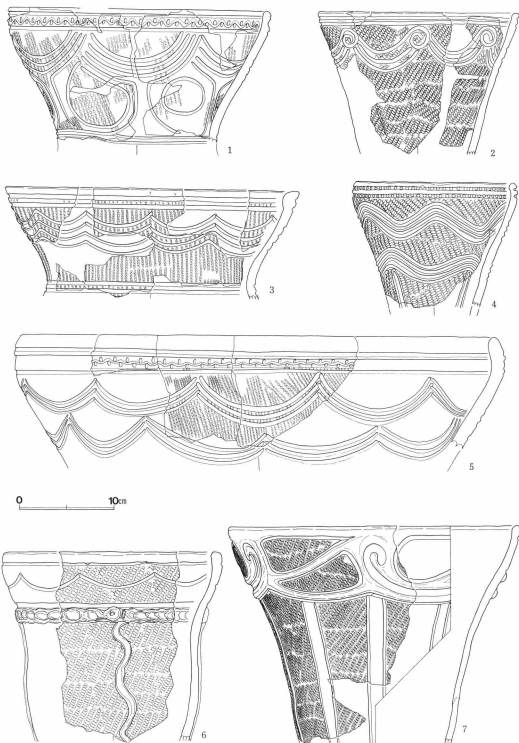


第24図 表土出土土器

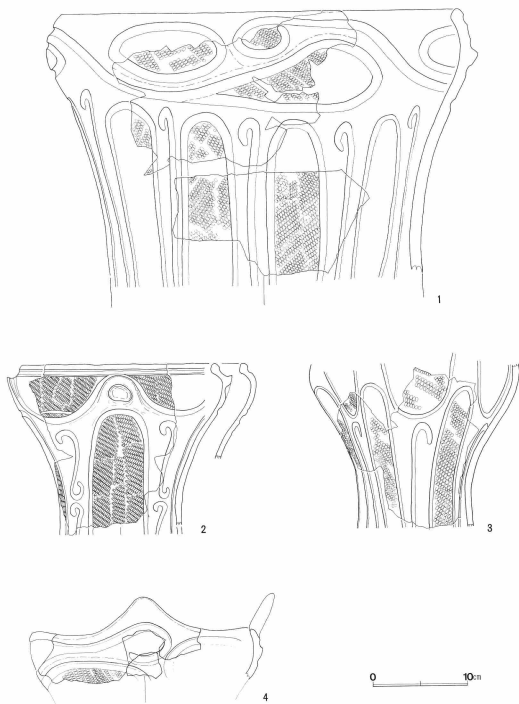
2 0 10cm



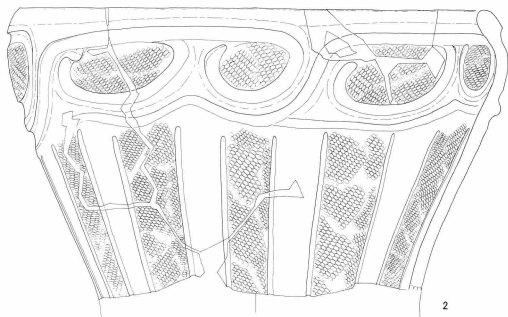
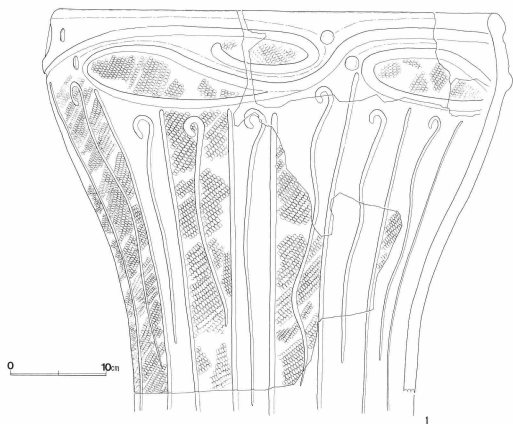
第25图 第1·2a·4a号住居址出土土器



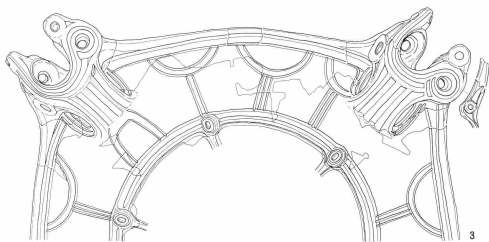
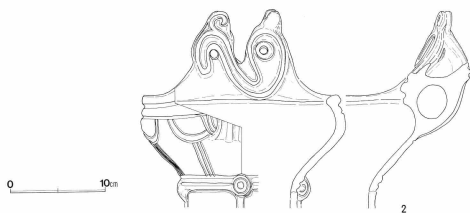
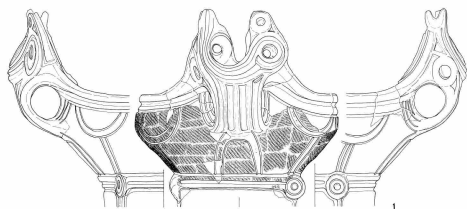
第26图 第2号住居址出土土器



第27図 第3号(2号住上層)出土土器



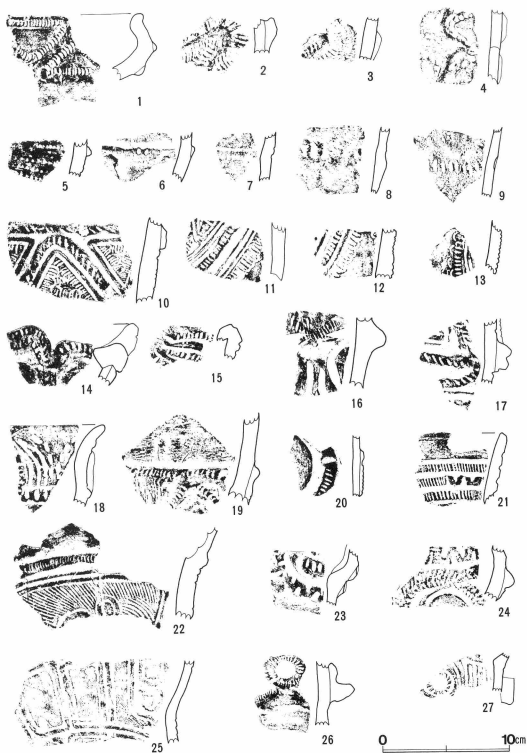
第28図 第3号住居址出土土器



第29図 第33号土坑 (SK-33) 出土土器



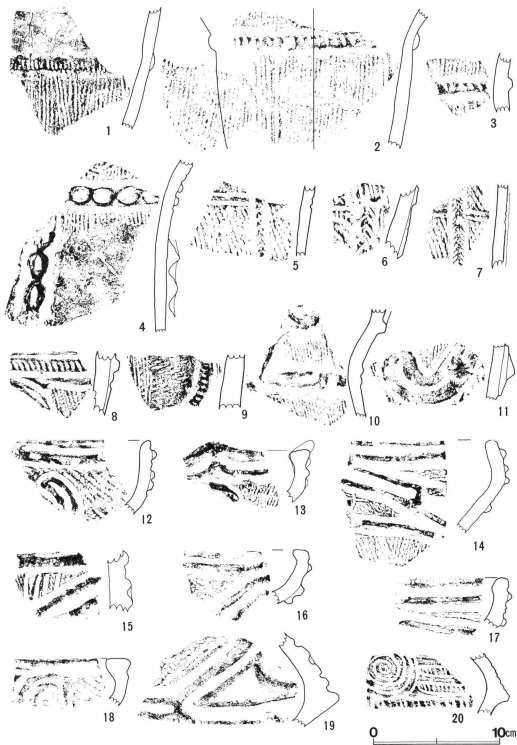
第30图 第1号住居址出土土器



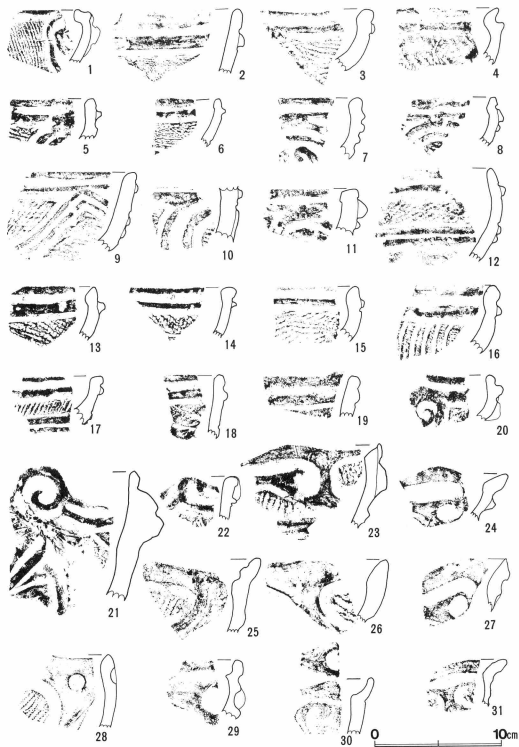
第31图 第2号住居址出土土器(1)



第32图 第2号住居址出土土器(2)



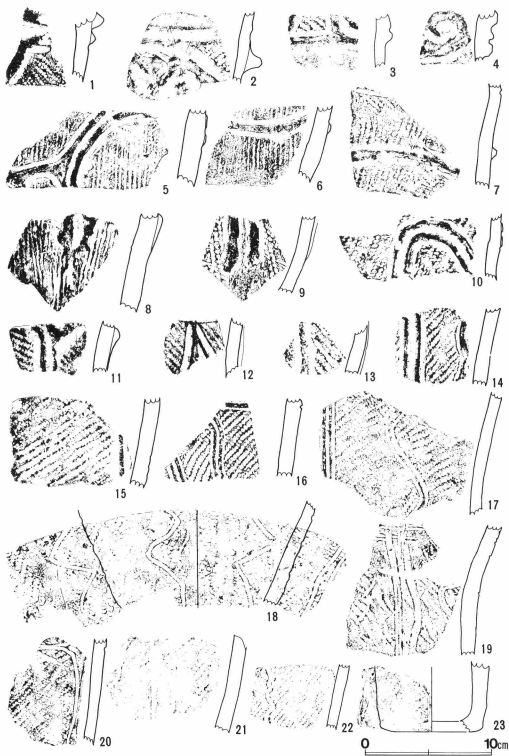
第33图 第2号住居址出土土器(3)



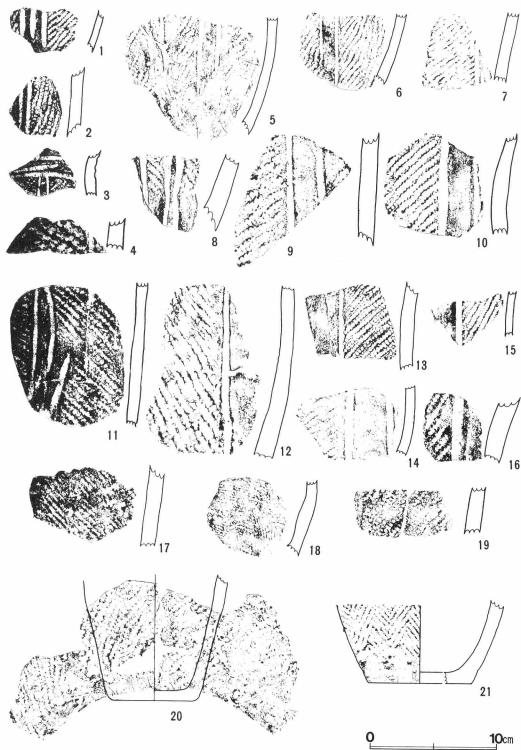
第34图 第2号住居址出土土器(4)



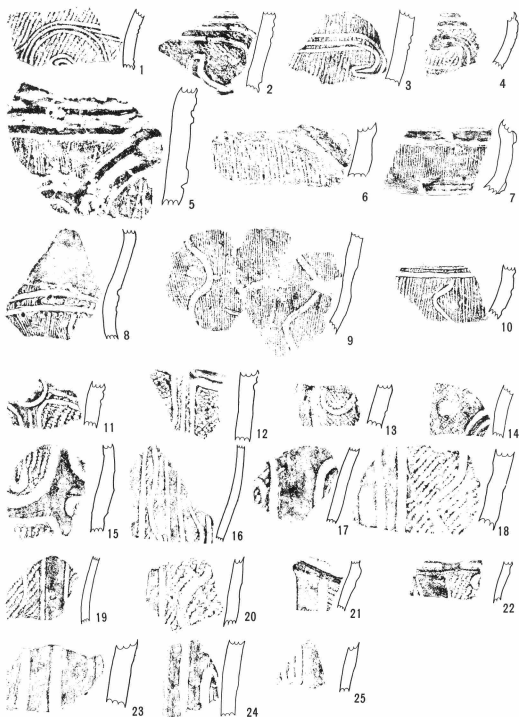
第35图 第2号住居址出土土器(5)



第36图 第2号住居址出土土器(6)

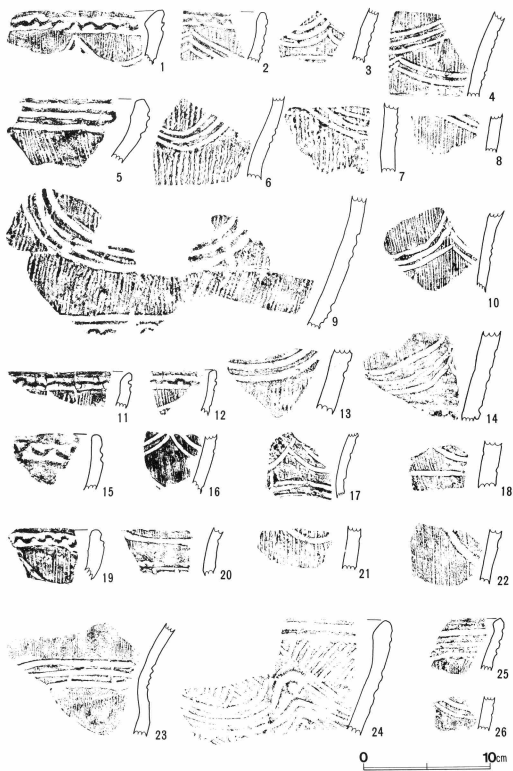


第37图 第2号住居址出土土器(7)

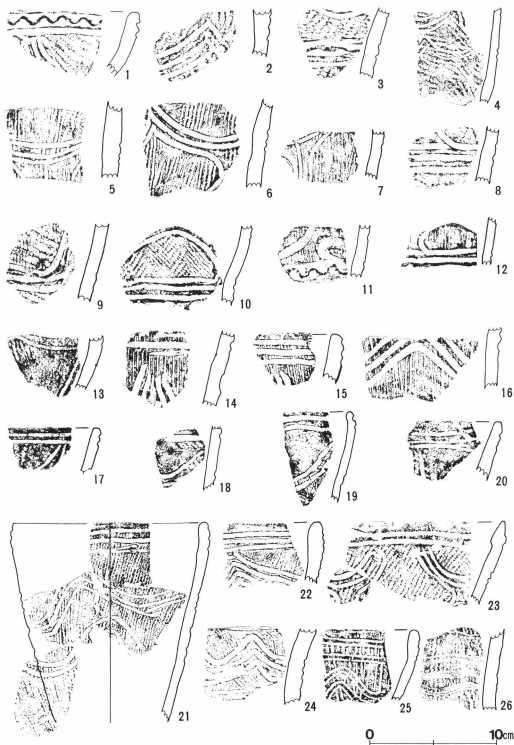


0 10cm

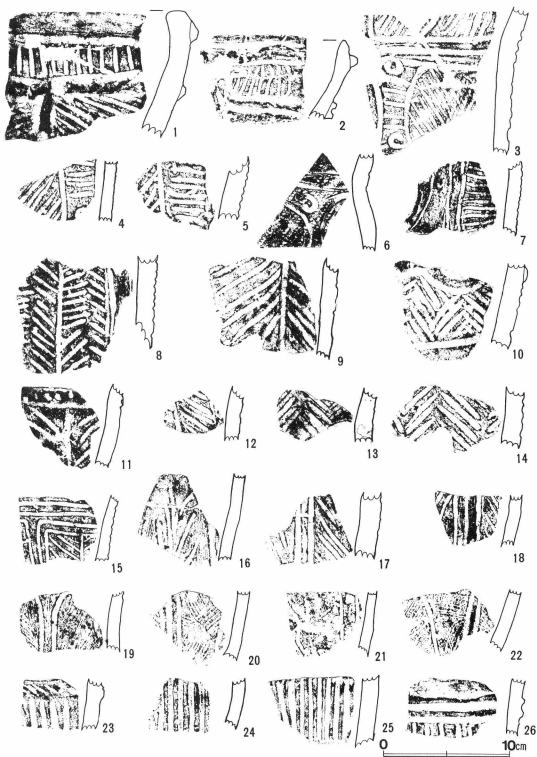
第38图 第2号住居址出土土器(8)



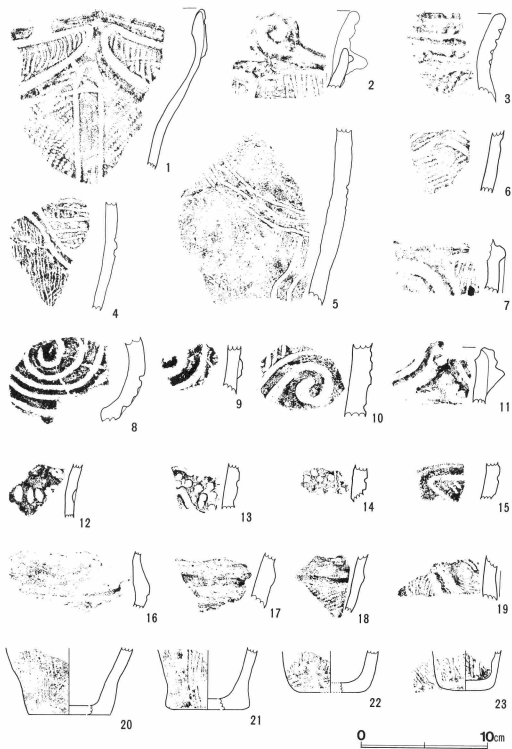
第39图 第2号住居址出土土器(9)



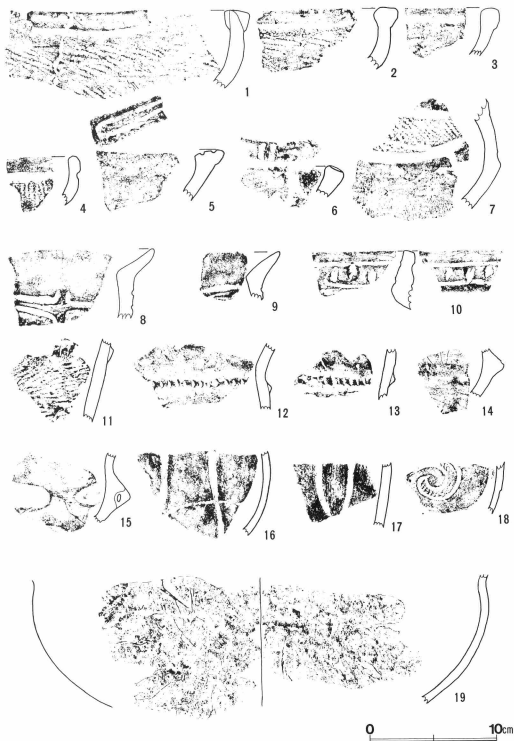
第40图 第2号住居址出土土器(1)



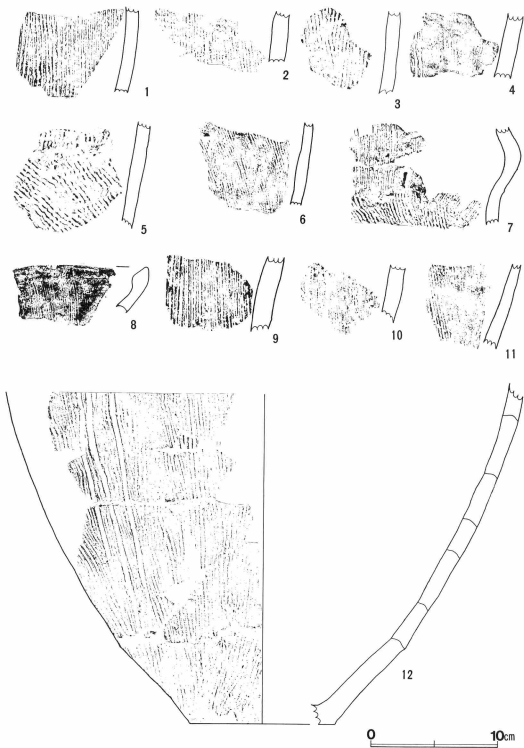
第41图 第2号住居址出土土器(1)



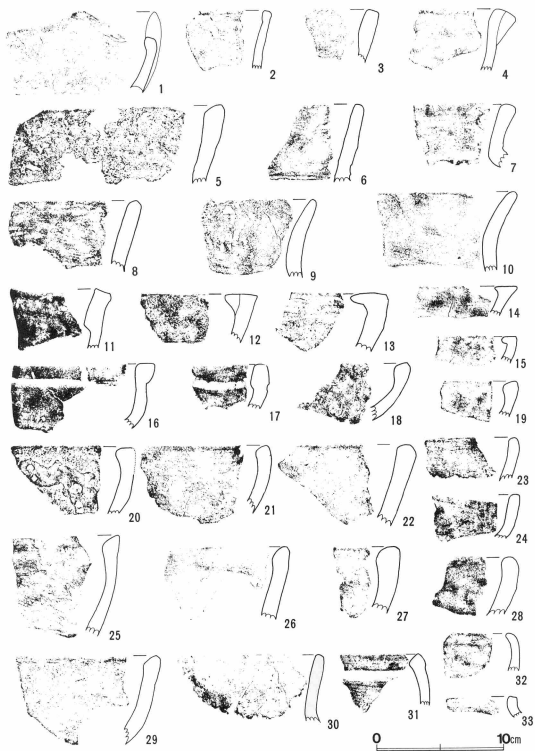
第42图 第2号住居址出土土器(12)



第43图 第2号住居址出土土器(13)



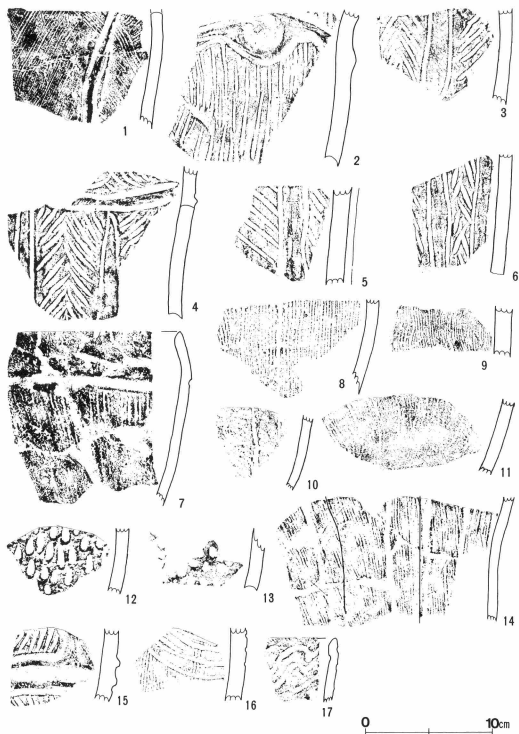
第44图 第2号住居址出土土器(4)



第45图 第2号住居址出土土器(15)



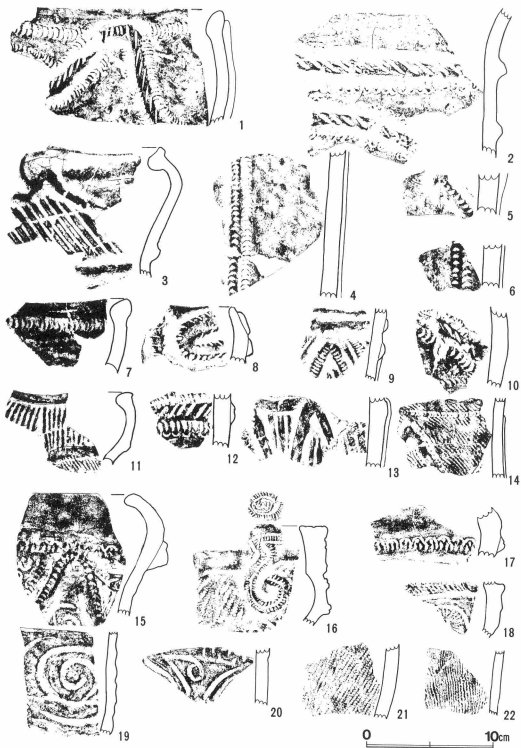
第46图 第4号住居址出土土器(1)



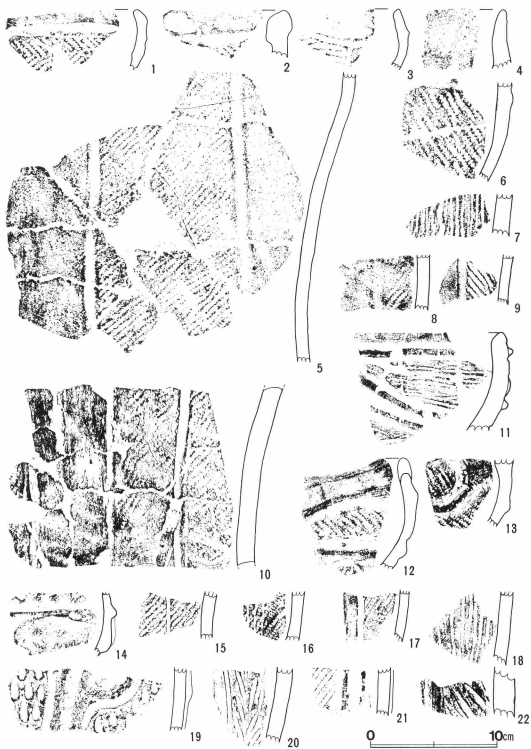
第47图 第4号住居址出土土器(2)



第48图 第4号住居址出土土器(3)



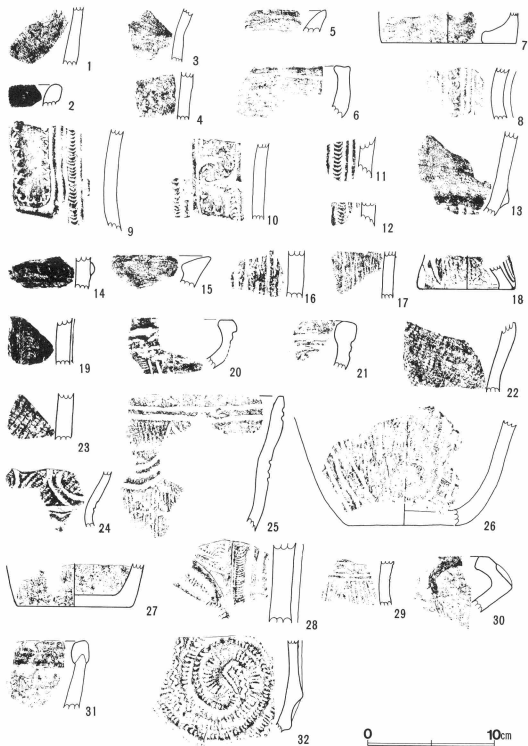
第49图 第21・33号土坛出土土器



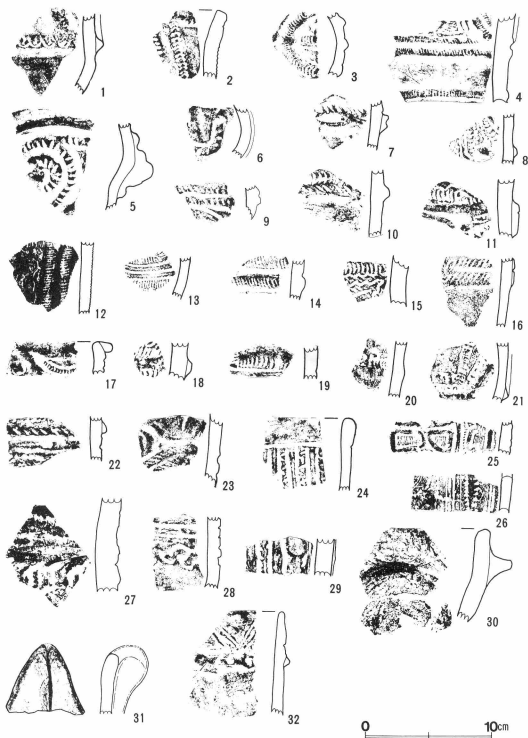
第50图 第7・8・17・19号土坛出土土器



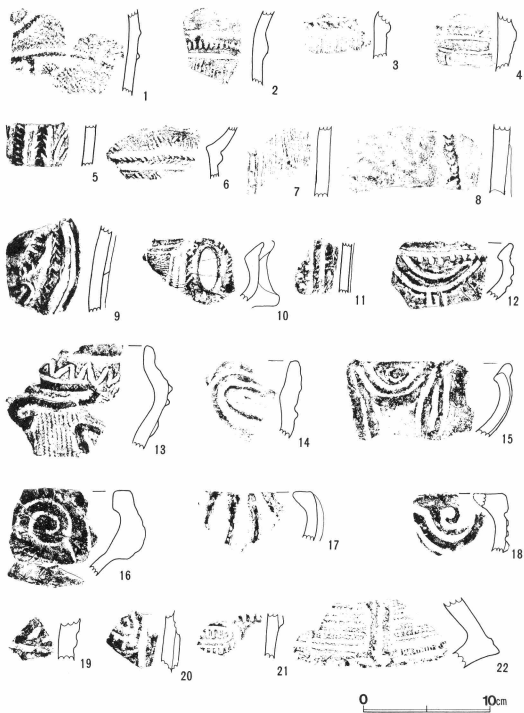
第51图 第1・14・19・34号土坑出土土器



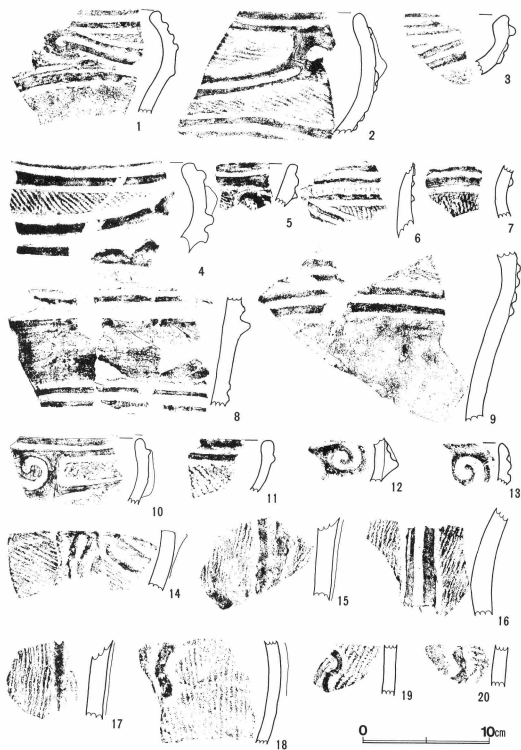
第52図 その他の土壇出土土器



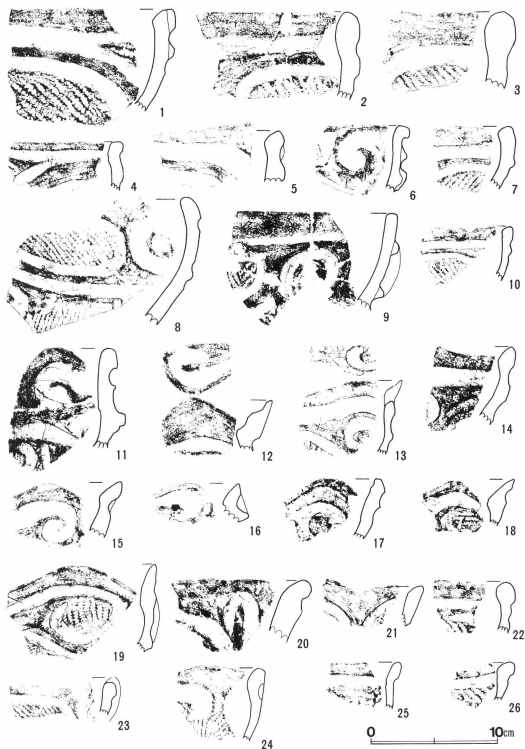
第53图 表土表探出土土器(1)



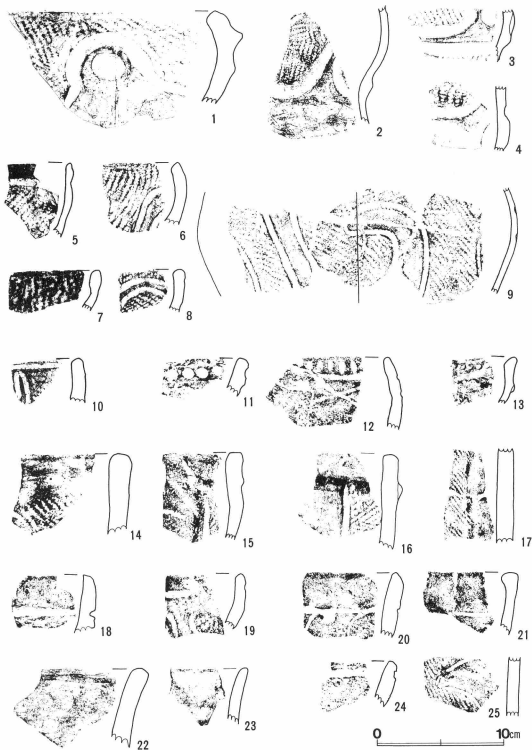
第54図 表土表採出土土器(2)



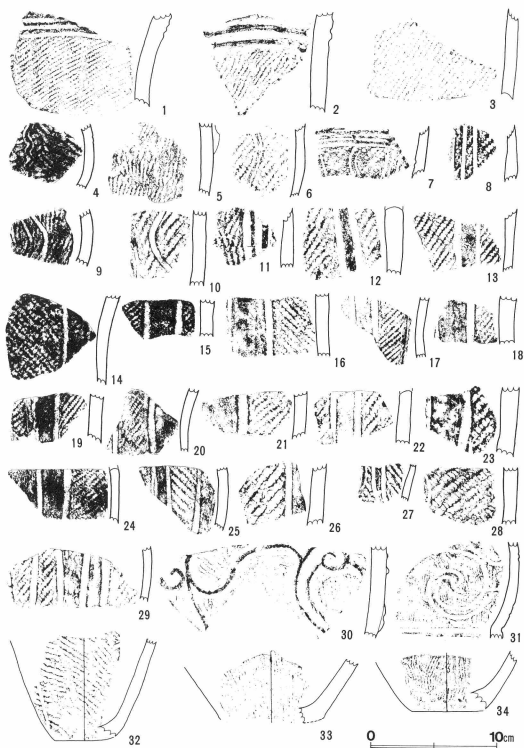
第55図 表土表採出土土器(3)



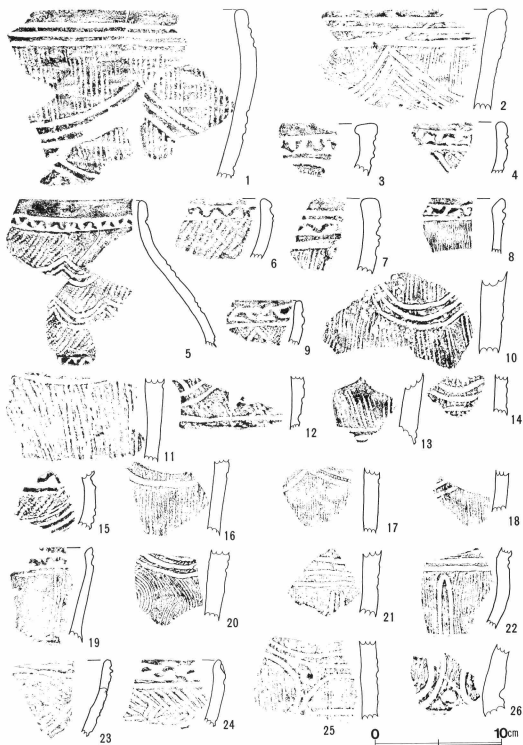
第56図 表土表採出土器(4)



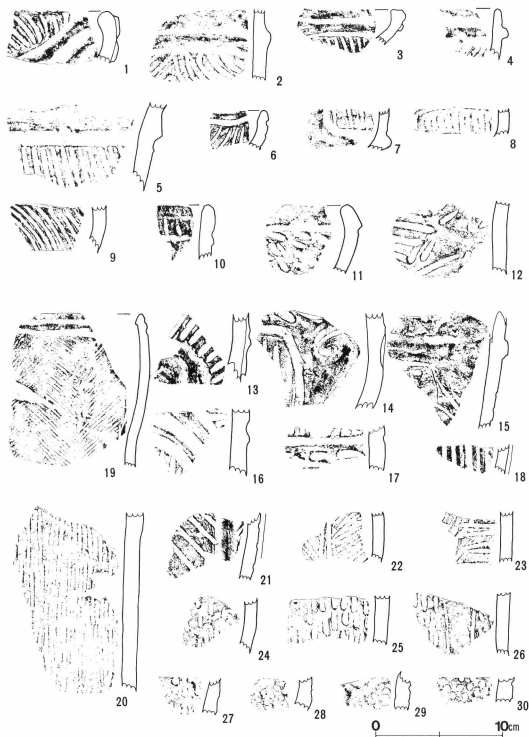
第57図 表土表採出土器(5)



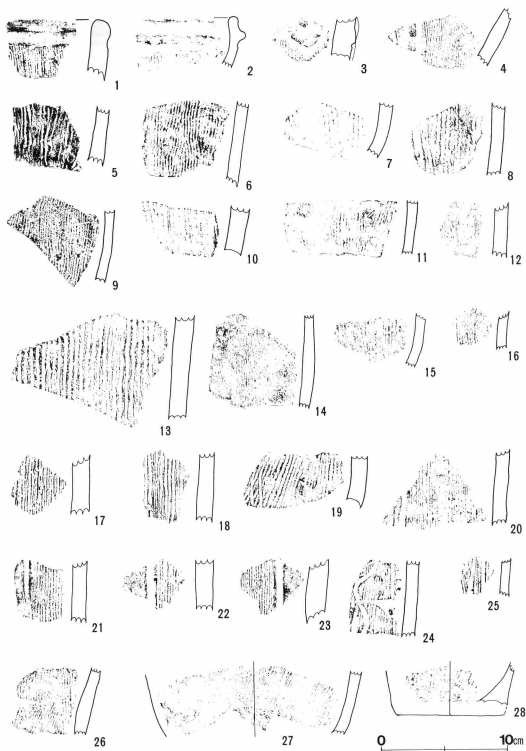
第58図 表土表採出土器(6)



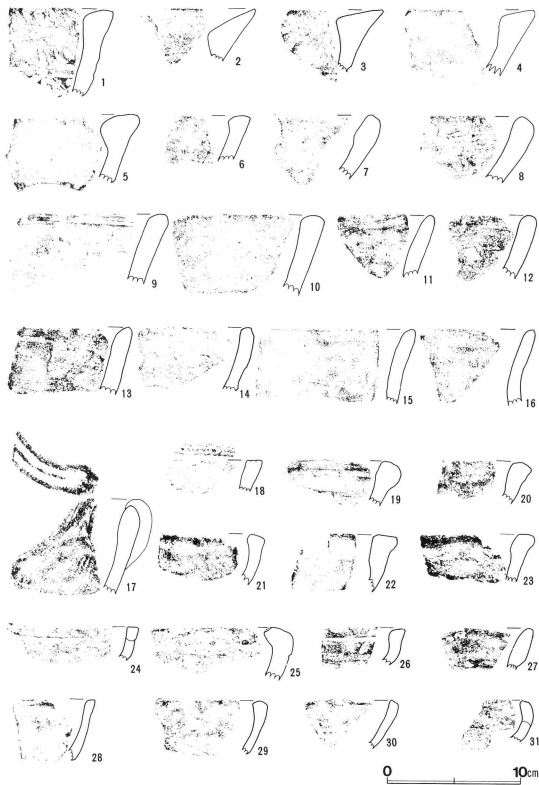
第59图 表土表採出土土器(7)



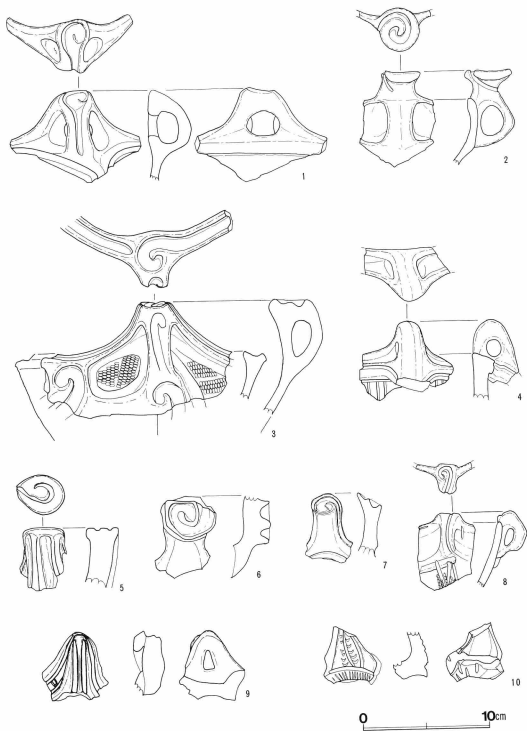
第60图 表土表探出土器(8)



第61図 表土表採出土器(9)



第62図 表土表採出土器(10)



第63図 橋ノ入遺跡出土土器の突起・把手

3. 出土石器の概要

橋ノ入遺跡より出土した石器は、総数 290 点であり、以下の分類基準や特徴等から次の16器種に分類した。

打製石斧 (第7表)

Ⅰ種(図版22-1~16、図版24-1~8)、側縁両端がほぼ平行し、従来より短冊形と呼ばれているもの。

Ⅱ種(図版23-1~8、図版25-1~4)、側縁の一方が頭部から刃部にかけて開き、もう一方が直線的であり、平面形はいわゆる半撥形を呈するもの。

Ⅲ種(図版23-9~16)、両側縁が頭部から刃部にかけて開き、従来より撥形と呼ばれているもの(注1)。

尚、Ⅰ種及びⅢ種は肉厚が厚く、Ⅱ種は薄いという特徴をっており、更にⅠ種は長さの長いものをa類(図版22-9~16)、長さの短いものをb類(図版22-1~8)、に分類することができる。

以上のもの以外は、大型打製石斧(図版24-17)、小型打製石斧(図版24-10~13)、類別不可能な欠損品(図版24-9・14~16)、を「その他」として一括した。合計108点出土し、うち完形品は21点である。

磨製石斧 (第18表)

定角式石斧(図版25-5)にあたるものが1点、乳棒状石斧(図版25-6~8)にあたるものが3点の計4点が出土した。

完形品はなく、頭部の欠損した乳棒状石斧1点の他は頭部のみが残存するものである。各個体の表面には調整と思われる敲打痕が観察される。

石鏃 (第8表)

Ⅰ種 凹基無茎鏃(図版27-1~7)である。基部が内側に湾曲する。側縁がやや外側に膨らむ形態とやや内側に反る形態がある。

Ⅱ種 平基無茎鏃(図版27-8・9)である。基部は平端で側縁は直線的であり、三角形を呈する。

Ⅲ種 円基鏃(図版27-10~12)である。基部が丸みを帯びている。側縁がやや外側に反る形態と大きく外側に湾曲する形態がある。出土数は合計21点で、うち完形品及び完形に近いものは13点である。

砥石 (第9表、図版29-9~15)

平面形は楕円形又は不整円形を成し、断面は若干反った様な形状を呈する。砥面は皿状に緩やかにくぼんでいるものが多い。石皿の破片から砥

器 種	個 数	比 率	器 種	個 数	比 率
打 製 石 斧	108	37.2%	磨 石	9	3.1%
凹 石	36	12.4%	磨面付石器	7	2.4%
石 鏃	21	7.2%	磨 製 石 斧	4	1.4%
横刃形石器	17	5.9%	石 錐	4	1.4%
不定形石器	16	5.5%	小 型 石 器	4	1.4%
石 皿	15	5.2%	調整のある剥片	4	1.4%
砥石・棒状石器	15	5.2%	白 石	3	1.0%
小型不定形石器	13	4.5%	不 明	2	0.7%
砥 石	11	3.8%	石 匙	1	0.3%

第5表 橋ノ入遺跡出土の石器の数量及び比率

又、各個体は、粗密をもつ幾つかの磨面によって構成される傾向を有しており、更に石材によっても磨面の変化が認められる。これらのうちには、くぼみの付くもの2点、敲打痕のあるもの5点、くぼみ・敲打痕を共に有するもの2点の計9点が出土している。

敲石・棒状石器 (第17表、図版26-7~10)

表面の一部に敲打痕ないし磨面を残す。計15点出土している。

台石・石皿 (第16表、図版25-11) (第15表、図版30-1~4)

大形の河床礫を素材とし、自然面の一部が広範囲にわたり、磨滅しているものである。敲打痕やくぼみを有するものもある。石皿と特徴が類似するが盤状を呈さない。計3点出土している(台石)。別に石皿は計15点出土している。

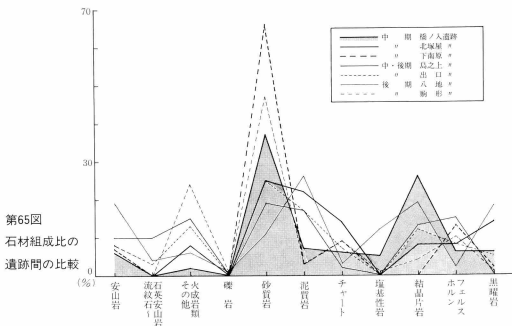
その他の石器 (第19表)

上記以外のものを、以下の様に分類した。尚、石匙、石錐、不明石器は数が少ない為、ここに加えた。

小型であり、肉厚が厚いものと薄いものがある。小型不定形石器としたものは、平面形が不定形であり、小型石器としたものは、平面形が円形を呈している。又、調整のある剥片と分類したものは、小型剥片の一部に調整を加え刃部を作り出しているものである。それぞれの出土点数は、13点、4点、4点である。

(石錐) つまみを持つものと錐部だけのものがあり、錐部断面は三角形を呈す。計4点出土している。

(石匙) やや薄めの横長剥片を素材とし、打点のやや厚みがある部位をつまみとしている。刃端部、つまみ頭部端の一部に磨滅痕が観察で



き、一部に自然面をのこす、1点出土している。(図版31-15)
 (器種不明) 上・下部が欠損している為、形態が不明なものの肉厚が薄く、
 断面は長楕円形を呈し、両側端が直線に調整され、それぞれ平行
 する。計2点出土している。(図版31-13・14)

以上当遺跡出土の石器の数量及び比率を第5表にまとめた。尚、本文中()
 内は対応する表、写真番号である。

原材料の特徴

ここでは、当遺跡より出土した290点の石器の原材料について、その特徴を概
 観してみたい。

数量比が最も高いのは、砂質岩(37.5%)であり、次は結晶片岩(26.5%)
 で両方を合わせると全体の64%を占める(第65図)。

各器種をその用いられた石材別にみると次の様な傾向を認めることができる。

○硬砂岩・ホルンフェルス等

やや硬めの石材で打製石斧等に使われる。

○安山岩類・砂岩類、片岩類

器面に粗密がある石材で石皿、磨石、砥石に使われる。

○黒曜石、チャート

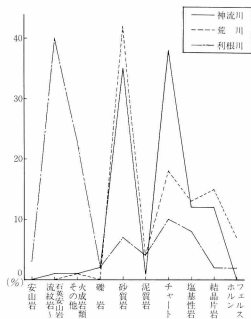
硬質で断口に貝殻状を呈するような細かい調整ができる石材。石鏃、石錐、
 小型石器、小型不定形、調整のある剥片などの小型の利器を中心とする石器に
 用いられる。

○緑色岩、角閃岩

密度が高く、質量のある石
 材で磨製石斧等に利用される。

(注3)

このような各器種と石材の
 対応では、出口、島之上遺跡
 で本間岳史氏によって確認さ
 れている。本間氏は「石器の
 原材料は石器の種類によって、
 それぞれ一定の岩石種に集中
 する傾向のあること」を指摘
 し、「“石器は石質を選ぶ”と
 いう必然性をよみとる事がで
 きる」(本間 1977)と述べて
 おり、橋ノ入遺跡のあり方と
 同様の傾向を読みとることが
 できる。又、再利用はその素



第66図 各河川の河床礫組成比

材のもつ特質の範囲によって選択されていることが推定される。

尚、第66図は当遺跡周辺の河川の河床礫の石質を比率であらわしたグラフであり（注4）第65図は、当地域内の中期から後期の遺跡より出土した石器の原材料を比率であらわしたものである。

石器の概略

ここでは、当地域内の縄文時代中期（以下中期）の遺跡と当遺跡を比較しつつ、当遺跡出土の石器の概略について述べてみたい。

まず当遺跡出土の石器について傾向を述べると、伴出した土器の型式及び検出された遺構の状況などにより縄文時代中期の勝坂式期から加曾利EⅢ式期の所産であると推定される。

出土地点をみると石器の多くは遺構内（158点）及び遺構周辺（152点）から出土しており、特に第1号住居址～第4号住居址周辺は、約150平方メートルにわたり、石器出土集中が観察される。しかし、石器集中地点に接する住居址群北西側は攪乱を受けているとはいえ、約310平方メートルにわたり、石器出土が皆無であり、石器の廃棄及び数量を考える上で特筆されることであろう（注2）。

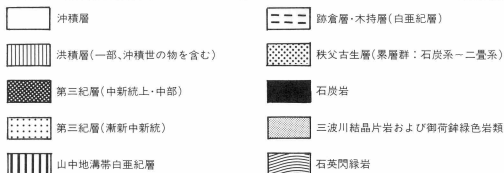
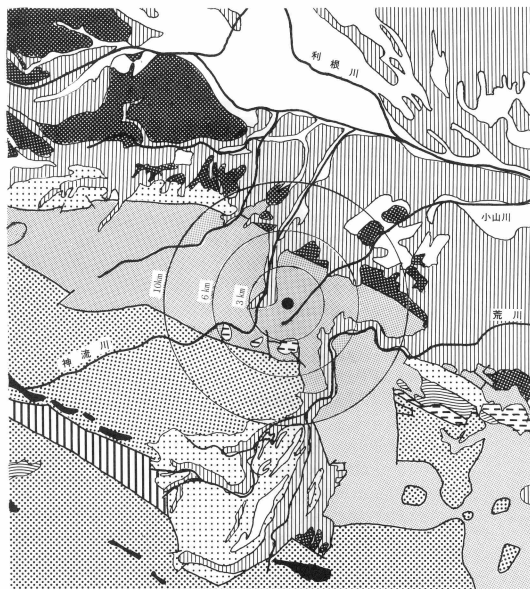
特に石斧については、従来、打製石斧は土掘具、磨製石斧は伐採具として分類され、この基礎の上に細分がなされてきた。打製石斧の細分が形状だけでなされているところに問題があることはすでに指摘されており（松村 1983）、中間形態も多い。当遺跡の打製石斧を観察すると石材にも密度や硬度、重量などが磨製石斧の特徴により近いものも認められる。なかには、刃部に斜行する使用痕が認められる、土掘具として使用されたとは考えにくい打製石斧が出土していることも注目すべきであろう。また、土掘具に適さない小型石斧や大型石斧なども出土しており、打製石斧が全て土掘具とはいえない。以上のことを考慮に入れて、石材をみると、ある程度、石材と使用痕のまとまりが着取される。

又、当遺跡では、打製石斧のような植物採集具、石皿、凹石、磨石等の加工具としての石器が多く、これに次いで石鏃などの狩猟具が出土している。逆に、石錘等の漁撈具の出土は皆無であった。又、分銅形の石斧が検出されなかったことも注目すべきことであろう。

当地域内の石器組成 第64図は当地域内の中期から後期にかけての石器が比較的まとまって出土した石器組成を帯グラフにしたものである。

この図より当地域における中期から後期にかけての石器組成を推測すると、中期において打製石斧の比率が極めて高いが、後期になると減少し、石皿、凹石、磨石を石鏃が増加することが窺える。又、石錘が出土した中期の遺跡が当地域内では皆無であり、当地域の地域性の一端を窺うことができる。

当遺跡の石器の組成比をみると、打製石斧が最も高く、全体の37.2%を占め、中期の石器組成の特徴を示しているが、周辺の中期の遺跡と比べると、打製石斧の割合が多い訳ではなく、石皿、凹石、磨石と石鏃の割合が多いことは当遺



第67図 橋ノ入遺跡周辺の地質

跡の特徴のひとつといえよう。このことは、単に石器組成が後期の組成により近いということだけでなく、標高約 300 m の峠上に占地し、遺跡の周辺半径 3 km 以内の 77% が山地で占められているという橋ノ入遺跡の立地の上での特徴を考慮する必要がある。この当遺跡に認められる石器組成の傾向は、当遺跡と比較的類似した占地形態をとる美里町栗山遺跡（長滝他、1983）においても認められ、当遺跡における石器組成の特徴も占地による地域性との関連が推測できる。しかし、今だ、比較すべき資料が希薄であり、今後の資料の蓄積が期待される。

石材産地の推定 最後に、当遺跡の石器の素材となった岩石の産地について一瞥しておきたい。各石器は、素材あるいは製品として集落に搬入され、使用・廃棄され、集落に累積的に集積されていく。したがって、集落から出土する石器の石材の組成は、石材の採取・交易という集落への搬入形態の傾向を具体的に示していると考えてよい。当遺跡出土の石器の素材となった石材は、河床礫と考えられるものが大半であり、各河川流域の岩石種の構成から採取地を推定する必要がある。各河川の河床における岩石種の構成は、各河川の流下する地域の地質によって限定されており、各流域毎に異なった組成を示している（第66図・第67図）。以

第 6 表

橋ノ入遺跡出土石
器石材の推定産地

距離(図)	推定産地	主要石材	全個体に占める比
3 km 圏	小山川水系	結晶片岩類	26 %
	神流川水系	硬砂岩、緑色岩、チャート等	44 %
6 km 圏	荒川水系 (第三紀層)	ホルンフェルス、石英閃緑岩	8 %
		シルト岩、長石質砂岩	8 %
10km圏外	利根川水系	安山岩類、流紋岩	7 %
遠隔地	(和田峠)	黒曜石	7 %

上から推定される各石材の産地と、当集落からの距離および各々の比を示したものが第 6 表である。(徳山寿樹)

注

- (1) 刃端部が直線的であることが基本だが、刃端部両側が磨滅して刃端部が外側に大きく湾曲するものがありⅢ種 b 類として独立する可能性もある（図版 22-15・16）
- (2) 斎藤基生氏は「東日本では打製石斧は遺構もしくはそのごく近くに廃棄され、それなりに数量を比較するひとつのまとまりができる。」としている（斎藤 1983）
- (3) 石質鑑定は本間岳史氏により、表面観察により行なって頂いた。又、橋ノ入遺跡周辺の地質や石材の特徴等についての有益かつ懇切な御教示を得た。記して感謝したい。
- (4) 丑野毅氏による発表を基に作成した表のデータ測定地点は次のようである（寄居町、1984）。

神流川（児玉郡上里町勸使河原、神流川橋北 50m 神流川河原）調査範囲 3 × 3 m、利根川（本庄市山王堂、坂東大橋西 100 m 利根川河原）調査範囲 3 × 3 m、荒川（大里郡寄居町小園、玉淀大橋 1200m 荒川河原）調査範囲 5 × 5 m と（大里郡寄居町鉢形、正喜橋北東 400m 荒川河原）調査範囲 5 × 5 m

第 7 表 打製石斧

遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	礫面	状 態	形態	備 考
1	1 a 号住居址	№5 床直	(10.4)	(7.4)	(2.7)	(340)	緑色片岩	無	一部欠損	その他 (未成品)
2	＊	フク土	(9.1)	(4.8)	(1.6)	(110)	硬砂岩	＊	＊	II
3	＊	＊	(9.0)	(5.1)	(1.1)	(89)	結晶片岩	有	＊	II 刃部全体が磨耗
4	1 b 号住居址	№1 フク土	9.7	4.9	1.7	110	安山岩	＊	完形	II 〃
5	＊	№2 床直	(12.0)	(4.6)	(2.0)	(130)	輝緑凝灰岩	＊	一部欠損	I a
6	＊	№3 フク土	6.8	5.1	1.9	105	硬砂岩	＊	完形	I a
7	＊	№8	(4.0)	(3.8)	(1.5)	(38)	＊	無	欠損	I a
8	＊	№11 フク土	(10.1)	(6.3)	(1.0)	(110)	＊	＊	一部欠損	II 刃部全体が磨耗
9	＊	2 区フク土	(7.3)	(3.5)	(2.2)	(80)	ホルンフェルス	＊	欠損	II 磨耗痕
10	＊	フク土	(10.4)	(4.1)	(1.3)	(100)	緑色泥片岩	有	一部欠損	I a
11	1 号住居址	3 区フク土	(6.2)	(4.2)	(1.8)	(65)	硬砂岩	＊	欠損	I a
12	＊	＊	(9.2)	(5.7)	(2.8)	(200)	＊	＊	一部欠損	I a
13	＊	＊	(4.7)	(3.1)	(1.2)	(29)	＊	無	欠損	I a
14	2 号住居址	M-14-56小区内Pa	(13.7)	(7.3)	(2.4)	(325)	＊	有	一部欠損	その他 (大 型)
15	＊	M-15-40-XI-18	(5.2)	(3.8)	(1.6)	(42)	シルト岩	無	欠損	I a
16	＊	M-16-2-IX-11	(5.1)	(5.9)	(1.5)	(68)	ホルンフェルス	有	＊	II
17	＊	M-16-3-XI-62	13.0	5.7	1.6	110	硬砂岩	＊	一部欠損	II
18	＊	M-16-22-VII	(8.4)	(3.9)	(1.8)	(90)	＊	＊	＊	その他 刃部全体が磨耗 (小型)
19	＊	N-15-32-XII-40	(6.8)	(6.3)	(2.3)	(160)	＊	＊	欠損	I a
20	＊	N-15-38-VII-2	(8.7)	(5.2)	(3.2)	(200)	緑色片岩	＊	一部欠損	I a
21	＊	N-16-27-IX-19	(8.7)	(4.3)	(2.6)	(118)	硬砂岩	不明	＊	III
22	＊	N-16-34-XII-42	(9.1)	(4.1)	(2.5)	(160)	ホルンフェルス	無	欠損	I a
23	＊	N-16-35-XII-81	(6.5)	(4.2)	(1.1)	(50)	硬砂岩	＊	＊	II
24	＊	N-16-44-VII-10	(7.5)	(4.7)	(1.3)	(69)	千枚岩	有	＊	II
25	＊	N-16-51-VI-49	(9.3)	(5.2)	(2.0)	(125)	硬砂岩	無	一部欠損	II 刃部右側に磨耗痕
26	＊	N-16-52-X-29	(3.6)	(6.8)	(1.5)	(50)	＊	有	欠損	I a 刃部一部が磨耗
27	＊	N-16-54-XII-52	(6.8)	(4.0)	(1.0)	(52)	千枚岩	＊	＊	II
28	＊	N-16-60-VI-7	(10.4)	(6.2)	(1.5)	(110)	結晶片岩	＊	一部欠損	III
29	＊	N-16-62-XV-84	(6.8)	(4.8)	(1.8)	(75)	硬砂岩	＊	欠損	III
30	＊	N-16-B-44-X-40	(9.9)	(5.0)	(2.3)	(130)	＊	不明	＊	I a
31	3 号住居址	N-16-25-XII-34	(10.5)	(5.1)	(2.9)	(190)	＊	有	一部欠損	I a
32	＊	O-16-59-III-48	(9.3)	(6.1)	(2.6)	(180)	ホルンフェルス	不明	＊	III 刃部右側に磨耗
33	3号住居址周辺	—	(10.4)	(5.8)	(2.0)	(180)	点紋緑色片岩	有	欠損	III
34	4 a 号住居址	M-13-8-II	(4.1)	(5.2)	(1.7)	(72)	結晶片岩	不明	＊	II
35	＊	M-14-7-IX-S-58	(7.5)	(5.1)	(2.2)	(160)	安山岩	有	一部欠損	I a
36	＊	M-14-26-I	(5.7)	(4.3)	(1.6)	(60)	硬砂岩	＊	欠損	II
37	＊	M-14-31-IV	10.5	3.9	1.2	69	結晶片岩	＊	一部欠損	II
38	＊	M-14-48-II	(6.5)	(5.6)	(2.4)	(110)	硬砂岩	＊	欠損	I a
39	＊	M-14-64-III	(8.2)	(6.0)	(2.3)	(200)	緑色岩	無	＊	I a
40	＊	M-14-2135	7.5	2.9	1.2	40	ホルンフェルス	＊	完形	その他 (小 型)
41	＊	N-14-62-II	(8.0)	(5.7)	(2.2)	(90)	硬砂岩	有	欠損	I a 刃部右側に磨耗
42	＊	S-33	10.7	4.7	1.7	120	＊	＊	一部欠損	III
43	＊	№358	(9.7)	(5.0)	(2.3)	(132)	＊	＊	＊	I a 刃部全体が磨耗
44	＊	№392	8.8	4.0	1.2	58	＊	＊	欠損	II
45	4 b 号住居址	M-15-19-I	5.8	5.7	1.0	50	金雲母片岩	不明	＊	II
46	5 号住居址	J-9-1-III-1	6.4	6.5	1.7	192	千枚岩	有	＊	II
47	2 号住居址	M-16-2-III-52	(9.2)	(5.8)	(4.0)	(205)	硬砂岩	無	＊	その他 (原形不明)
48	1 号土壌	フク土	(6.7)	(5.2)	(1.3)	(172)	＊	＊	＊	II 磨耗痕
49	＊	＊	(10.0)	(5.8)	(1.4)	(110)	結晶片岩	有	＊	II
50	2 号土壌	№3 床面	11.4	4.0	1.8	115	シルト岩	＊	完形	I b

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	礫面	状 態	形態	備 考
51	2号土壇	N-4 フク土	(12.8)	(6.3)	(2.6)	(265)	硬砂岩	無	完形	III	
52	23号土壇	—	(8.8)	(5.7)	(3.2)	(180)	＊	不明	欠損	III	
53	31号土壇	—	(6.3)	(2.2)	(1.5)	(58)	シルト岩	有	一部欠損	その他 (小型)	
54	遺構外	—	(9.7)	(5.2)	(2.4)	(180)	硬砂岩	＊	＊	I a	
55	＊	M-16	(9.1)	(5.9)	(1.4)	(78)	＊	＊	完形	III	
56	＊	＊	(5.6)	(5.9)	(2.0)	(89)	＊	＊	欠損	その他 (原形不明)	
57	＊	＊	(2.9)	(3.4)	(1.0)	(15)	ホルンフェルス	＊	＊	その他 (小型)	
58	＊	＊	(6.3)	(3.9)	(1.8)	(65)	硬砂岩	＊	＊	I a	
59	＊	M-17	(9.4)	(4.7)	(1.7)	(110)	＊	＊	一部欠損	I a	
60	＊	N-10	(4.1)	(5.3)	(2.5)	(71)	結晶片岩	無	欠損	I a	
61	＊	N-13-24号土壇No.2	(5.5)	(5.8)	(2.8)	(110)	硬砂岩	有	＊	その他 (原形不明)	
62	＊	N-13	13.7	4.6	2.3	280	＊	＊	完形	I b	刃部全体が磨耗
63	＊	＊	(8.2)	(5.6)	(1.7)	(140)	＊	＊	一部欠損	I a	
64	＊	＊	(8.9)	(4.8)	(2.4)	(151)	緑色片岩	＊	完形	I a	刃部に磨耗
65	＊	＊	(9.3)	(4.9)	(2.3)	(70)	ホルンフェルス	不明	一部欠損	I b	
66	＊	N-14	(5.9)	(6.1)	(1.8)	(110)	硬砂岩	有	欠損	その他 (原形不明)	
67	＊	＊	(3.4)	(5.5)	(1.3)	(39)	＊	＊	II	刃部に磨耗	
68	＊	N-15	(3.8)	(3.9)	(1.1)	(20)	＊	無	＊	その他 (刃部全体に磨耗(小型))	
69	＊	＊	12.3	5.4	2.2	200	＊	有	完形	I b	刃部全体が磨耗
70	＊	＊	(10.2)	(4.7)	(2.1)	(150)	＊	無	一部欠損	I b	刃部右側が磨耗
71	＊	＊	(13.0)	(5.1)	(1.9)	(160)	＊	有	完形	I b	刃部全体が磨耗
72	＊	＊	(9.4)	(5.5)	(1.5)	(100)	＊	＊	一部欠損	II	
73	＊	＊	(9.0)	(5.1)	(2.7)	(130)	＊	＊	欠損	I a	
74	＊	N-16	(11.8)	(4.9)	(2.6)	(185)	＊	＊	一部欠損	I b	
75	＊	—	9.4	4.7	2.1	112	ホルンフェルス	＊	完形	II	
76	＊	N-16	(9.3)	(4.0)	(1.8)	(91)	＊	不明	欠損	I b	
77	＊	＊	(9.3)	(4.4)	(1.7)	(90)	結晶片岩	有	欠損	II	刃部全体が磨耗
78	＊	＊	(17.0)	(4.8)	(2.7)	(180)	硬砂岩	＊	完形	I a	＊
79	＊	O-14	(7.7)	(5.0)	(1.8)	(105)	＊	＊	欠損	I a	
80	＊	O-15	(5.5)	(4.8)	(1.2)	(52)	＊	＊	＊	II	
81	＊	＊	(9.5)	(5.1)	(2.0)	(122)	＊	＊	＊	III	刃部全体が磨耗
82	＊	Q-15	(6.5)	(5.8)	(1.6)	(80)	＊	＊	＊	II	
83	＊	O-15	(8.2)	(4.8)	(1.2)	(78)	＊	＊	完形	II	
84	＊	O-16	11.4	6.3	2.7	240	＊	＊	＊	I a	
85	＊	＊	7.3	4.4	2.2	120	緑色片岩	＊	欠損	その他	欠損後敲石として再利用
86	＊	＊	(7.4)	(4.8)	(2.1)	(110)	石灰岩	＊	＊	III	
87	＊	L-12	(9.3)	(4.5)	(2.1)	(101)	石畳片岩	無	一部欠損	III	
88	＊	N-13	(4.2)	(5.3)	(1.4)	(52)	硬砂岩	有	欠損	II	刃部全体が磨耗
89	＊	2号住居址周辺	(6.2)	(4.4)	(2.4)	(78)	＊	＊	一部欠損	I a	刃部右側が磨耗
90	＊	＊	(9.6)	(5.0)	(1.4)	(95)	ホルンフェルス	＊	完形	III	
91	＊	＊	(10.1)	(5.2)	(2.7)	(120)	硬砂岩	＊	欠損	I a	
92	＊	3号住居址周辺	(9.2)	(4.4)	(2.4)	(120)	＊	無	＊	I a	
93	＊	＊	(10.9)	(6.0)	(2.8)	(242)	＊	有	一部欠損	その他 (原形不明)	
94	＊	北側斜面	12.4	6.5	3.8	420	＊	無	完形	その他	刃部がかなり磨耗
95	＊	D-8付近	11.4	4.6	2.5	205	＊	＊	一部欠損	I a	
96	＊	—	(10.7)	(6.3)	(2.0)	(58)	＊	有	＊	III	刃部中央部に磨耗
97	＊	—	(7.6)	(4.6)	(1.6)	(85)	＊	無	欠損	II	刃部全体に磨耗
98	＊	—	(7.7)	(5.2)	(1.6)	(100)	珪質砂岩	＊	＊	III	
99	＊	—	(7.8)	(5.9)	(2.3)	(160)	緑色岩	有	＊	I a	刃部右側が磨耗
100	＊	—	11.4	6.4	2.3	180	＊	＊	完形	III	刃部右側に磨耗

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	礫面	状 態	形態	備 考
101	遺構外	——	9.9	4.6	2.2	150	硬砂岩	有	完形	Ia	刃部かなり磨耗
102	＊	——	(10.1)	(5.2)	(2.5)	(240)	＊	無	一部欠損	その他	刃部に磨耗（片状）
103	＊	——	(13.3)	(5.3)	(1.8)	(170)	石墨片岩	有	＊	I b	
104	＊	——	12.4	7.7	2.1	125	ホルンフェルス	無	完形	III	
105	＊	——	8.5	4.5	1.7	85	シルト岩	有	＊	その他	（小型）
106	＊	——	(10.4)	(5.7)	(2.2)	(125)	緑色泥片岩	無	一部欠損	III	
107	＊	——	12.8	7.2	2.5	250	硬砂岩	有	完形	III	刃部全体に磨耗
108	＊	——	(6.0)	(6.3)	(2.0)	(100)	千枚岩	無	欠損	その他	（原形不明）

第 8 表 石 鉄

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	完形	備 考
1	1 b 号住居址	Na13	13	80	6	1.4	チャート	○	
2	＊	Na14	17	12	3	0.3	珪質砂岩	○	
3	＊	Na17	22	23	12	11.0	＊	○	
4	＊	フク土	(17)	(13)	(5)	(0.8)	チャート		
5	2 号住居址	N-15-炉内Na10	13	10	2	0.2	黒曜石	○	
6	＊	N-16-25-ⅩⅧ-48	(11)	(14)	(3)	(0.3)	＊		
7	＊	N-16-43-Ⅹ-49	23	17	6	1.6	チャート	○	
8	＊	N-16-43-ⅩⅧ-92	17	7	5	2.2	珪質砂岩	○	
9	＊	N-16-B44-Ⅹ-38	(17)	(22)	(4)	(1.2)	波紋岩		
10	＊	N-16-48-ⅩⅧ-12	(14)	(11)	(2)	(0.2)	黒曜石		
11	＊	N-16-55-Ⅷ-57	14	6	4	1.5	珪質砂岩	○	
12	3 号住居址	N-16-26-ⅩⅧ-29	(17)	(11)	(3)	(0.14)	黒曜石		
13	＊	N-16-26-ⅩⅧ-30	(11)	(4)	(2)	(0.3)	＊		
14	4 a 号住居址	K-2	17	15	3	0.9	細粒珪質砂岩		
15	＊	M-14-23-Ⅲ	15	9	6	2.8	安山岩	○	
16	＊	N-14-35-ⅩⅧ-104	(9)	(5)	(3)	(0.14)	黒曜石		
17	＊	M-14 Na1293	(12)	(14)	(4)	(0.7)	＊		
18	＊	M-14 Na1387	(5)	(8)	(3)	(0.4)	＊		
19	5 号住居址	K-9-35-Ⅳ	13	6	2	0.2	＊	○	
20	3 号土壌	(C-1)-I	17	8	6	2.9	チャート	○	
21	30 号土壌	V-17	12	18	16	1.4	黒曜石		

第 9 表 砥 石

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	備 考
1	1 号住居址	3 区フク土	12.0	6.4	5.4	348	砂 岩	凹 5 ヶ所
2	1 b 号住居址	Na6 内充堀土中	(6.8)	(2.5)	(1.3)	(20)	スコリア質安山岩	
3	2 号住居址	M-16-8-V	(4.9)	(3.5)	(1.5)	(30)	＊	
4	＊	N-16-46-ⅩⅧ-43	(13.2)	(8.1)	(2.1)	(300)	＊	
5	＊	N-16-60	(15.1)	(16.6)	(8.1)	(1429)	長石質砂岩	石皿だったと思われる
6	4 a 号住居址	M-14-S-125	6.6	9.6	5.2	430	スコリア質安山岩	皿状凹 2 ヶ所
7	20 号土壌	——	(9.6)	(9.0)	(2.7)	(230)	＊	
8	遺構外	M-13	5.1	5.9	1.6	60	長石質砂岩	
9	＊	——	8.0	6.9	1.6	119	硬砂岩	
10	＊	北斜面	9.7	6.4	1.9	121	スコリア質安山岩	
11	＊	＊	(9.8)	(5.7)	(1.9)	(114)	＊	

第10表 磨面付石器

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	備 考
1	1 b 号住居址	N-17	(15.3)	(10.2)	(12.0)	(1465)	硬砂岩	
2	4 a 号住居址	M-14-51-IV	(6.7)	(10.1)	(5.3)	(445)	＊	
3	＊	M-14-54-III	(9.2)	(7.6)	(5.8)	(330)	＊	
4	1号土壌	N-3床面+N-5床面	(22.0)	(13.3)	(5.2)	(1005)	＊	
5	遺構外	M-13-C区-113	(17.5)	(8.4)	(9.4)	(620)	＊	
6	＊	――	(12.5)	(10.2)	(5.8)	(245)	＊	
7	＊	――	(9.2)	(8.3)	(2.8)	(723)	花崗岩	

第11表 横刃形石器

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	備 考
1	1 b 号住居址	フク土	(4.3)	(4.1)	(0.4)	(12)	硬質頁岩	
2	2号住居址	L-15	(3.4)	(7.6)	(0.8)	(30)	緑色岩	
3	＊	M-16-28-VII-13	(4.6)	(7.3)	(1.6)	(60)	シルト岩	
4	＊	N-15-炉内-25	(4.4)	(7.8)	(1.1)	(40)	＊	
5	＊	N-16-19-XV-66	(5.1)	(3.8)	(0.8)	(40)	緑色岩	
6	＊	N-16-55-Ⅱ-68	(3.2)	(5.8)	(0.8)	(20)	シルト岩	
7	＊	N-16-56-Ⅳ	(5.1)	(7.2)	(1.2)	(60)	硬砂岩	
8	＊	N-16-60-XVII-73	(5.1)	(9.3)	(1.4)	(70)	＊	
9	4 a 号住居址	M-14-18-I	(4.0)	(6.4)	(0.8)	(30)	＊	
10	＊	M-14-20-Ⅳ	(4.1)	(5.8)	(0.7)	(20)	ホルンフェルス	
11	33号土壌	――	(4.8)	(7.3)	(1.2)	(40)	＊	
12	遺構外	N-13-SK246-No2	(4.4)	(8.0)	(0.8)	(40)	緑色岩	
13	＊	N-15	3.2	8.0	1.0	30	＊	
14	＊	T-11	(7.9)	(2.1)	(0.7)	(5)	シルト岩	
15	＊	V-13	(4.4)	(8.9)	(1.1)	(60)	硬砂岩	
16	＊	――	(4.7)	(7.1)	(1.5)	(60)	＊	
17	＊	――	(3.9)	(9.1)	(1.1)	(40)	ホルンフェルス	

第12表 不定形石器

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	備 考
1	2号住居址	M-16-20-Ⅱ-71	(8.7)	(6.5)	(1.4)	(80)	硬砂岩	
2	＊	N-16-49-XVII-29	(6.8)	(6.7)	(2.9)	(200)	ホルンフェルス	
3	3号住居址	N-16-37-XVII-110	(8.0)	(7.1)	(1.4)	(138)	硬砂岩	
4	4a号住居址	M-14-26-II	9.0	7.2	1.8	140	＊	
5	＊	M-14-S-53	(9.3)	(6.5)	(2.3)	(160)	＊	
6	2号土壌	N-2フク土	(10.4)	(5.8)	(1.3)	(90)	＊	
7	20号土壌	――	(6.1)	(8.9)	(2.7)	(220)	＊	
8	遺構外	N-16	8.9	7.3	2.8	160	ホルンフェルス	
9	＊	＊	(9.8)	(7.0)	(2.4)	(225)	硬砂岩	
10	＊	N-10	(12.0)	(7.0)	(1.2)	(195)	緑色泥片岩	
11	＊	O-16	8.0	6.3	1.4	170	シルト岩	
12	＊	T-11	(6.3)	(7.7)	(3.6)	(190)	硬砂岩	
13	＊	V-13 黒色下層	(11.5)	(7.4)	(1.3)	(135)	緑レン片岩	
14	＊	2号住居址周辺	(6.6)	(8.9)	(1.3)	(105)	硬砂岩	
15	＊	――	(8.0)	(7.8)	(4.0)	(260)	ホルンフェルス	
16	＊	――	(6.8)	(6.5)	(2.3)	(135)	硬砂岩	

第13表 凹 石

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	打痕	磨 痕	凹の数	備 考
1	1 a 号住居址	——	(18.1)	(10.7)	(7.1)	(1248)	石墨片岩	有	無	(3)	№9 配石
2	＊	№17壁溝内	12.1	9.6	2.8	610	緑レン石片岩	無	不明	7	(不定形・自然礫)
3	1 b 号住居址	——	24.5	21.7	7.7	7500	緑色泥片岩	＊	無	4	
4	2 号住居址	M-16-2	(8.6)	(8.0)	(2.5)	(272)	石墨片岩	＊	＊	(2)	(不定形・自然礫)
5	＊	M-16-6	19.1	17.1	6.7	3800	＊	＊	＊	13	蜂の巣石
6	＊	M-16-18	15.9	11.5	4.4	1274	緑色泥片岩	＊	有	1	(不定形・自然礫)
7	＊	M-16-22	16.1	12.2	6.6	2261	石墨片岩	＊	無	1	＊
8	＊	M-16-27	7.6	5.1	0.8	119	緑色泥片岩	＊	＊	1	＊
9	＊	M-16-28	(16.2)	(11.3)	(2.4)	(1052)	＊	＊	＊	(3)	＊
10	＊	M-16-51	(12.3)	(3.8)	(1.0)	(79)	滑石片岩	＊	＊	(2)	＊
11	＊	M-16-55	(13.1)	(10.7)	(1.8)	(340)	緑色泥片岩	＊	＊	(3)	＊
12	＊	M-16-57	26.0	15.5	8.7	3900	＊	＊	＊	11	蜂の巣石
13	4 a 号住居址	——	10.4	6.8	1.8	202	＊	有	有	2	磨石？
14	＊	M-14-S-131	28.0	12.8	9.0	6800	＊	無	＊	36	蜂の巣石
15	＊	S-20	32.4	17.3	8.3	8182	＊	＊	不明	1	(不定形・自然礫)
16	＊	S-33	(18.3)	(13.6)	(2.6)	(1114)	＊	＊	有	(3)	石皿？
17	6 号住居址	№7	(26.7)	(13.2)	(4.7)	(3500)	石墨片岩	＊	無	(6)	(不定形・自然礫)
18	2 号土壇	№1 フク土	31.3	7.9	3.0	1776	緑色泥片岩	＊	＊	25	蜂の巣石(棒状石器)
19	7 号土壇	8-Ⅳ-84	16.1	13.8	9.2	2800	石墨片岩	＊	＊	4	(不定形・自然礫)
20	＊	8-V-68	24.2	14.3	12.1	4900	緑色泥片岩	＊	不明	1	＊
21	＊	8-VII-93	33.2	19.5	11.3	8430	石墨片岩	＊	＊	7	＊
22	遺構外	M-14	(12.8)	(5.5)	(2.9)	(262)	＊	＊	無	3	＊
23	＊	M-16	19.0	10.6	5.6	1728	点紋石墨片岩	＊	＊	2	＊
24	＊	＊	9.3	6.0	2.7	211	石墨片岩	＊	＊	3	＊
25	＊	N-15	(12.8)	(10.9)	(5.5)	(1568)	＊	＊	＊	1	＊
26	＊	N-16	(11.3)	(12.8)	(3.0)	(620)	緑色泥片岩	＊	不明	(1)	石皿？
27	＊	＊	(8.5)	(8.9)	(2.2)	(150)	結晶片岩	＊	無	(2)	(不定形・自然礫)
28	＊	＊	9.1	10.7	5.9	712	石墨片岩	＊	＊	1	＊
29	＊	O-16	(7.2)	(3.7)	(3.6)	(233)	緑色泥片岩	＊	＊	(1)	＊
30	＊	＊	(8.0)	(7.2)	(1.4)	(124)	石墨片岩	＊	＊	(1)	＊
31	＊	＊	8.5	7.5	3.0	280	＊	＊	＊	2	＊
32	＊	V-13区B区包含層	13.9	9.1	4.7	1263	＊	＊	＊	2	＊
33	＊	V-13区包含層	(9.7)	(7.9)	(3.7)	(459)	＊	＊	＊	(2)	＊
34	＊	——	(7.2)	(6.1)	(0.7)	(141)	＊	＊	＊	(1)	＊
35	＊	——	18.1	15.5	7.1	2900	緑色泥片岩	＊	＊	2	＊
36	＊	——	16.7	8.4	2.5	612	石墨片岩	＊	＊	2	＊

第14表 磨 石

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	備 考
1	1 b 号住居址	№11床直	13.2	7.6	3.6	560	硬砂岩	敲打痕
2	2 号住居址	M-16a2 Pt&3	13.2	7.7	4.0	612	＊	敲打痕、凹1ヶ所
3	4 a 号住居址	430	13.3	8.5	5.0	852	＊	敲打痕
4	遺構外	L15杭付近	11.9	6.3	3.0	430	緑色岩	敲打痕、凹1ヶ所
5	＊	V-13区B区包含層	(4.9)	(7.7)	(3.4)	(185)	安山岩	凹1ヶ所
6	＊	祭祀B2区内	10.0	7.3	3.9	390	石英閃緑岩	凹2ヶ所
7	＊	祭祀付近	(8.5)	(7.3)	(3.6)	(310)	硬砂岩	敲打痕
8	＊	北野塚・土六番一地点	10.9	9.4	4.1	602	＊	＊
9	＊	奥地区外北野塚Pt一様	10.4	9.0	3.3	425	石英閃緑岩	＊

第15表 石 皿

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	完形	備 考
1	1 a 号住居址	Na12配石	(14.4)	(15.5)	(4.8)	(662)	スコリア質安山岩		
2	1 b 号住居址	Na 4 床直	(17.2)	(15.9)	(3.5)	(952)	点紋石墨片岩		凹 1ヶ所
3	2 号住居址	M-16-X-5	(19.5)	(16.5)	(6.0)	(3000)	緑色泥片岩		凹 8ヶ所
4	〃	N-16-27-XV-100	(9.8)	(8.1)	(4.3)	(328)	長石質砂岩		凹あり 砥石状
5	〃	N-16-45-Ⅱ-24	(28.2)	(11.7)	(8.0)	(2310)	〃		砥石状
6	〃	N-16-71-V-12	(7.7)	(5.3)	(3.8)	(143)	〃		凹 2ヶ所 砥石状
7	〃	N-16-42-XV-57	(9.5)	(3.7)	(3.5)	(80)	金雲母片岩		破 片
8	〃	N-17-57-I-25	(8.0)	(6.2)	(3.9)	(283)	スコリア質安山岩		
9	4 a 号住居址	M-14-51-Ⅳ	(5.2)	(3.1)	(4.2)	(88)	安山岩		破 片
10	遺構外	K-8	(8.7)	(5.9)	(3.5)	(240)	長石質砂岩		
11	〃	N-13	(19.2)	(11.3)	(7.2)	(1965)	輝石角閃石安山岩		凹 21ヶ所 縁の巣状
12	〃	〃	(26.0)	(24.0)	(3.6)	(4000)	緑色泥片岩		凹 7ヶ所
13	〃	――	57.6	28.5	6.8	16120	石墨片岩	○	凹 6ヶ所
14	〃	――	(15.0)	(9.5)	(4.5)	(595)	砂 岩		凹 4ヶ所
15	〃	――	(41.0)	(15.5)	(6.5)	(5500)	緑色泥片岩		凹 2ヶ所

第16表 台 石

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	備 考
1	1 a 号住居址	Na13	(20.3)	(15.4)	(10.5)	(5685)	硬砂岩	接 合
	1 号土壇	Na 2	(22.4)	(7.3)	(7.5)	(2478)	〃	
	遺構外	――	(9.4)	(7.2)	(8.9)	(1120)	〃	
2	1 b 号住居址	Na19	(39.0)	(20.0)	(12.0)	(1500)	緑色岩	敲打・磨痕及び凹2ヶ所
3	〃	Na20	(8.8)	(11.2)	(14.8)	(2063)	硬砂岩	接 合 磨面あり
	〃	Na21	(11.9)	(14.7)	(14.4)	(4207)	〃	
	〃	Na22	(20.8)	(13.8)	(15.0)	(6985)	〃	
	〃	〃	(9.8)	(9.3)	(7.6)	(1192)	〃	

第17表 敲石・棒状石器

	遺 構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石 質	形態	備 考
1	2 号住居址	M-16-3-VII-75	16.0	3.4	1.9	220	緑色岩	敲石	棒 状
2	〃	M-16-3-VII-109	13.4	1.6	1.2	105	石墨片岩	〃	〃
3	〃	N-10	(6.7)	(5.0)	(4.7)	(263)	緑色泥片岩	〃	磨面・敲打痕あり(踏円状)
4	〃	N-16-60-Ⅳ-57	(11.0)	(3.0)	(0.7)	(110)	石墨片岩	〃	棒 状
5	4 a 号住居址	M-14-3-Ⅱ	(7.1)	(4.3)	(3.2)	(186)	硬砂岩	〃	火を受けている
6	〃	M-14-34-Ⅱ	(4.8)	(2.9)	(1.7)	(80)	〃	〃	
7	〃	M-14-S-97	14.5	5.2	3.2	582	緑色泥片岩	敲打石	
8	〃	N-14-S K	14.2	6.0	4.5	512	硬砂岩	敲石	棒 状 凹1ヶ所
9	5 号住居址	S-5	15.2	4.2	2.9	460	石墨片岩	〃	棒 状
10	〃	S-70	12.9	2.5	1.8	172	〃	敲打石	一部磨擦痕
11	遺構外	N-13	8.2	1.1	1.0	60	緑色泥片岩	敲石	棒 状
12	〃	V-13下層	(9.9)	(2.2)	(1.2)	(110)	〃	敲打石	
13	〃	――	8.2	1.9	1.8	100	硬砂岩	敲石	棒 状
14	〃	――	14.8	4.0	3.6	470	〃	〃	〃
15	〃	――	9.9	4.9	2.1	195	頁 岩	〃	〃

第18表 磨製石斧

	遺構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石質	備考
1	2号住居址	N-16-55-V-19	(11.8)	(4.5)	(3.2)	(242)	緑色岩	頭部片 敲打痕
2	＊	炉内Na33	(5.2)	(4.4)	(2.8)	(125)	角閃岩	＊
3	1号土壌	Na 4床面	(11.6)	(4.6)	(3.1)	(280)	緑色岩	刃部片
4	遺構外	2号住居址周辺	(7.1)	(4.3)	(4.0)	(155)	角閃岩	頭部片 敲打痕

第19表 その他の石器

	遺構	地点・層位	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	石質	形態	備考
1	1号住居址	1区フタ土	2.5	1.1	1.5	7.7	チャート	石錐	
2	2号住居址	M-14-40-Ⅳ	4.7	3.0	1.2	20.0	硬砂岩	小型不定形石器	
3	＊	M-16-2-Ⅲ-49	4.0	3.5	0.8	11.0	シルト岩	＊	
4	＊	M-16-20-Ⅱ-15	6.0	4.7	1.5	22.0	＊	＊	
5	＊	M-16-27-Ⅲ-6	(4.7)	(3.8)	(1.0)	(21.0)	硬砂岩	＊	
6	＊	N-15-Ⅳ-2	2.4	2.7	0.7	7.0	＊	＊	
7	＊	N-16-35-Ⅳ-112	1.5	1.6	1.0	8.4	チャート	小型石器	
8	＊	N-16-36-Ⅲ-66	5.0	3.5	1.2	21.0	硬砂岩	小型不定形石器	
9	＊	N-16-51-Ⅱ-12	8.1	5.9	1.5	60.0	＊	石匙	
10	＊	N-16-54-Ⅲ-54	(6.5)	(4.0)	(1.2)	(54.0)	緑色泥片岩	不明	石棒の一部？
11	3号住居址	N-16-18-Ⅲ-47	4.3	4.0	0.9	22.0	硬質頁岩	小型不定形石器	
12	4a号住居址	Na437	(1.6)	(0.5)	(0.4)	(0.3)	黒曜石	石錐	
13	＊	M-13Na965	2.1	3.1	0.7	3.0	チャート	調整のある剥片	
14	＊	M-14Na1195	2.0	1.7	0.7	2.1	黒曜石	小型石器	
15	＊	M-14Na2038	3.5	1.5	1.0	1.9	チャート	石錐	
16	5号住居址	J-9-11-V-1	4.5	4.1	1.3	25.0	＊	小型不定形石器	
17	6号土壌	――	(3.6)	(3.6)	(1.1)	(11.7)	＊	調整のある剥片	
18	遺構外	N-16	2.0	1.8	1.2	8.4	＊	小型石器	
19	＊	T-11	6.2	5.4	1.8	65.0	ホルンフェルス	小型不定形石器	
20	＊	V-13黒色下層	(5.4)	(3.9)	(0.9)	(19.0)	＊	＊	
21	＊	＊	(6.1)	(4.2)	(2.3)	(60.0)	硬質頁岩	＊	
22	＊	2号住居址周辺	2.2	1.2	0.6	0.6	黒曜石	石錐	
23	＊	＊	(1.6)	(3.4)	(1.2)	(4.4)	チャート	調整のある剥片	
24	＊	北斜面	(3.7)	(3.0)	(0.5)	(5.2)	＊	＊	
25	＊	――	(2.1)	(2.6)	(0.9)	(5.0)	シルト岩	小型不定形石器	
26	＊	――	5.0	3.2	2.5	40.0	硬質頁岩	＊	
27	＊	――	(6.7)	(4.2)	(0.9)	(40.0)	硬砂岩	不明	石棒の一部？
28	＊	――	3.4	3.4	1.5	13.0	チャート	小型石器	

(※石器検出遺構の1a住・1b住は、調査過程で2棟の重複が推定されたためにつけられた番号である。したがって、これらは全て1号住として扱うことができる。)

第Ⅳ章 住居埋没過程の検討

1. 遺物位置の検討

橋ノ入遺跡では、国分期3軒・縄文期8軒の住居址が発掘調査されている。ここでは、このうち国分期の5号住居址及び6a号住居址そして縄文期の2a号住居址に関してその廃絶後の埋没過程を明らかにする為に、フク土中の遺物分布傾向やフク土の成因について考察する。したがって分布図等では各住居址ともに、国分期ではカマドの構築材、縄文期では炉体土器といった施設的な性格を帯びた土器、及び床面直上に存在する土器は除外して、フク土中に含まれている土器についてのみ記載してある。

遺物位置の傾向 第68図・69図・70図は住居址別、各々2面（縄文期の2a号住居址は $\frac{1}{2}$ 面）の土層に出土遺物を投影したものである。ここからは、6a号住居址出土の国分期土器・縄文期土器ともに所謂「面上の分布」ではなく、「層中の分布」に近い在り方（林謙作 1973）が認められる。又、遺物分布の集中は土層傾斜の変換点（壁際の急な傾斜から、内側に向かって緩やかになってくる角度の変換点）付近に認められる。この現象は国分期住居址出土の縄文期土器に於いて最も顕著であり、同国分期土器についても認められ、礫については認められない。又、この土層傾斜変換点への遺物の集中は、縄文期の2a号住居址でも強く認められる。（注1、2）

この様な遺物の時期差や、更には住居址の年代差をも超えて認められる土層傾斜変換点への遺物集中現象について以下で考えてみよう。

ある面上に存在している遺物は、人為的な作用を受けなくなった時点から静止して原位置を保存しているものではなく、その後も自然の作用によって運動する可能性を有している。つまり直接的な人為作用から解放されると同時に、物理的法則に規定された力場の中での運動を始めることが考えられる。したがって、発掘調査によって我々が認識し得る遺物の位置は、個々の遺物に対するこの2つの力の累積結果としてのそれであって“累積結果としての分布”の検討に際しては、この2つの力の経時的な位置付けと具体的な作用方向の分類が要件となる。（注3）

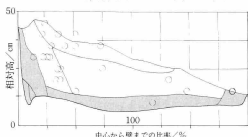
流入物と投入物 ここで扱っている遺物について遺構外から流入したものと、遺構内に投入されたものの二者に分けて考えてみよう。前者は遺構外で人為作用から解放されて、それ以降自然の作用に規定された運動を行ない、後者は遺構内で人為作用から解放されて、それ以降自然の作用に規定された運動を行なう。この人為作用から解放された時の遺物の位置を前位置と仮に呼ぶと、流入では前位置が遺構外に在り、投入についてはその前位置は遺構内であったものと定義する事が出来る。（注4）

先に認められた土層傾斜変換点への遺物集中の現象は、この様にして観た時流入の結果を示していると考え事が出来よう。即ち、逐次形成される面上での遺物の動きは前述のようにもはや物理的法則によって規定されているので、経時の変化として観るならば流水・流砂・風等を契機として、遺物の持つ位置的エネルギーと遺物・土層面間の摩擦力が、安定した関係を有する方向へと向う可能性を有している。したがって各々共時的単位の中での土層に対する遺物の位置は、多くの場合摩擦力に比して位置的落差の大きい土層傾斜の急な部分では不安定で、この斜面を下り落ちる方向へと遺物を向かわせる力が強く内在し、同様に摩擦力に比して位置的エネルギー・落差の極めて小さい土層傾斜の緩やかな部分では、遺物の位置はより安定であると考えられる。したがって傾斜の変換点付近に遺物が集中するであろう。又、この傾向は無数に累積する各面の露出時間によっても異なってくる。即ち、露出している時間が長いほど先に述べた契機の訪れる確率は高く、遺物分布傾向がより中心にズレようになる。

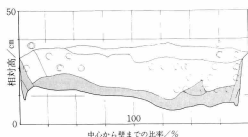
一方投入物については、前位置が既に遺構内でありこの時点から物理法則の規定を受ける為、土層の形成する面の角度と遺物分布の集中との関係は二次的なものとなり、一次的な位置規定要因は投入場所となる。したがって投入時点で形成されていた面上で、投入地点から拡散して行くような分布を示すであろう。

第68図

橋ノ入遺跡第
5号住居址遺
物出土傾向図



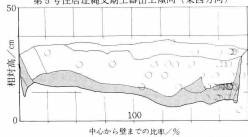
第5号住居址縄文期土器出土傾向（南北方向）



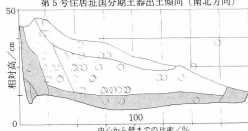
第5号住居址縄文期土器出土傾向（東西方向）



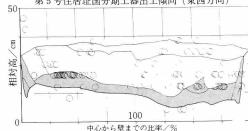
第5号住居址国分期土器出土傾向（南北方向）



第5号住居址国分期土器出土傾向（東西方向）



第5号住居址磯出土傾向（南北方向）



第5号住居址磯出土傾向（東西方向）

この様にして、土層傾斜変換点への遺物集中現象を流入と考えれば、先の層中分布的なその在り方とも矛盾しない。ここでは5号住居址から検出された礫以外の物は、いずれも土層傾斜の変換点にその分布が集中しているので、流入物として捉えておきたい。

2. フク土及び、フク土と遺物の関係

今まで遺物の前位置については述べたが、同様にフク土の前位置についても考えてみたい。住居址フク土については国分期・縄文期ともに概以下の基準で前位置性を考慮した再統合を行なう事が可能である。(第68図・69図・70図)

(1)主として黒色土から構成されるもので、フク土の上部を占める。(アミナシの部分)

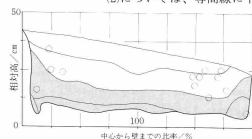
(2)地山下部の構成層(ローム・粘土)を多く含むものでフク土の下部を占める。(アミフセの部分)

(1)については、等高線に平行方向では中心から対称な堆積状況を呈しており、直交方向では相対高の高い側から低い側へと傾斜した形状をなしている。そして、主として旧表土層である黒色土を多く含んでいる。これについて以下では黒色土二次堆積土層と呼ぶことにする。

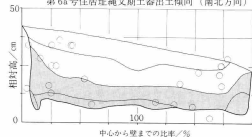
(2)については、等高線に平行方向、直交方向ともに概中心から対称であり、

第69図

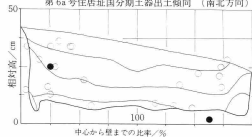
橋ノ入遺跡第
6号住居址遺
物出土傾向図



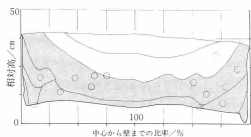
第6a号住居址縄文期土器出土傾向(南北方向)



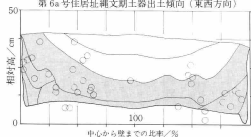
第6a号住居址国分期土器出土傾向(南北方向)



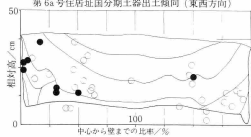
第6a号住居址国分期土器対b号住居址接合物分布傾向
(南北方向)



第6a号住居址縄文期土器出土傾向(東西方向)



第6a号住居址国分期土器出土傾向(東西方向)



第6a号住居址国分期土器対b号住居址接合物分布傾向
(東西方向)

堆積時の周囲地山の傾斜による制約が(1)に比した時極めて弱い。又、一般的に表土として露出していない旧表下の地山の構成成分（ローム・粘土）を比較的多く含んでいる。したがって以下では地山下層二次堆積土層と呼ぶことにする。

次にこの二分化された土層中に含まれる遺物の位置的属性についてそれぞれ検討してみよう。

(1)黒色土二次堆積土層

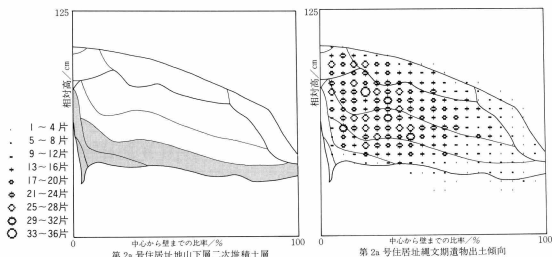
第71図は5号住居址黒色土二次堆積土層での縄文期土器と国分期土器の方位別出土傾向ヒストグラム及び相当方位での壁際フク土厚を表したものである。縄文期土器では1ヶ所の、国分期土器では3ヶ所の集中が認められ、全体的に国分期土器は縄文期土器に比して集中傾向が著しい。又、フク土量や傾斜方向は、この集中に対して直接的、一元的な規定要因ではない事が明確であり、対応する方向に他の原因の存在が推定される。(注5)

(2)地山下層二次堆積土層

第69図下は、6a号住居址出土の国分期土器のうち、6b号住居址フク土出土遺物と接合関係を有するものを黒丸で表わしてある。出土量に比した時、接合関係を有する遺物の比率は17%と比較的高い。又、これらの分布は地山下層二次堆積土層に集中しており、この土層と、6b号住居址フク土との関係の強さを物語っている。

第72図は、先に述べた5号住居址黒色土二次堆積土層中の国分期土器についてその集中方位と遺構・自然条件の関係を示したものである。図のように、これら3つの集中には、

集中1…傾斜最高方向・9号住居址



第70図 2a号住居址遺物出土傾向

集中2…カマド・6a、b号住居址

集中3…貯蔵穴・7号住居址

の存在が、その実体として考えられる。第73図は集中2と集中3に相当する遺物のみを抽出し、土層に投影したものであるが、集中3→集中1という形成の前後関係が捉えられよう。これは、この集中を各対応方位に位置する後出的な住居起源と見做した時、報文Ⅰ中の住居址新旧関係と矛盾しない。では、この様な現象はどのように説明されるだろうか。

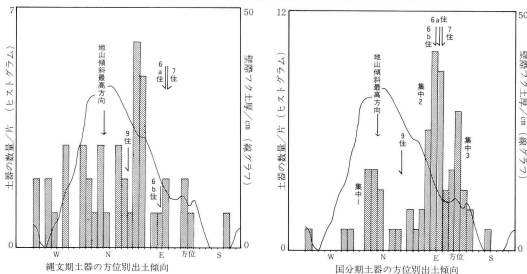
遺物廃棄の実態 近年行なわれている遺構外をも含めた調査区全域での全点ドットによる遺物の分布図や接合関係図を観る時、そこには明らかに住居を核として、あたかも周辺に土器を撒き散らしたかのような接合資料の分布が多く認められる（例えば 桐生直彦他 1983等）。つまり生活に不要となった破損土器を当該住居周辺に散布的に棄てる行為が行なわれておれば、この様なある住居址に近接した、より後出的な住居址方向からの遺物の流入が可能となる。反面、これらの集中が5号住居址自身のカマドや貯穴に由来するものである検証は、集中を形成している遺物の器種組成や接合関係から、ある程度可能かとも思われるが今回は遺物の絶対数が少なく、5号、6号住居址以外は未発掘なので行なわない。（注6・7）

ともあれ今回の分析では、カマド内出土土器と接合関係を有する物や貯穴内出土土器はこの集中から除外して算出図示してあるので、消極的ではあるが、ここでは集中を形成するものとして後出の近接住居からの散布的廃棄行為の可能性を指摘するに止めたい。いずれにしても類例の集積が必要であろう。

周境の存在

次に地山下層二次堆積土層の実体について考えてみよう。フク土としての地

（住居址名を付した矢印は、相対方位に、その住居址が存在していることを表す）



第71図 第5号住居址の方位別遺物出土傾向

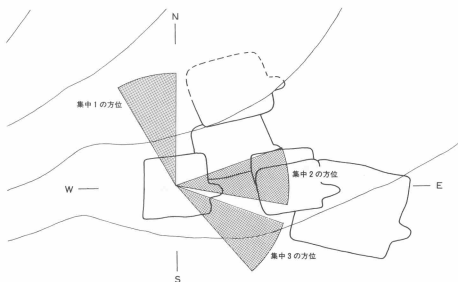
山下層二次堆積土層の特徴は、以下の点に認めることができる。

- (1)地形による制約（地山傾斜と層厚の関係）が弱い。
- (2)自然に露出していない成分（地山の下層に相当）を含んでいる。
- (3)重複関係を有する新しい側の6 a号住居址の場合には、より古い6 b号住

居址出土遺物と接合関係を有するものが多く認められた。

これらのことから、この土層は、地山傾斜に沿った流入物ではなく、表土下地山の土を含んだ住居周辺を巡るような構築物の崩壊流入が考えられる。この成分より成る該当する構築物（住居の周囲全方向に構築された、成分としてロームや粘土等のより下部の地山土をも含む一定体積を持った施設）として周堤が想起されよう。

周堤の構造については弥生時代～古墳時代のものであるが都出比呂志氏により言及されており（都出、1975）、最近では黒井峯遺跡から火山灰により埋没した周堤を持つ住居址が発見されている（群馬県子持村教育委員会、1986）。又、当地域周辺では阿知越遺跡6号住居址より壁土状土製品が検出されており（鈴木他、1984）、これは主としてロームより成りスサを含んだ物で、同住居址は火災住居であることから、部分的な強熱によって周堤の一部が焼結したものであると考えられる。ともあれ当該住居が周堤を有していたとするならば、このような住居に近接し地上に突出した大容量を持つ構築物の崩壊流入土層が住居址フク土より検出されない事の方がむしろ奇異であり、ここでは地山下層二次堆積土層について住居址構築時に地山を掘り込み、その土を用いて周堤が住居の周囲に構築され、これが住居の廃絶とともに四方から流入したものであると考えたい。



第72図 橋ノ入遺跡第5号住居址遺物集中方位

縄文期の所産である2 a 号住居址出土物については、冒頭でも述べた様に、その土層傾斜変換点への遺物分布の集中から、これを流入物として捉えたい。又、5号住居址・6 a 号住居址に於いて認められた地山下層二次堆積土層が2 a 号住居址にも存在している事から、国分期のものと同列に扱うことは慎まなければならないが、ここでは暫定的に周堤の存在の可能性を指摘しておきたい。

3. 小 結

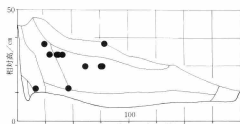
1. 当橋ノ入遺跡調査区内に所在する国分期に位置付けられる5号住居址、6 a 号住居址及び、縄文期の2 a 号住居址のフク土、遺物は5号住居址出土の礫以外いずれも流入物であると考えられる。

2. これらのフク土はいずれも構成成分によって、黒色土二次堆積土層と地山下層二次堆積土層に二分され、起源はそれぞれ周堤崩壊流入によるものと、旧表土流入によるものに対比する事が可能であった。

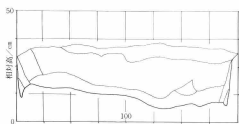
3. このうち周堤崩壊により形成された土層に含まれる遺物は、住居構築時に掘り込まれた地山部分にその起源が求められるものが多いと考えられた。

4. 表土流入により形成された土層に含まれる遺物は、散布的に当該住居址から周辺に廃棄されたものと、周辺の後出住居から廃棄されたもの及び、住居の付帯施設に由来するものと考えられた。

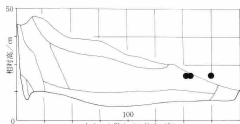
国分期住居址のフク土中遺物分布については、より多くの分析例の検討が必要であろう。又、縄文期の遺物についても同様であるが、更に一般に多く認められる同一住居址から出土する我々の弁別し得る複数型式の土器や、複数系統の土器についても各々抽出して、その分布の土層との関わり方や流入の契機が検討されねばなるまい。他にも質量と面上移動性の関係や、フク土に封入され



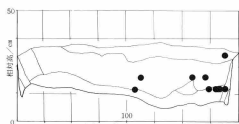
第5号住居址国分期土器集中1分布傾向（南北方向）



第5号住居址国分期土器集中1分布傾向（東西方向）



第5号住居址国分期土器集中3分布傾向（南北方向）



第5号住居址国分期土器集中3分布傾向（東西方向）

第73図 橋ノ入遺跡第5号住居址国分期土器集中分布傾向図

た後のゆるやかな運動についても検討の要が大である。

今回の分析では、従来暗黙の大前提としてあまり見られる事の少なかったフク土出土遺物の起源について、ささやかではあるが検討を行なった。これらは一般に当該遺構への帰属性が非常に曖昧であって、具体的な検討方法の提示は未だ見なかったものである。したがって旧来の遺構の年代決定や組成・一括性・編年と言った考古学的な操作での根源的部分に関わる問題を派生する可能性を含んでいる。又、廃棄・原位置・ブロックといった彼岸の動態を射程に入れた概念での分析に於ても同様見地からの検討が必要であろう。(大屋道則)

注

- (1) 国分期住居址では、まず対角のコーナーを結びこの交点を中心とした。この中心から東西・南北に各々面を設定して、ここに土層・遺物の投影を各々45°範囲で行なった。縄文期住居址では、プランを真円に当てはめ中心を求めた。次にフク土残存量の関係から中心-南の面のみに土層を投影し、遺物量が多いのでこれをシンボル表示した。
- (2) 5号住居址及び2a号住居址については、その調査時に微細遺物計量のため5cm厚単位で全遺物の取り上げを行なった。したがって投影も5cm単位で行なったため、「面上」「層中」という検討は行いえなかった。
- (3) 原位置論的考察に際しては、対象の裏付けが必要であろう。又、我々の捉える事のできる住居址とはあくまでも経時的累積結果なのであって、これを分析して行く際には一方では住居としての位置付けが、そしてもう一方では廃絶後のくぼ地(廃屋)としての位置付けも必要であろう。
- (4) まず「原位置」(麻生 1969)が、ついで「広い意味での原位置」(麻生、1975)が設定されているが、ここでは更にこれの外側に位置付けられる概念として前位置を提唱したい。
- (5) 遺物の数量については、先に設定した中心から10°ごとの角度内に分布する土器の量を表わしており、フク土厚については、その角度単位毎のフク土の相対量を反映している壁際フク土厚を提示した。
- (6) 住居址フク土包含土器の当該住居への帰属性について実体を想定し積極的な評価を行なったものとして、笹森健一氏による論考がある(笹森健一 1976)。なお、縄文期住居址での遺物接合関係については出縄康行氏の御厚意により、近々発表予定との事である氏の研究成果の一部を教示していただいた。記して謝意を表したい。
- (7) 集中形成がカマドに起因するものであれば、当然甕等の器種を中核として、カマド付近遺存遺物と強い接合関係(集中内でみれば比較的閉じた密接な接合関係)を呈すであろう。

第Ⅴ章 縄文中期の集落用益圏と生態的居住型

——埼玉県北部、とくに上武山地・児玉丘陵を中心として——

はじめに

地域における遺跡の固有性を示すことは、遺跡がその土地に存在する意義を、遺跡相互と生態系との関係網の中で位置づけることから始めねばならないであろう。橋ノ入遺跡の調査は、このような視点から、住居址の埋没過程と集落域の変化に注目し、これらを本集落周辺の用益地との関係で位置づけようと試みた（注1）。

従来の視点

従来の縄文中期の集落観・領域観は、水野正好氏を代表とする静態的な把握と、石井寛氏を嚆矢とする「集落の移動論」にみられる動態的把握とが対峙しているかに見える。1984年の日本考古学協会山梨大会のシンポジウム「縄文時代集落の変遷」にみられるように静態的集落観は、いまなお主流をなすとはいえ、集落の季節的移動等が、動物遺存体の分析（鈴木公雄、(1982)や、民族誌の適用（小林、1986）から提唱されており、このような近年の動向にも注目しなければならないであろう（注2）。

本稿の目的

本章では、このような趨勢を踏まえ、土地と集落との関係把握のために、「遺跡テリトリー」の分析（赤沢、1983等）や主要食料資源の分析（西田、1980等）等を参考にしながら、本地域の集団の行動の軌跡としての遺跡の通時的累積の中から、土地利用のあり方に接近してゆきたい。そしてその過程で、移住を含む集落間の関係と生態系への適応を推定しながら、橋ノ入遺跡の地域の中での位置づけを試行したい。

1. 集落間の距離の規則性

本稿の視点

我々の見ることのできる遺跡の分布は、遺跡の通時的累積の姿であり、縄文時代における行動の軌跡として存在している。これは、彼ら（縄文時代人）の生産的労働に適合した行動の累積であり、集落間の空隙に、彼らの生活の基盤が広がっていたとすることができる。したがって集落区域外の無居住区域であり続けた土地も、また行動の陰画的な累積にほかならない（注3）。つまり集落の占地は、その集落を支える生産の基盤としての土地と無関係に決定されるのでない限り、遺跡の累積性はその土地の利用期間や利用頻度を陰画的に表現しているといえよう。したがって、以上のような累積による遺跡群を通時群とすれば、この遺跡の通時群の土地利用状態の分析が、遺跡の共時群の把握の前提となるのである。

もちろん、縄文時代における土地に対する認識は、我々のそれとは異なっ



凡 例

- 環状集落
- 住居検出遺跡
- 住居の無い遺跡
- 未 確 認

- | | | |
|-------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 長沖久保 (志河内1984) | 11. 将監塚 (石塚 1984) | 21. 平松台 (金井塚1971) |
| 2. 寺山 (注 27) | 12. 古川端 (柿沼他1978) | 22. 台耕地 (鈴木 1983) |
| 3. 長沖梅原 (注 11) | 13. 栗山 (岡本他1983) | 23. 下南原 (鈴木 1982) |
| 4. 倉林東 (注 9) | 14. 峯 (岡本他1983) | 24. 駒形 (田部井1978) |
| 5. 天田 (注 15) | 15. 南大塚 (高木他1982) | 25. 保美濃山 (塚越 1976) |
| 6. 阿知越 (鈴木他1984) | 16. 東国寺東 (高木 1982) | 26. 譲原 (塚越 1976) |
| 7. 新宮 (注 16) | 17. 甘粕原 (並木 1978) | 27. 竹沼 (前原他1978) |
| 8. 古井戸 (石塚 1984) | 18. ゴシン (並木 1978) | 28. 薬師原 (古郡 1985) |
| 9. 深町 (鈴木他1981) | 19. 露梨子 (並木 1978) | 29. 島の上 (笹森他1977) |
| 10. 城の内 (鈴木他1981) | 20. 北塚屋 (小島他1985) | 30. 出口 (笹森他1977) |

第74図 橋ノ入道跡周辺の遺跡分布と距離(縄紋中期)

いるであろう。しかし、土地あるいはそこに生育する食料資源と採取手段が一定程度限定された場合、それらの性質の合目的的適用によって生産活動が遂行され、彼らの自然に対する認識とその適用範囲内で生産性が保証されるのであるから、我々の認識とは一定の齟齬を生ずるとはいえ、それを適用することにも一定の根拠があろう。つまり、彼らの生産活動に視点を据え、我々の土地や資源に対する認識を適用しながら、彼らの行動の累積によって土地利用状態と合目的活動に一定程度接近することが可能であろう。

分布と占地形態 当地域の縄文中期の遺跡の分布を見ると、地形別にその分布に濃淡があることがわかる(第74図)。これは、柿沼幹夫氏が本地域の縄文時代の遺跡立地について、湧水点との関係を中心として捉えたもの(柿沼、1978)と大筋では一致している。しかし、近年の発掘調査例の蓄積によって、神流川扇状地扇央部の本庄台地上にも大規模な集落址があいついで検出され、また丘陵部では比較的小規模な集落の多いことも判明してきた。更に本遺跡のように上武山地内にも集落址が発見されるなど、それぞれに濃淡はあるにせよ、広範囲に遺跡が分布していることが注目されるようになった。ここで、遺跡の占地と集中域等を概観すると、第20表のように類別することが可能である。

この各占地形態における、代表的なそれぞれの集落の地形毎の比率を比較すると、かなりの差が認められる(第75図)。これらの各占地形態の差による生産活動の異同を知るために、それぞれの集落の石器組成を比較すると、中期においては集落の占地形態によって石器組成に大きな違いは認められず、各地形の差異をこえて比較的類似的な生産活動に従事していたとすることができる(第78図)。つまり、先の占地形態により様々な地形を集落の周囲に有しているとは

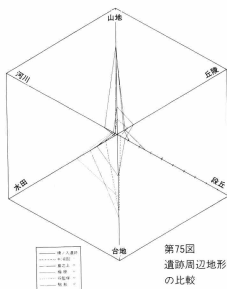
第20表
遺跡の占地
形態と代表例

占地形態	代表的占地域	代 表 的 遺 跡	備 考
A 台地	本庄台地扇央部	将監塚・古井戸、新宮高見	比較的散漫
	櫛引台地扇端部	出口、島の上	集 中
	江南台地西端部	甘粕原、ゴシン、露梨子	〃
B 丘陵	児玉丘陵	天田、長沖久保、長沖梅原	〃
	松久丘陵	峯	〃
	浅見丘陵		〃
	山崎山丘陵		〃
C 山地	上武山地	橋ノ入、栗山、寺山、下久保コテージ	散 漫
	多野山地		稀 薄
D 段丘	荒川河岸段丘	北塚屋、台耕地、下南原、駒形	比較的集中
	神流川河岸段丘		集 中
	鮎川河岸段丘	薬師原	〃
E 自然堤防	女堀川自然堤防	前田	散 漫
	温井川自然堤防	加樹皆戸	比較的散漫

いえ、大きな石器組成の差が認められないことは、異なった地形においても、土地を一定の指向性のもとに比較的等質に利用していたと考えることができる。このように考えるとき、同様規模の集団であった場合は、同様規模の用益地を必要とすると考えてよいであろう。

遺跡間の距離

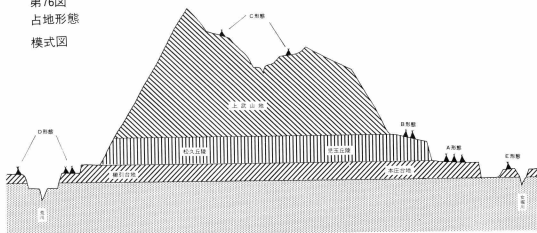
以上のような想定を踏まえ、遺跡間の距離とその分布密度について見てみよう。ここでは仮に、遺跡間の距離と集中をみるために、便宜的に1 km以内の距離にある遺跡間を線で繋



第75図
遺跡周辺地形
の比較

いで観察の便をはかった(第74図)。これによっても明らかのように、幾つもの集中域が連鎖的に隣接しながら一定の距離をもって存在していることがわかる。このように遺跡の集中域は、疎密を繰り返しながら連鎖的に集中帯を形成し、柿沼氏が指摘した丘陵部、扇状地扇端部や河岸段丘上に延びており、これらの土地の利用頻度の高さを窺わせる。このような遺跡のうち、住居跡の検出されている遺跡を中心に集落址間の距離を検討すると大旨3 kmの距離を有するものが多いことがわかる。この集落間距離の規則性は、遺跡分布密度の疎な区域でより鮮明に観察することができ、集中域でもその群間は大旨3 km程度の距離を認めることができる。このような、集落址間の距離の一定の規則性の存在については、すでに幾つかの地域で指摘されており、それぞれ2～5 km程度とされる例が多く(注4)、当地域の集落址間の距離もある程度の一般性を認めることができる。

第76図
占地形態
模式図



集落の生産的 基盤

このような集落址間の距離的な間隔は、彼らの生産的基盤であったと考えることができることから、まずこれらの土地についての経済的潜勢力（潜在的資源量）を検討する必要がある。縄文時間の主要な食料資源のひとつとして捉えられている堅果類の潜在的資源量については、小山修三氏によると、5人の年間必要な堅果類は約1.3トンであり、ふつう1ヘクタールあたり0.2トンぐらいの収穫を認めることができるとしている（小山、1984）。仮に20人程度の集団では、半径2.9kmの円圏で示される範囲に相当する、約26ヘクタールの土地が必要であるといえる。次に、動物性の主要な食料資源である、シカ・イノシシについて検討してみよう。西田正規氏は、「25～50人程度の集団が冬季間シカ、イノシシを主要な食料として消費する場合、集落から6km程度の近い範囲内に十分量のシカ、イノシシが生息していた」（西田、1980）としている。これを20人程度の集団に換算すると、半径3.5km～4.5kmの円圏で示される範囲となり、先の堅果類の範囲よりもやや広い範囲が想定される。このような範囲は、赤沢威氏の動物遺存体から見た「遺跡テリトリー」の分析によるところの、「少なくとも水産資源の調達範囲は遺跡から、5kmをそれほど離れなかった」（赤沢、1984）とする範囲に近く、以上から該期の集落の用益圏は、半径3～6km程度であったと想定しておきたい。

集落用益圏

ここでは、この半径3～6kmの円圏で示されるような区域を集落用益圏として捉え、従来用いられている集団領域の下位の区分として区別しておきたい（注5）。また、この集落用益圏の内部に包摂される、堅果類とシカ・イノシシの再生産に関わる範囲の重複する、半径約3kmの範囲を集落を維持するための中核的な用益圏として想定することができる。

ここでこれらの範囲を、橋ノ入遺跡に搬入された石材の採取範囲と比較してみよう。橋ノ入遺跡に搬入された石材は、集落付近の沢筋を含む小山川水系で石器組成の約4/5を占める結晶片岩類が、また神流川河床で組成中の約半数を占める石材が確保されていることがわかる（第III章参照）。このように先に見た3km圏内で、石器組成中の7割以上の石材が採取されており、当地域の石器石材採取の一般的傾向ともいえよう。しかし、安山岩や流紋岩は、利根川流域からもたらされたと考えられるもので、集落用益圏外にも橋ノ入集落の用益地が広がっていた可能性が高い。しかし、石材の問題は、石器の器種と石材の一定の対応が認められ、単に集落用益圏と関わる問題ではなく、集団領域や交易圏とも関連があると考えられるところから、食料生産に関わる用益圏と一律に扱うことは好ましくないであろう。

ともあれ、集落を中心とした半径3km圏は、日常的な行動圏であり、この圏内を中心に集落からの行動経路が延び、この経路を通して集落は用益地や他の居住地と結びついていたものと思われる（注6）。また、先の集落址間の距離は、

一集落の中核的な用益圏に適合する範囲であることから、当地域においては、この集落用益圏と想定される土地が互いに重複していると考えられる。このような、集落用益圏の重複状態は、集団規模によってその用益圏の広狭は異なるにせよ、隣接する集落址の同時併存の困難さを示すものであろう。

2. 集落用益圏と移住

日常的な生活の再生産にかかわる集落の核用益圏は、相互に重複し、当地域の大地の大半を覆いつくしているように見える。このような現象は、前期迄は見られなかったものであり（梅沢・宮崎、1984）、この集落占地域の拡大の背後には、一定の人口増と土地に対する新しい使用価値の発見が想起されよう。しかし一方、このような現象は、従来想定される該期の生業活動の範囲において、その潜在的資源量を人口許容量がうまわることから、これらの集落址がすべて併存するとは考え難く、現在我々の見ることのできる遺跡分布状態は、集落の移動の結果であり、移住の距離あるいは回数が大地に刻印されたものと推定することができる。

このような集落の移動については、IV章で検討した住居址の埋没過程のあり方から推定することができ、すでに石井寛氏が重複住居址における「非居住期間」の検討から一定程度論証されたものであり（石井、1977）、当地域においても一般的傾向と見てよいであろう。したがって、この用益圏の半径的重複状態は、集落の頻繁な移動の結果であると見做すことができる。このような集落の移動の原因について石井氏は、春先における過度の若芽摘みによる植生破壊を中心とする植物性食物の欠乏によるものと推定しており注目すべき点であると思われる。ここで再び、集落の移動について検討するために、集落の生産基盤について目を向けなければならないであろう。

集落周辺の植生 橋ノ入遺跡の花粉分析結果による古環境の推定（I章参照）では、縄文時代地表と考えられる6層は、「コナラ、クヌギ等の広葉樹から成る疎林と、キク垂科、イネ科、シダ類等から成る草地の存在が考えられる」、「裸地の環境」とされている。また、縄文中期の包含層でローム質の二次堆積層である5層では、ケヤキ属、コナラ亜属、カエデ属、ハンノキ属等が生育する疎林または裸地の環境にシダ類や草本類が生育していたと推定されている。このように、旧表（6層）や包含層（5層）の形成時期では、裸地・草地・疎林等の環境が推定され、その検出花粉から二次植生にかかる樹種を主体としていたとすることができる。この傾向は、検出花粉が少ないとされる第2号住居址覆土層で確認された花粉の様相にも認められ、集落形成期には切り開かれた集落の周辺に二次林や草地が広がっていたと考えることが可能であろう。

このような、集落周辺に二次林ないしは陽性植物が生育している景観は、西田正規氏が指摘するように、橋ノ入集落に固有のものではなく、縄文集落に比

較的一般的な傾向と考えられ、彼らはこのような環境に適応した生活形態を採用していたと推定される。西田氏は、縄文時代には集落周辺の二次林の形成を積極的に利用し、あるいは有用な陽性植物を採取し、とくに二次林構成種のうちでもクリについては、その種子の検出例が多いばかりでなく炭化材も多く検出されており燃料にさえ用いられていたことを明らかにしている。またクリについては、その有用性にもかかわらず伐採され薪材等に利用されていることから、積極的な管理、すなわち間伐や剪定の存在も推定している（西田、1981）。以上のような、積極的に利用されたとする二次植生は、橋ノ入集落の花粉構成種からも窺うことができ、更にクリの利用については、本庄市将監塚遺跡で多量の炭化種子が検出されており（注7）、当地域でも積極的に利用されていた可能性が高い。

現在の橋ノ入遺跡周辺地域の二次林は、中間温帯林でコナラを主としクリが高い優占度を示し、暖温帯においてもコナラが主体をなしていることが第21・22表でも明らかである。これは、縄文期の橋ノ入集落周辺に生育していた樹種にコナラが比較的高い頻度で含まれていることと一致しており、また平安期の花粉の構成もこれらと近似していることから、本集落周辺の二次林の組成は、現在の組成と比較的類似していると推定してよいであろう（注8）。ともあれ、現二次林の植生では中間温帯、暖温帯林ともに、クリが比較的高い密度で生育している点は注目してよいと思われる。

二次植生の利用 ここで、具体的な集落周辺の伐採等の状況を推定してみよう。橋ノ入集落のV-13区付近では、先に見た縄文中期の遺物包含層が堆積しているが、これはローム粒やローム粒子を多く含む二次堆積層であり、花粉分析結果の推定から周辺が裸地的状態にあったとき形成されたものと考えられるところから、この状態によって土壌の把持力が低下し、ローム等の土壌が流入・堆積した結果であると捉えることができる。このような、ローム主体の褐色土層の二次堆積の現象は、当地域では縄文中期（主に加曽利E期）に顕著に認められるもので、斜面部の旧表土層の上層に形成されていることが一般的である。例えば、長沖久保遺跡（恋河内、1984）では、縄文前期の遺物を混入する黒色土層の上部に、加曽利E式土器を包含するローム質の土層が約10cmの厚さで堆積し、その上層に更に黒色土が堆積している状態が観察できた。また類似の堆積状況は、倉林東遺跡（注9）や金屋西浦遺跡（注10）でも確認されている。これらの遺跡では、該当する時期の住居址が調査区内で検出されず、集落に隣接する可能性が高いとはいえ、一定の距離をもっていたことが窺える。また、長沖梅原遺跡（注11）では加曽利E期の住居址一棟が検出されたが、この住居検出地点からかなり隔った谷の対岸でこの二次堆積層が検出されている。これらの土層は、遺物包含区域がその層全体の広がり内部に包括されていることから、時期の限定

ができるが、層自体の範囲はより広域に広がっていることから、土層の形成は明らかに遺物とは第一次的に結びつくものではない。むしろ、このローム質の土層は、比較的急速な土壌の流入・再堆積の結果であると推定されるところから、先に見た橋ノ入集落と同様に周辺に裸地ないしは比較的開けた土地が存在していたと考えることができる。これらの土層は、遺物の包含によって時期限定できるところから集落付近でのみ確認できるものであろうが、おそらく遺物の包含の稀な同種の土層もより広汎に広がっているものと思われる。ともあれ、以上の如き二次堆積層の存在は、一定の裸地、草地ないし疎林の存在を予想させ、西田正規氏らの指摘する、二次林の積極的利用を無理なく想起させるものであるといえよう。

二次植生にかかる有用植物には、クリ、クルミ、コナラ、クヌギ、カシワ、ナラガシワ、ハシバミ、またワラビ、ヒガンバナ、クズ、ゼンマイ、フキ、ウド、ヤマイモ、タラノキ、キイチゴ、アケビ等があり、西田氏の指摘のとおり天然林中の有用性の低い樹木を選択的に伐採し、薪材等に利用することによって、除々に集落周辺は二次的な植生へと変化し、漸次それらは拡大する過程を辿ったものと思われる。とくに、伐採後の遷移の初期に類出するとされるワラビ、ゼンマイ、ヒガンバナ、クズのうちゼンマイを除く他は根茎類であり、鈴木忠司氏によって根茎類の採集具と推定されている打製石斧（短冊形）の数量比の占める割合が高い点も上記の二次植性に適合するものといえよう（注12）。

用益と休閒の 周期

しかし、このような二次植生の積極的利用における伐採と有用植物の採取は、一方では生産力の低下・土地の荒廃と裏腹である。例えば、千野裕道氏は、西田氏がクリの増産のための枝の剪定を推定していることに對し、建築材に用いられたクリ材には通直な樹幹のものが多くことから、若木の間伐や剪定された材が用いられたとは考難く、10年生以降のクリの収量減少を推定している（千野、1983）。また、ワラビについては「一度掘りあげたワラビ山の回復には約20年を要する」という民俗例が報告されており（橋口、1983）、採集が徹底されるとその回復には一定の休閒期間が必要であったと考えることができる。このような現象は、根茎類ばかりでなく、石井寛氏が集落の移動の原因とされた過度の若芽摘みにも当然あてはまるものであろう。ともあれ、その対象によってさまざまな要因はあれ、頻繁で集約的な有用植物の採取活動は、一定期間継続することによってその収量を減少させ、その土地の生産性を回復させるためには、一定の休閒期間が必要であったと考えることができる。したがって、二次植生を積極的に利用し、一時的には高い生産性を上げたにせよ、一定期間用益した土地においては、徐々にその収量を減じる傾向のあったことは認めてよいであろう。つまり、植生の二次的遷移を利用した採取活動においても、必然的に一定の生産性を確保しようとすれば休閒期間を必要とするところから、先に

見た集落の核用益圏（半径約3km圏）の半径的重複状態に認められるような移住によって、一地点での継続居住を回避していたものと考えられる（注13）。したがって、この植生の遷移（二次植生）を積極的に利用して、有用植物の生産性を高める行為も、反復居住を伴う移住の問題として評価するならば、土地の用益期間と休閒期間の循環を意識的に行う、「半栽培」的な生産形態であったとすることも可能であろう（注14）。このように、反復居住にかかわる集落の「非居住期間」を、土地の生産性を回復させるための休閒期間として積極的に捉えるならば、この集団の移住・移動性の問題は、当地域の縄文中期の生態的な居住形態の規定的な一要素として考えることができる。

3. 生態的居住型と集団領域

当地域に認められるような集落用益圏を半径的に重複するような集落の移動の累積は、それぞれの用益圏が分ち難く重複しており、少なくとも異なった集団の交錯とは捉え難いであろう。むしろ、これらの内部が鮮明な領域として分離しえない、領域を同一にとる集団の行動の累積によって形成されたものと考えることができる。これは、「生産を展開する領域自体の集団的占有が分割不可能なものとして基礎にある」（近藤、1985）ためであると考えられる。以上のような、ある一定の領域を共同的に占取することによって示される集団を領域集団と仮称するならば、当地域の縄文中期の領域集団は、どのような構成をとっていたのであろうか。

集落形態の 類型

当該地域においては、それぞれの遺跡の内容に不明な点が多く、限られた発掘資料と遺跡分布図をもとに詳細な検討をすることは難しい。ここでは仮に、次の3形態に分類して考えてみたい。

- ① 一時期の住居数が2～3棟程度の集落
- ② 大規模な環状集落（①に類するものは除く）
- ③ 土器のみを出土する遺跡

これらのうち、①の集落形態をとると推定される遺跡には、橋ノ入遺跡をはじめ下南原遺跡（鈴木敏昭、1982）、栗山遺跡（長滝・鳥羽、1983）、峯遺跡（篠崎、1983）、長沖梅原遺跡（注11）、天田遺跡（注15）等がある。②の集落形態をとるものは、将監塚・古井戸遺跡（石塚、1984）、北塚屋遺跡（小島・黒坂、1985）があげられるほか、新宮高見遺跡（注16）についてもこの形態をとる集落である可能性が高い。③の形態の遺跡は、塚本山遺跡（宮崎、1977）、城の内遺跡（鈴木・西口、1981）、阿知越遺跡（鈴木他、1984）等多くを認めることができる。

この中で、②の環状集落については、仮に多くの住居址数が検出されたにせよ、一時期同時存在の住居数がかなり少ないことが、つとに指摘されている。しかし、小林達雄氏の推定する、例えば三原田遺跡のような300棟を越える住

居跡からなる大規模集落においても、一時期には3棟から数棟の住居の頻繁な建て替えの結果に形成されたものであるという考え方（小林、1986）には、疑問が残ろう。この見解は、どのような操作から導かれたものか明らかにされていないが、氏の「縄文サイズ」とされる通常3棟からなる単位集団は、「単位集団の生活領域が有する潜在的生産力（bio-mass）に相应する部分が大きい」という想定から導かれたものと付度される。ともあれ200棟ときには300棟を越える環状集落は、それが住居の累積した棟数であるにせよ、同様の「継続期間」を有するとされる数10棟ないしは10数棟によって構成される環状集落と同様に扱いるとは考え難い。これらは、同様な環状という形態をとりつつも、円環の規模も異なっており、移住当初からの設営計画の違いを考慮しなければならないであろう。つまり、単に環状であるか否かの形状比較よりも、まずその規模を問題としなければならない。もちろん、3棟程度の住居の累積による「環状集落」も当然存在しているのである（注17）。

土井義夫氏は、集落はその「継続期間」中であっても「しばしば土器型式の欠落が指摘され、空白期の存在が予想される」ことに注目しており（土井、1985）、また、集落は従来より幾つかの単位住居群に分割して捉えられる傾向を有しているが（注18）、この単位住居群の増減や環状集落の複合、あるいは環状集落外に数棟の住居が随伴する例も、しばしば認められている（注19）。このような住居数の増減は、人口の変動も一方では作用したであろうが、居住区域を異にする単位住居群ごとの増減の例を考えると、この単位住居群の移動を想起すべきであろう。これは、①の形態の集落の居住単位が、この単位住居群の規模に対応していることから、ある程度頷けよう。つまり、大規模な環状集落は、①の形態の集落の居住単位複数の集合した形態であり、この集合の形態によって、様々な集落形態を説明することができる。そこで、ここでは便宜的に、①の形態を分散居住形態、②を集合居住形態と呼んでおきたい。そして、先的小林氏の指摘する集落規模と潜在的資源量との関わりについては、集合居住形態をとる将監塚一古井戸遺跡等では神流川扇状地扇央部の遺跡分布の稀薄な本庄台地中央部を、また北塚屋遺跡については荒川扇状地扇央部の櫛引台地をその後背地に有していることも見のがしてはならないであろう。ともあれ、該期ではこの分散居住する居住単位の離合集散する姿を前提として集団と土地との関係を考えていかねばならないと思われる（注20）。

この分散居住する居住単位は、林謙作氏も指摘するように、日常的な再生産を行いうる経営の最小単位として捉えることができ（注21）、この2～3棟程度の単位を小林氏にならって、以下暫定的に単位集団と呼称しておきたい。したがって、大規模集落とはこの相対的に自立的な単位集団の集合居住した形態と考えることができる。これらの各単位集団は、移動前の旧集落とその用益地に

領域集団の 構成

ついでに有用な資源と植生遷移の状態等に関する知識をもっていたと思われる、一定の継続利用にかかわる用益権を保有していたことが推定される。しかし、分散居住は、単位集団の個別的蓄積には直接つながらず、むしろ各単位集団のさらされている、堅果類の隔年結果や寒波による減収等からくる飢餓を回避するための居住形態であったと考えられる。更に先に見たような、集落間の石器組成の均質性・平均性は、それが労働用具のすべてではないにせよ、集落間での生産物の内容に顕著な差の生じないことを示し、そこで認められる差異は、一定の組成の範囲内での増減として用益地の生態系の差異における適応に起因するものと思われる。このことは、各集落毎の特定生産物への偏重の傾向は認められず、集落間の分業が発達する基盤に乏しいことを示している(注22)。ともあれ、日常的な生産と消費の最小単位たりえる居住単位としての単位集団は、集合居住に際して他の単位集団と同一あるいは近接する用益地を占有せざるを得ないため、単位集団間に個別的利害を生ずる可能性を潜在させているにせよ(注23)、先に見たように、むしろ食料資源の収量や分布密度に適合した集団規模の調節のための形態としての側面が強かったと考えられる。

以上のような、離合集散と移動にかかわる集団領域は、先に見たように単位集団の集合居住形態としての大規模環状集落の円環外にも、付加的な居住区域の認められる例の多いことから、環状集落に認められるような集団が直接的にこれらの領域を占取するのではなく、より上位の社会的な関係のうちに属していたものと推定される。また例えば、石材の確保についてみても、大半の石材は集落用益圏内で採取されるが、安山岩や流紋岩等は利根川流域に求めねばならず、少なくとも採取地点の用益権ないしは彼地の集団との交易関係が想起されねばならないであろう。このように、石材の確保においてもより広汎な社会的関係が前提となっていることが理解されるのである。つまり、単位集団は、食料資源の豊富な地点への移住・追移住によって単位集団の飢餓的状況や個別的蓄積を回避しつつ、日常的な用益圏の荒廃による移住先の用益権の確保、あるいは対象動物の追跡圏を含む狩猟域や石材の確保にいたるまで、共同的利害の一致によって裏づけられた領域集団に包摂されている姿を想起することができる。そしてこの領域集団は、単位集団の結集した形態である集合居住形態をとる集団複数を擁した規模であったと考えられる。また、彼らの移動性と離合集散性は、一方では、単位間の動産の蓄積の偏りを平均化しつつ、単位集団間の利害を制禦する機構であるといえる。つまり、大地の人口許容量と集団規模の均衡で、集合居住あるいは分散居住の形態をとりつつ、植生の遷移を意識化しながら、各種の占地形態に適応していたと考えられることができる。したがって、林謙作氏の考えるような「小規模な集団が居住単位」として存在していることをもって「経営の単位としての世帯の自立」を推定し、ここでいう集合居住形

態に相当する集落に示される集団を「世帯共同体」として捉える考え方（林、1979）は、従来の歴史的範疇としては必ずしも妥当するものではなく、単位集団の分散居住に認められる自立性は、むしろ優れて原始性を帯びた生存の為の集団規模と社会的関係の調整という側面の強いものと捉えることができる（注24）。

生態的居住型 以上から、該期に認められるような単位集団の移動性、あるいはその離合集散性は、土地の占取・用益という経済的利害を媒介として成立する、領域集団の生態系への適応形態であるといえよう。つまりこの離合集散性は、領域集団の社会的関係と生態系との均衡を調整し、先に見た植生の遷移への適応を意識化した、用益・休閒の周期としての移動性と、有機的系統的に連繫しながら、ひとつの「生態的居住型」とも呼ぶべき機構を形成していると考えることができよう。

中期末の様相 このような居住型にかかる集落の存在形態は、中期末葉になるとそれまで比較的一般的な形態であった集合居住形態をとる集落が激減し、遺跡数を減じながら分散居住する傾向が認められるようになる（注25）。これは、土地の用益・休閒に関わる移住の周期が、加曽利E式前半期を中心とする遺跡数の増加に伴って、生態系の再生期間をこえて短縮された結果に惹き起こされた土地の荒廃が従来より指摘されている気候の冷涼化にと重なり、本地域の生態系に大きな打撃を与えたことによるものと推定される。この当地域でのあり方は、中期末葉の気候の冷涼化によって人口が減少したとする環境決定論的な把握に対して、むしろ人間生態系（注26）の変化、つまりより歴史的な過程として捉え返すべきことであることを示している。ともあれ、縄文中期における集団領域内は、集落用益圏が分割不可能な状態にまで累積的に重複することに認められる、大地を覆いつくすほどの積極的な利用が認められるのである。

後期の用益圏 これに対して、縄文後期では、集落は河川に面した河岸段丘上や台地上に占

第23表
遺跡の占地
と遺跡群（後期）

水 系	遺跡群の占地	代表的な遺跡	備 考
荒 川 水 系	秩 父 盆 地	駒形、大背戸	（田部井、1978）
	江 南 台 地 周 辺	橋屋（荒川北岸） 東（荒川南岸）	（埼玉県、1980） （梅 沢、1978）
小山川 水 系	櫛引台地（扇端部）	古川端、村後（小山川水系） 出口、桜ヶ丘（唐沢川水系）	（鈴木他、1978）他 （笹森他、1977）他
神流川 水 系	上武山地内段丘	讀原、保美濃山	（塚 越、1976）
鮎川・温井川 水 系	藤 岡 台 地	谷地（温井川水系） 薬師原（鮎川水系）	（前原他、1982） （古 郡、1985）



凡 例

- 住居検出遺跡
(遺物散布地を含む)

- 住居の無い遺跡

※円圏は半径3km

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 寺山 (注 27) | 11. 光徳寺裏 (古郡 1985) |
| 2. 倉林東 (注 9) | 12. 薬師原 (古郡 1985) |
| 3. 阿知越 (鈴木也 1983) | 13. 譲原 (塚越 1976) |
| 4. 村後 (細田也 1984) | 14. 保美濃山 (塚越 1976) |
| 5. 古川端 (柿沼也 1978) | 15. 駒形 (田部井 1978) |
| 6. 七色塚 (注 29) | 16. 出口 (笹森也 1977) |
| 7. 雌濠 (注 28) | 17. 島の上 (笹森也 1977) |
| 8. 天神林 (金子 1983) | 18. 桜ヶ丘 (埼玉県 1980) |
| 9. 若宮台 (大和 1983) | 19. 橋屋 (埼玉県 1980) |
| 10. 谷地 (前原也 1982) | 20. 東 (梅沢 1978) |

第77図 橋ノ入遺跡周辺の遺跡分布と距離(縄文後期)

地する傾向が認められ、中期で想定された半径3kmの集落の核用益圏を仮設すると、河川流域に連鎖的に重複する幾つかの領域の存在を認めることができる(第77図)。そして、これらの流域間では、円圏の連鎖によって示された領域の重複はなく、各々が河川あるいは扇状地扇端部に沿った独立した領域を有していることがわかる(第23表)。このことは、河川流域を中心とした区域を、各々の用益地の中核に取り込んだ姿であることを想起させ、石器組成中の石錘の出現に認められるような漁撈活動に一定の依存度を高めたと推定されることと吻合している。更に、石器組成の中期との比較によると、短冊形の打製石斧が減少し、これにかわって石皿・磨石・凹石あるいは石鎌が増加する傾向を示しており(第78図)、打製石斧の減少に認められる生業活動の退潮を完補する形態で、漁撈・狩猟活動の活発化と堅果類への依存へと生業の重点が傾斜している様子が窺える。ともあれ、以上のことから、中期の台地・丘陵中心の居住形態とは異なり、河川に一定の依存を強め、各集落が河川を中核とする用益地を占有していた状況であったことが想起される。そして、このように同一の河川を中心とした土地とその生態系に依存度を高めたと推定されることから、各集落を構成する集団間に、この流域の用益権をめぐる、共通の利害の基盤が存在していたと考えることができる。したがって、河川流域の用益権は、この集落の核用益圏の重複に認められるような集団全体によって確保・保障され、流域の占取主体は、この“流域集団”とも呼ぶべき、河川流域の用益権の共同性を媒介とする領域集団へと変貌していたことが想起されるのである。

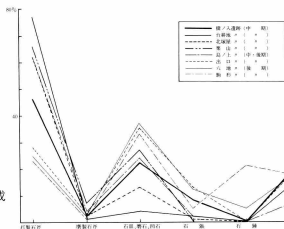
露营地の推定

また、後期の遺跡には、集落址以外でも例えば村後遺跡(細田, 1984)、天神林遺跡(金子, 1983)、寺山遺跡(注27)、鍾濠遺跡(注28)、七色塚遺跡(注29)等のように、しばしば土器の完形品や大破片を出土する遺跡が認められることにも注目すべきであろう。少なくとも、集落の核用益圏内での行動にこれらの土器を携行して調理等を行っていたとは考え難く、かつある程度の一般性を有する遺跡の存在形態であると考えられることから偶発的な所産であるとする

ことも難しいであろう。したがって、むしろ痕跡こそ稀薄であるとはいえ、そこに土器を搬入し、調理等の活動を行っていたと推定するならば、先の各流域集団の季節的あるいは一時的な露营地として構造的に把握すべきであると考えられることができよう。

以上のように、縄文後期の

第78図
石器組成
の比較



生態的居住型 の問題

遺跡の存在形態は、先に想定した中期における生態的居住型とは、かなり様相を異にしたものであり、中期とは異なった生態的居住型を想起させるものである。しかしながら、当地域では後期の生態系や居住形態を具体的に特定しえる資料に乏しく、ここではあくまで暫定的に中期の生態的居住型を差別的に鮮明化することに留めておきたい。

ともあれ、当地域の縄文中期において認められた“生態的居住型”は、あくまで「中期」という期間内での行動の累積から導かれたものであり、「前期」を含めた他の時期との差異性についても検討しなければならないものであろう。また、加曽利EⅡ式期を頂点とする集居居住の傾向や、中期終末期に認められる分散居住の傾向が、先に見たようにある程度一般的な傾向であると考えられることから、ここで推定した居住型の内側にも、明瞭な居住形態上の推移を認めることができる。したがって、ここで示した生態的居住型も、あくまで暫定的なものとして、今後更に検討を加え、その内容を鍛えていかなければならないと考えている。

ま と め

本章では、縄文中期という長期間にわたる集団の行動の累積と各集落の存在形態に視点を据え、集落と生態系の関わりから、当地域における縄文中期の集落と土地との関係を捉えようと試みた。ここで扱った論旨を要約すると、次のとおりである。

- ① 縄文中期の集落址は、その分布に疎密が認められるものの、各々が約3kmの距離を保って存在する傾向が認められ、また近接して分布する集落址においても、その群間の距離は主旨3kmを測る傾向のあることが指摘できる。この集落址間の半径約3kmで示される範囲は、集落の再生産に要する潜在的資源量に適合する規模であると推定されることから、これらは集落の中核的な用益圏に相当するものとして捉えることができる。
- ② 集落用益圏の相互に重複する姿は、従来想定される生業活動の範囲内での隣接する集落址の同時併存の困難さを示しており、住居址の重複や埋没状態に認められる非居住期間を考えると、反復居住を含む集落の比較的頻繁な移動の結果と見做すことができる。つまり、現在我々の見るところの遺跡の分布状態は、集落の移動の距離あるいは回数が大地に刻印されたものと考えられる。
- ③ 当地域では、橋ノ入遺跡の花粉構成や周辺遺跡の斜面部の二次堆積土層の形成に認められるように、集落形成期の集落の周辺には、二次林や草草が広がっており、これらの二次植生を積極的に利用していたものと推定される。したがって、一集落の反復居住する姿は、二次植生に適応し植生の遷移を意識化した、〈用益—休閒〉の周期としての移住の結果生じたもの

と考えられる。つまり集落の非居住期間は、この土地の休閑期間として捉えることができる。

- ④ 各集落は、2～3棟を単位とする居住単位によって構成されており、この相対的に独立している居住単位を単位集団として捉えることができる。この各単位集団は、離合集散性を有し、大規模集落はその集合居住形態、小規模集落は分散居住形態と考えることができる。各単位集団は、分散居住に認められるような経営の最小単位としての相対的な自立性を保有しながらも、集合居住形態に認められるような集団や、集落用益地の重複に認められるような土地の占取等にかかる共同的利害の一致する領域集団に包摂された存在であった。
- ⑤ 単位集団の自立性は、優れて原始性を帯びた生存の為の集団規模と社会的関係の調整という側面の強いものであり、したがって単位集団の移動性と離合集散性は、土地の占取・用益という経済的利害を媒介として成立する領域集団の、生態系への適応形態であった。これらは社会的な関係と生態系との均衡を調整しつつ、二次植生の遷移を意識的に適用する移住の周期と系統的に結びつきながら、生態的居住型ともいうべき機構を形成していると考えられる。
- ⑥ 縄文後期では、集落の用益地の中核に、河川および河川流域の低地を採り込みつつ、これらの土地に依存度を高めていたと考えられる。この各々の河川流域を中心とした用益権は、同一河川流域の集落用益圏の連鎖的重複に認められるような集団の全体によって、確保・保障されていたと推定される。また、各流域間においては、それぞれの集落用益圏相互の重複は認められず、これらが流域相互の土地の排他的占取の傾向の現われと推定しうることから、この各流域の用益権の共同性を媒介とする、流域集団とも呼ぶべき領域集団が形成されていたと考えることができる。

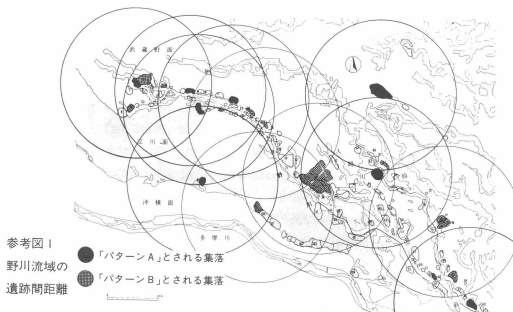
以上、随所に実証的な手続きの不備を残しているとはいえ、もとより本稿は暫定的な素描であり、本地域の検討すべき大規模集落の報告を待って再考すべきであることは論をまたない。また、橋ノ入遺跡の出土土器に認められる、異系統土器との接触や遠隔地からの搬入は、先の領域集団の構造が、必ずしも閉鎖的な循環ではなく、一方では開放的な端を有しているような柔軟な構造を有していたことを想起させるものであろう。つまり、土器の型式論的階層での諸現象も、具体的な集団の動態を通してたちあらわれるのであるから、先の集団領域もまた土器群の検討によって完補されねばならない事柄であることを意味している。我々は、再び、該期の土器研究の隘路へと分け入ってこれらの関係の分析を志向しなければならないのであろう。

(鈴木徳雄)

注

- (1) 遺跡の固有性を示すことは、集落研究や地域研究に必要な方向であると同時に、遺跡が代替不可能な歴史性を有していることの確認であり、埋蔵文化財の保護の理念にも関わる問題として、すぐれて実践的な要請からくる課題でもあろう。
- (2) 特に小林達雄氏は、従来より提起していたセトルメントパターンの解釈として、積極的な民族誌の適用によって動態的な集落像を描く試みをしている（小林、1986）。小林氏の推定には、学ぶべき点が多いとはいえ、すでに大林太良氏も指摘するように（大林、1971）民族誌の適用にも一定の方法的前提が必要であらう。したがって、多くの民族誌を縄文集団に重ねるのはあながち不当とは思われないが、縄文期自体の分析と一定の論理性を、我々は踏み越えるべきではあるまい。
- (3) 水野正好氏は、「空閑の地とされ、閑却視されている空間」であり、「空閑に見えながら最もはげしい用益の対象であった地」の分析によって、縄文人の姿相を具体的に復元することを提唱している（水野、1980）。
- (4) 例えば、堀越正行氏は、下総台地の都川流域周辺地域の貝塚を中心とする遺跡の分布を検討し、「ほとんどが約2kmの等距離を示し、1km以上3km以内、平均約2km前後の間隔を維持して各独立した集落が営まれたもの」と捉えている（堀越、1972）。

また、比較的調査の進んでいる東京都野川流域の大・中規模の集落間の距離を検討してみると、大旨3kmを測ることに注意しておきたい。（山崎他、1985）に加筆した参考図を掲げておく。



- (5) 日本考古学協会1984年大会の発表要旨でも注意されているように、「領域」には広狭ふたつの範囲を示す概念上の混乱が認められるようである。ここでは、土地の占取や各種用益権等に関わる集団領域と、日常的な集落の再生産に関わる集落用益圏とを暫定的に区別して用いておきたい。これについては後述する。
- (6) 例えば、橋ノ入集落の場合、遺跡の西側に接して小山川流域から神流川流域を結ぶ最も交通の容易な地点（現・杉の峠）があり、また遺跡が尾根の鞍部に占地するところから尾根筋への交通も容易である。このような、交通の容易な地点への集落の占地傾向は、他集落でも認めることができることから、当地域の縄文集落の一般的傾向であると考えてよいであろう。集落は、このような経路を通して用益地や他の集落と結びつき、生産物の搬入、あるいは訪問や交易等を行っていたと思われる。
- (7) 将監塚—古井戸遺跡については、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査員各位の御教示を得た。とくに石塚和則氏には、有益かつ懇切な御教示を得た。記して感謝したい。
- (8) ちなみに、平安期に営まれた橋ノ入5号住カマド内から出土した炭化材は、ツツジ科の一種であり、これが現在の二次林を構成する低木の優先種であることから、本集落周辺の潜在的二次植生のあり方を示唆するものと考えられる。
- (9) 1984年に児玉町教育委員会で調査したもので、加曽利EⅡ～EⅣ式土器が出土している。
- (10) 1982年に児玉町教育委員会で調査したもので、加曽利EⅡ式土器が出土している。尚、遺跡は、倉林東遺跡に隣接している。
- (11) 1984年に児玉町教育委員会で調査したもので、加曽利EⅢ式の住居址1軒と、加曽利EⅡ～EⅢ式の包含層が検出されている。
- (12) 鈴木忠司氏は、桑飼下遺跡の周辺に二次林が発達していることに注目し、この二次植生にかかる有用植物に根茎類が含まれていることから、「打製石斧は根茎類を主とした植物性食料の採集具としての意義がもっとも重視された」（鈴木、1975）としている。
- (13) この点について石井寛氏は、「破壊をうけた一定の生活領域を自然の状態に戻す行動としての移住期間を想定」（石井、1977）しており、当時としては注目すべき卓見であったとすることができる。
- また、移住の直接の契機については、もちろん寒波による落葉性の堅果類の減収（小山、1984）や、隔年結果による減収による場合も想起されねばならないであろう。
- (14) 福井勝義氏は、「植生の遷移の人為的循環に焼畑の本質を見いだし」、

したがって「焼畑の原初形態とは、じつは植生の遷移を利用して対象とする有用植物の生産性を高める」形態であると推定している。そして、栽培植物の栽培に限定しなくても、「この半栽培とも呼べる状態は、たんなる採集とは異なっている」ことを指摘し、これらを「遷移畑(succession field)」という形で概念化している(福井、1983)。注目すべきであろう。

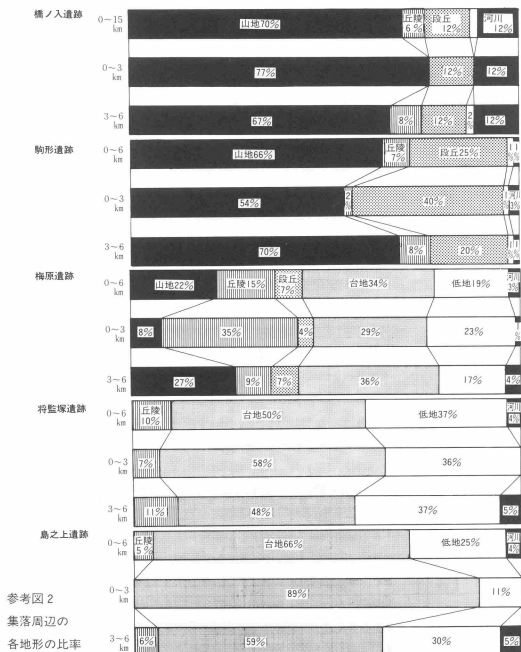
- (15) 1985年に児玉町教育委員会で調査したもので、加曽利E期の住居址8軒が検出されている。
- (16) 1985年に児玉町教育委員会で調査したもので、小規模な調査にもかかわらず加曽利E期の住居址12軒と勝坂～加曽利E期の土壇22基が検出されている。
- (17) 例えば将監塚―古井戸遺跡は、ふたつの環状集落の併存として捉えられているが(梅沢・宮崎、1984)、仮に将監塚集落だけをみても、集落外周の直径は約200mを測り、未調査区を残すとはいえ約120軒の住居址が検出されている。また古井戸集落でも集落外周の直径約180mで約170軒の住居址を擁し、集落外周の推定直径約150mで25軒の住居址が検出された台耕地集落(鈴木敏昭、1983)とは同列に扱うことは難しい。ちなみに埼玉県内でも、台地上を広範囲に調査し集落の規模・形態が比較的中々明瞭なものの中に、伊奈町大山遺跡(谷井、1979)のように集落外周の直径が約180mを測るとはいえ検出された住居址は14軒という小規模な集落が存在していることは注目してよい。また、所沢市高峰遺跡(並木、1984)では、集落外径約160mで勝坂～加曽利EⅡ式の住居址46軒が検出されている。これらは各々の継続期間に違いがあり単純に比較することはつづまなければならないが、少なくとも同じ環状を呈すとはいえかなりの変異があることが理解されよう。
- (18) これについては、(水野、1969)の他、(菅原、1972)、(丹羽、1978)、(長崎、1977)等多くの論考、分析がある。
- (19) 例えば先に見た将監塚―古井戸遺跡は、報告書が未刊であり各住居址の時期等が不明であるとはいえ、大規模な環状集落の例とされている(梅沢・宮崎、1984)。この集落は、これらの環状集落間に更に小規模な住居址群も存在していることにも注目しておきたい。

また、少し視野を広げてみると、環状集落がふたつ連接する坂東山A遺跡のように「双環状集落」と捉えられている例(梅沢・宮崎、1984)や、横浜市三の丸遺跡のような環状集落複数が複合する「複合集落」とされる例(今井・伊藤、1985)がある。特に三の丸遺跡では、時期によりひとつの住居区域の住居群が欠落する様相が報告されており注目される。なお、環状集落外に小規模な住居群が付随することについては、石井寛氏の御教

示を得た。

- (20) 下末吉台地（特に港北ニュータウン区域内）では、「短時間で小規模の構成からなる集落址は、集団の一部が拠点居住地を離れたもの」とであるという推定がされている（石井、1977）。また、北上川中流域ではその時間的変遷について、中期末の集落に「拡散化現象」が認められるとされている（佐々木、1983）。
- (21) 経営の最小単位について林謙作氏は、「縄文期には一貫して小規模の集団が居住単位となっている」ことを捉え「経営の単位としての世帯の自立性の反映と考え」ている（林、1979）。なお、世帯の自立等については後述する。
- (22) したがって、彼らの分業は、集落内での自然生的あるいは個別的分業形態が主体であったことを示唆し、協業についても同一の労働過程内で単純に人数を増加させる単純協業が想起される。つまり、各単位集団は相対的に自立しながらも、協業に対しても適応力が高いと考えられ、このことが離合集散を可能にするひとつの前提であったものと思われる。
- (23) これは、集落内において住居址の重複する区域がみられる一方、住居の認められない区域が存在することなどからも推定される。また例えば、横浜市三の丸遺跡（今井・伊藤、1985）においては、集落内に4群の墓域が形成されていることが報告されており、集落の内部に独自の用地を保有している様子が窺える。
- (24) 金井塚良一氏は、考古学研究会の質疑（林、1979）で、林氏の「世帯共同体」に対して、従来の立場の理論的要請から批判されている。
- (25) 石井寛氏は、横浜市港北ニュータウン区域内の遺跡群を検討し、「中期末加曽利EⅢ式中頃以降、所謂規模の大きな集落址が急減し、1～3軒程度の構成からなる集落が一般的となってくる」とし、更に「占地点も従来の集落形成地区に固執せず、それまで集落の形成されることのなかった地区にまで小規模集落址が多く発見される」ようになったことを指摘している（石井、1984）。また、佐々木彰氏は、北上川中流域における遺跡を検討し、中期後葉での小規模な遺物散布地の拡散的分布という現象を捉えている（佐々木、1983）。本地域で認められる傾向も、ある程度一般性を有するものと考えておきたい。
- (26) 渡辺仁氏は、「生態系 ecosystem とはひとつの地域の中の生物の総体と、それをめぐる環境の総体との間に存在する諸関係の体系である」とし、「人間生態系 human ecosystem」については、「一地域の中の人間（人びと）とそれを取りまく環境との諸関係の体系」と定義している（渡辺、1977）。また、渡辺氏のアイヌの生態系に関する研究からは多くの示唆をえた。

- (27) 寺山遺跡（児玉町大字河内所在）では、同一個体と思われる加曾利B 1 式の深鉢の破片が採集されている。
- (28) 本庄市教育委員会で調査されたもので、加曾利B 2 式の深鉢の半完形品一個体が出土している。調査を担当された長谷川勇氏の御教示に感謝する。
- (29) 本庄市No.71遺跡に相当し、同市教育委員会で調査されたものである。加曾利B 1 式の鉢の大破片と碗の破片が出土している。調査を担当された増田一裕氏の御教示に感謝する。



引用・参考文献

- 赤沢 威 (1983) 『採集狩猟民の考古学—その生態学的アプローチ—』海鳴社
- 赤沢 威 (1984) 『日本の自然と縄文文化の地方差』『人類学—その多様な発展』日本人類学会編
- 麻生 優 (1969) 『『原位置』論序説』『上代文化』38輯
- 麻生 優 (1975) 『『原位置』論の現代的意義』『物質文化』24号
- 石井 寛 (1977) 『縄文社会における集団移動と地域組織』『調査研究集録』第2冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 (1984) 『堀之内2式土器の研究(予察)』『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石塚和則 (1984) 『児玉工業団地内(将監塚・古井戸)遺跡の調査』『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 市川 修 (1982) 『上南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
- 市川 修 (1983) 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
- 今井康博・伊藤 郭 (1985) 『三の丸遺跡調査概報』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告VI
- 梅沢太久夫 (1973) 『大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告』『埼玉考古』第11号
- 梅沢太久夫・宮崎朝雄 (1984) 『埼玉県における縄文集落の変遷』『日本考古学協会昭和59年度大会大会資料』
- 大林太良 (1971) 『縄文時代の社会組織』『季刊人類学』2—2
- 小田静夫 (1977) 『縄文中期の打製石斧』『どるめん』10
- 柿沼幹夫 (1978) 『埼玉県北部における縄文遺跡の立地について』『埼玉考古』第18号
- 金子直行他 (1983) 『天神林・高野谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第22集
- 桐生直彦他 (1983) 『古墳・奈良・平安時代』『東寺方遺跡』多摩市埋蔵文化財調査報告4
- 桐生直彦 (1984) 『カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について(素描)』『神奈川考古』第19巻
- 恋河内昭彦 (1984) 『児玉町長沖古墳群の第7次調査』『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 小島糸子・黒坂楨二 (1985) 『北塚屋(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 小林達雄 (1974) 『縄文世界における土器の廃棄について』『国史学』第93号
- 小林達雄 (1987) 『原始集落』『岩波講座日本考古学』4集落と祭祀
- 子持村教育委員会 (1986) 『黒井峯のむら』現地説明会資料
- 小山修三 (1984) 『縄文時代—コンピューター考古学による復元』中公新書
- 近藤義郎 (1985) 『縄文時代の生産と呪術』『日本考古学研究序説』岩波書店
- 斉藤基生 (1983) 『打製石斧研究の現状』『信濃』35—4

- 佐々木彰 (1983) 「遺跡にみる拡散化現象について」『法政考古学』第8集
- 笹森健一 (1976) 「遺物の出土状態について」『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第31集
- 笹森健一他 (1977) 『前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡調査報告書第12集
- 篠崎潔・鳥羽政之 (1983) 「峯遺跡の発掘調査」『東京電力美里線埋蔵文化財調査報告』美里村遺跡発掘調査報告書第1集
- 菅原正明 (1972) 「縄文時代の集落」『考古学研究』19—2
- 鈴木敏昭他 (1978) 『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡調査報告書第16集
- 鈴木敏昭他 (1982) 『下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集
- 鈴木敏昭他 (1983) 『台耕地Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
- 鈴木忠司 (1975) 「打製石斧」『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 鈴木徳雄他 (1981) 「深町・城の内遺跡」深町遺跡調査会
- 鈴木徳雄他 (1984) 『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第4集
- 高木義和他 (1982) 『東国寺東・平倉遺跡』寄居町教育委員会
- 高木義和他 (1982) 『南大塚遺跡』寄居町教育委員会
- 田野倉武男 (1982) 『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』藤岡市教育委員会
- 田部井功 (1978) 『秩父・駒形遺跡78発掘調査報告書』駒形遺跡発掘調査会
- 谷井 彪 (1979) 『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集
- 千野裕道 (1983) 「縄文時代のクリと集落周辺植生」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅱ
- 塚田良道 (1985) 「石器群の原位置性・一括性に関するノート」『旧石器考古学』30号
- 都出比呂志 (1975) 「竪穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』86
- 土井義夫 (1985) 「縄文時代集落論の原則的問題」『東京考古』3
- 長崎元広 (1977) 「中部地方の縄文時代集落」『考古学研究』23—4
- 長滝蔵康・鳥羽政之 (1983) 「栗山遺跡の発掘調査」『東京電力美里線埋蔵文化財調査報告』美里村遺跡発掘調査報告書第1集
- 並木 隆 (1978) 『甘粕原・ゴシン・露梨子』埼玉県遺跡調査会報告書第35集
- 西田正規 (1980) 「縄文時代の食料資源と生業活動」『季刊人類学』11—3
- 西田正規 (1981) 「縄文時代の人間—植物関係」『国立民族学博物館研究報告』6—2
- 丹羽佑一 (1978) 「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」『史林』61—2
- 橋口尚武 (1983) 「植物利用—調理」『縄文文化の研究』2・生業
- 林 謙作 (1983) 「層序区分」『物質文化』21
- 林 謙作 (1979) 「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』26—3
- 福井勝義 (1983) 「焼畑農耕の普遍性と進化—民俗生態学的視点から—」『山民と海人』日本民俗文化大系5
- 古郡正志 (1985) 『F9薬師原遺跡』藤岡市教育委員会

- 細田 勝 (1984) 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
- 堀越正行 (1972) 「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31
- 前原 豊 (1978) 『F 1 竹沼遺跡』藤岡市教育委員会
- 水野正好 (1969) 「縄文時代集落復元への基礎的操作」『古代文化』21- 3・4
- 水野正好 (1980) 「縄文時代集落の領域構造をめぐって」『広域遺跡保存対策調査研究報告』3文化庁
- 宮崎朝雄他 (1977) 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 茂木由行他 (1984) 『黒熊遺跡群発掘調査報告書』吉井町教育委員会
- 山崎和己他 (1985) 「縄文時代集落の研究—野川流域の中期を中心として—」『東京考古』3
- 大和 修他 (1983) 「若宮台」埼玉県埋蔵文化財調査団報告書第28集
- 寄 居 町 (1984) 『寄居町史』地形地質・原始編 寄居町
- 渡辺 仁 (1977) 「アイヌの生態系」『人類学講座』12・生態

写真図版・一覧表の対応表(石器)

写真図版	一 覧 表	写真図版	一 覧 表	写真図版	一 覧 表	写真図版	一 覧 表
図版22	1 第7表	59	図版24	5 第7表	58	図版27	3 第8表
	2	54		6	63		4 7
	3	31		7	35		5 9
	4	78		8	5		6 18
	5	43		9 第7表	85		7 10
	6	101		10 第7表	105		8 第8表
	7	20		11	18		9 4
	8	64		12	40		10 第8表
	9 第7表	03		13	53		11 2
	10	70		14 第7表	1		12 3
	11	69		15	94		13 第19表
	12	50		16	102		14 7
	13	10		17 第7表	14		15 18
	14	74		1 第7表	80		16 28
	15	71		2	82		17 第19表
	16	62		3	48		18 24
図版23	1 第7表	75	図版25	4	46	図版28	19 17
	2	25		5 第18表	2		1 第11表
	3	2		6	4		2 15
	4	4		7	1		3 9
	5	17		8	3		4 17
	6	3		9 第13表	18		5 8
	7	72		10	14		6 4
	8	8		11 第16表	2		7 2
	9 第7表	51		1 第13表	17		8 7
	10	100		2	31		9 11
	11	28		3	13		10 13
	12	90		4	5		11 16
	13	55		5	2		12 3
	14	52		6	16		13 第12表
	15	96		7 第17表	11		14 11
	16	107		8	12		15 5
図版24	1 第7表	38	図版26	9	2	図版29	1 第15表
	2	6		10	1		2 15
	3	11		1 第8表	14		3 5
	4	89		2	11		4 13
図版25	1 第7表	59	図版27	5 第7表	58	図版30	1 第19表
	2	54		6	63		2 4
	3	31		7	35		3 5
	4	78		8	5		4 13
	5	43		9 第7表	85		5 19
	6	101		10 第7表	105		6 4
	7	20		11	18		7 26
	8	64		12	40		8 21
	9 第7表	03		13	53		9 10
	10	70		14 第7表	1		10 27
	11	69		15	94		11 9
	12	50		16	102		12 6
	13	10		17 第7表	14		13 5
	14	74		1 第7表	80		14 9
	15	71		2	82		15 10
	16	62		3	48		16 4

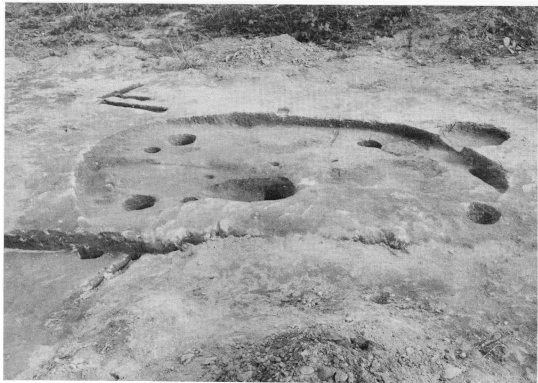
橋ノ入遺跡発掘調査組織（整理）

団 長	根岸幸平	（児玉町長）
副団長	石井栄一	（児玉町教育委員会教育長）
事務局	中林 重	（ " 社会教育課長補佐）
	岩上高男	（ " 社会教育係長）
	金子幸弘	（ " " 主事）
担当者	鈴木徳雄	（ " " 主事）
	恋河内昭彦	（ " " 主事）

整理参加者（ただし例言掲載以外の者）

石井美穂、石森英子、市川淳子、江口誠一
尾崎美砂、笠原信男、加納 実、神沢育生
清水直樹、鈴木善浩、千装 智、富崎豊和
藤原裕也、本間桂吉、前田明子、宮内秀明
横山 泉、吉田 茂

図 版



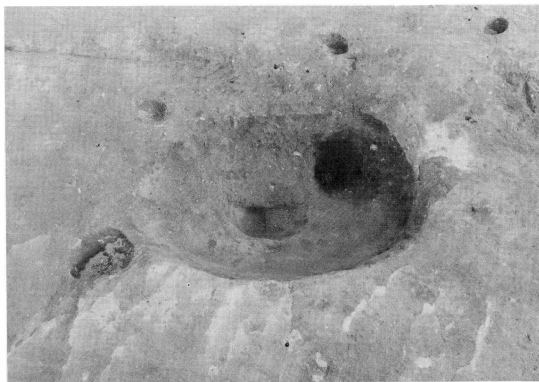
1. 第1号住居址



2. 第1号住居址炉址



1. 第1号住居址炉址上面礫出土状态



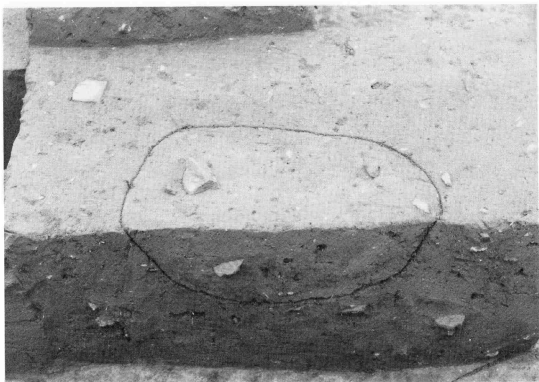
2. 第1号住居址炉址全掘状态



1. 第2号a.b住居址



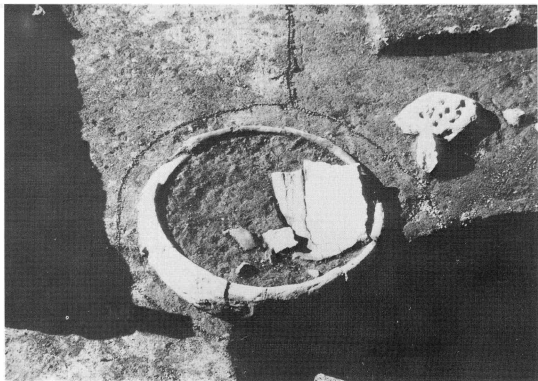
2. 第2号住居址炉址



1. 第2号住居址覆土内土坑a断面



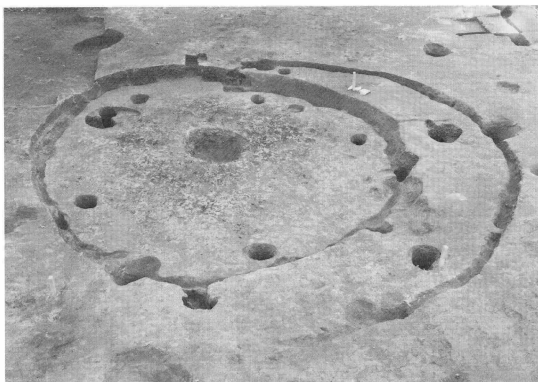
2. 第2号住居址覆土内土坑b断面



1. 第3号住居址炉址



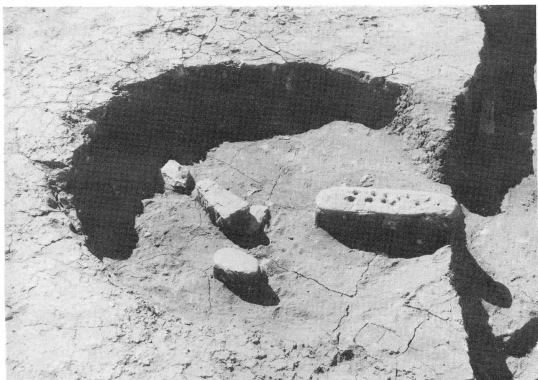
2. 第3号住居址炉址



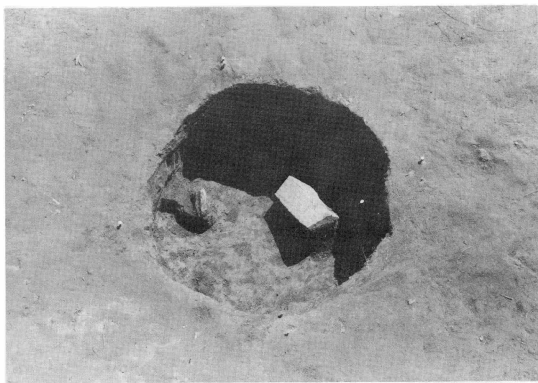
1. 第4号a、b住居址



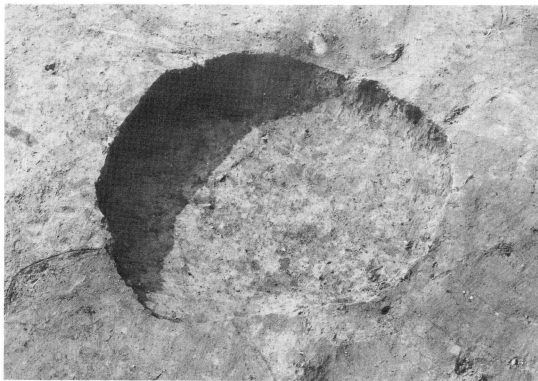
2. 第4号住居址磔・遺物出土状態



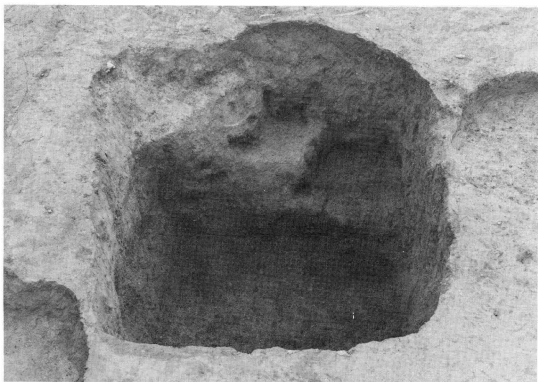
1. 第1号土坑 (SK-1)



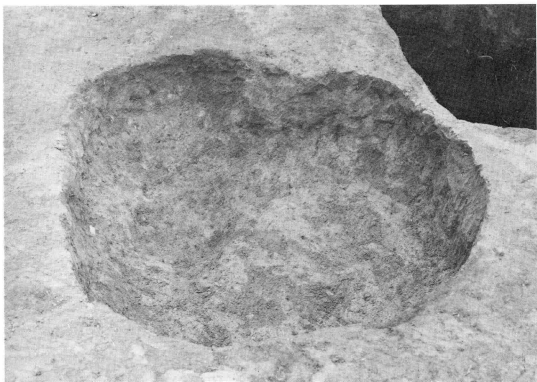
2. 第2号土坑 (SK-2)



1. 第3号土坑 (SK-3)



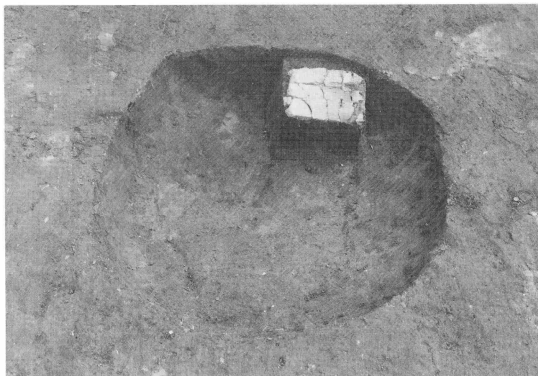
2. 第4号土坑 (SK-4)



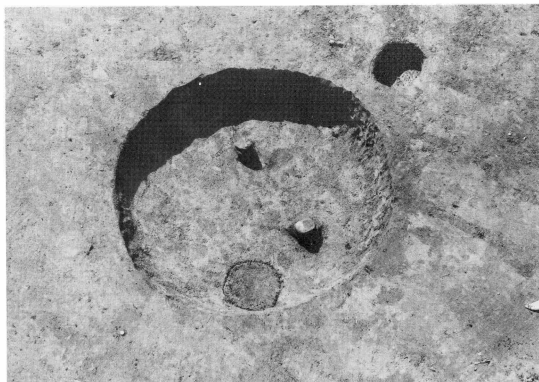
1. 第6号土坑 (SK-6)



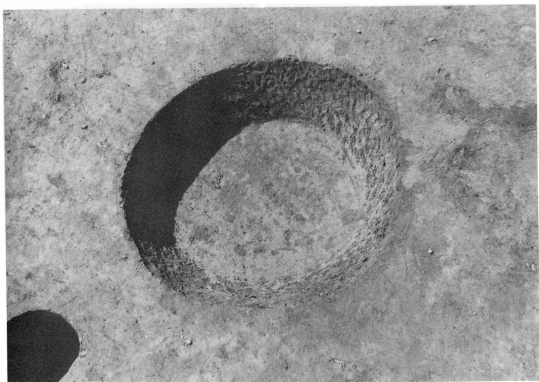
2. 第7号土坑 (SK-7)



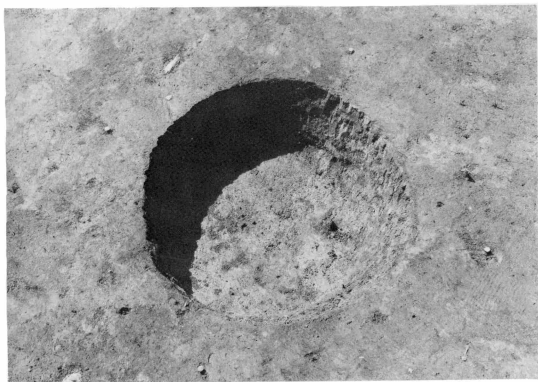
1. 第8号土坑 (SK-8)



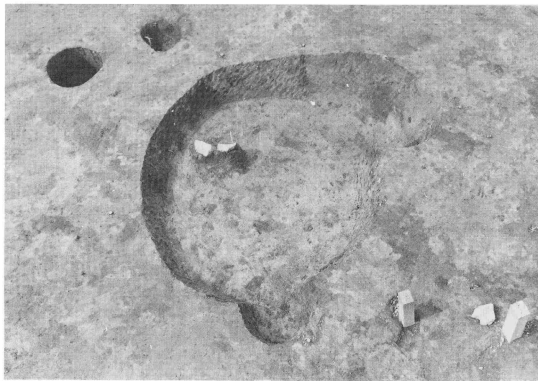
2. 第9号土坑 (SK-9)



1. 第11号土坑 (SK-11)



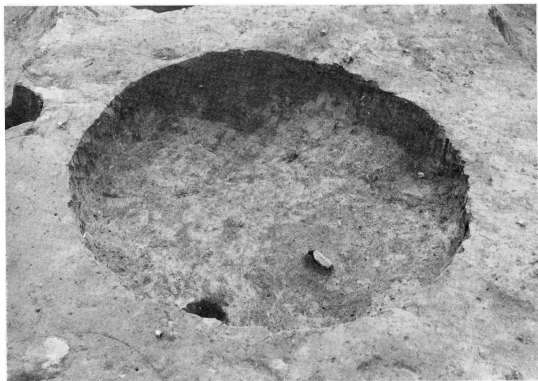
2. 第12号土坑 (SK-12)



1. 第13号土坑 (SK-13)



2. 第14号土坑 (SK-14)



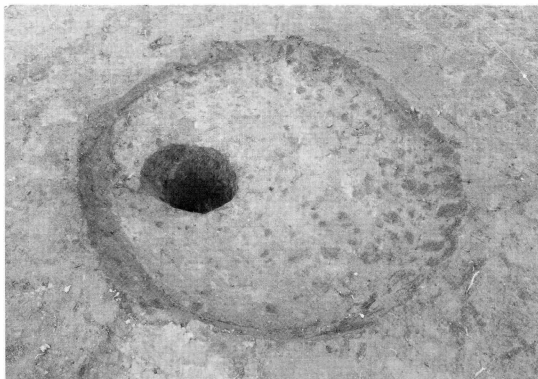
1. 第15号土坑 (SK-15)



2. 第21号土坑 (SK-21)



1. 第23号土坑 (SK-23)



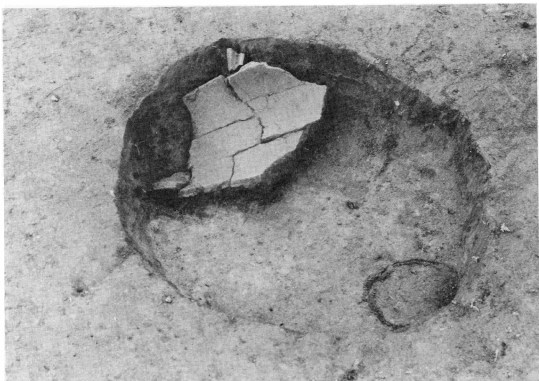
2. 第24号土坑 (SK-24)



1. 第29号土坑 (SK-29)



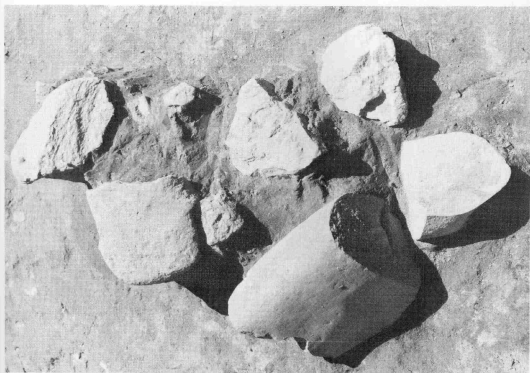
2. 第30号土坑 (SK-30)



1. 第31号土坑 (SK-31)



2. 第34号土坑 (SK-34)



1. 第1号住内配石(1)



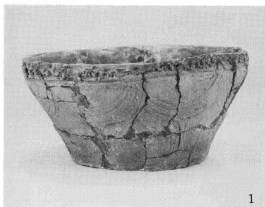
2. 第1号住内配石(2)

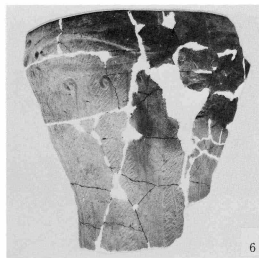
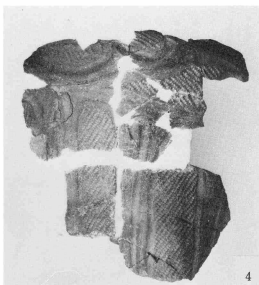


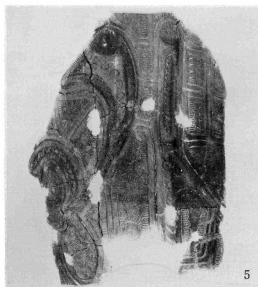
1. 東側発掘区（調査前）

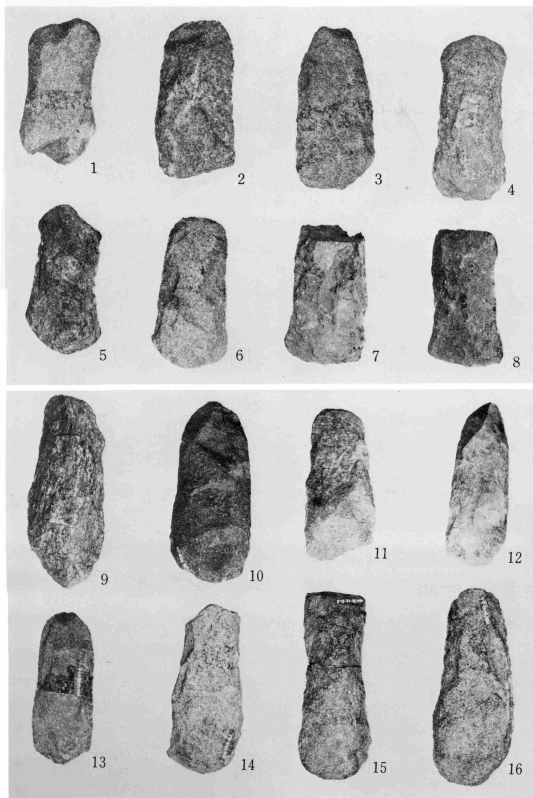


2. 東側発掘区（調査後）

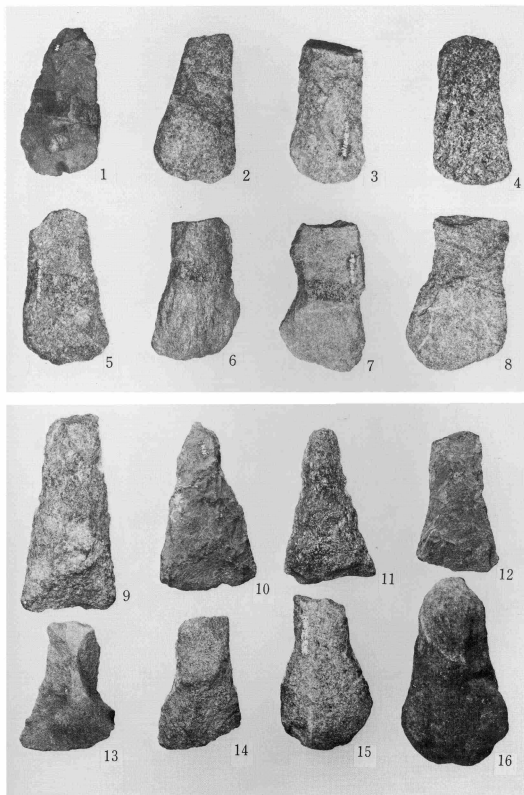




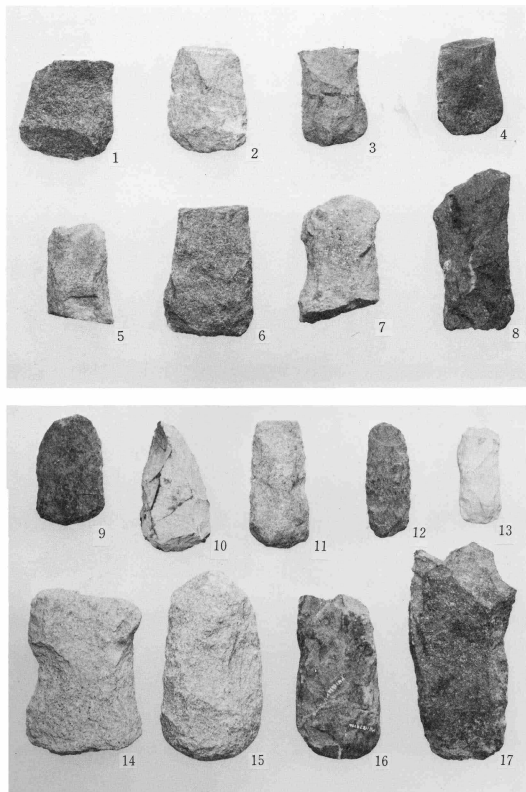




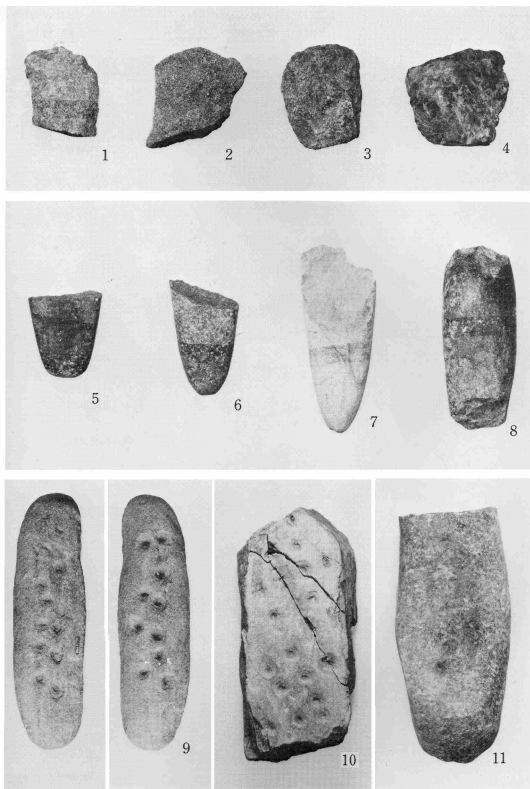
打製石斧(1)



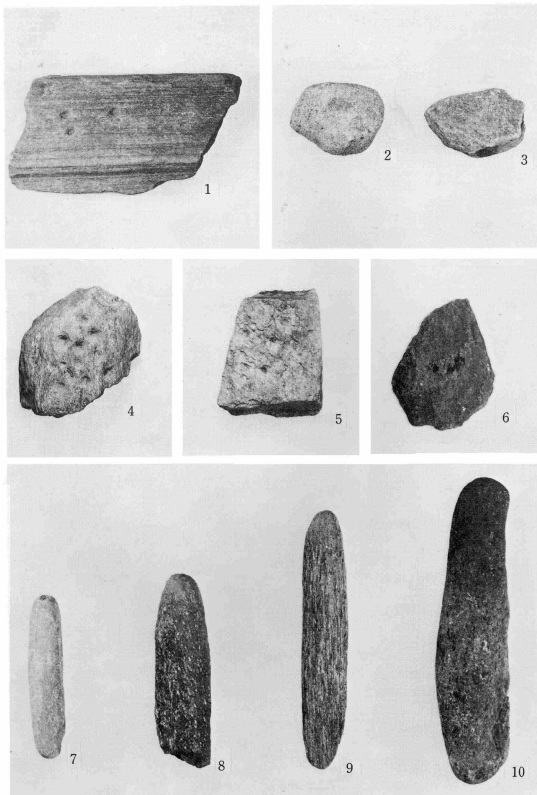
打製石斧(2)



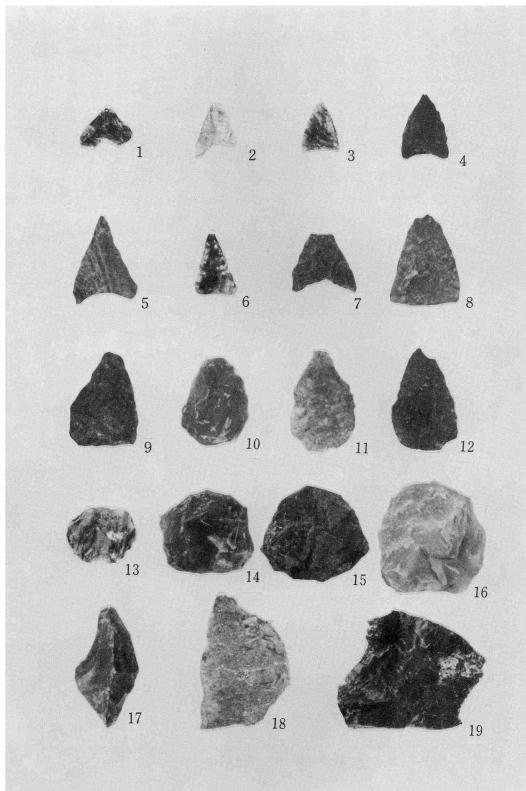
打製石斧(3)

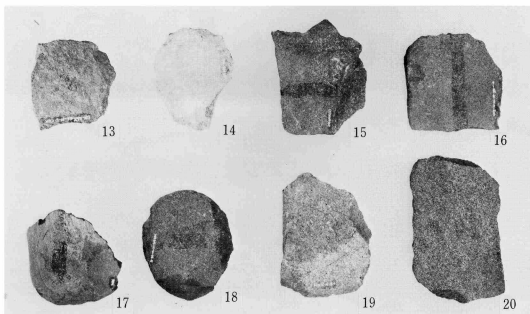
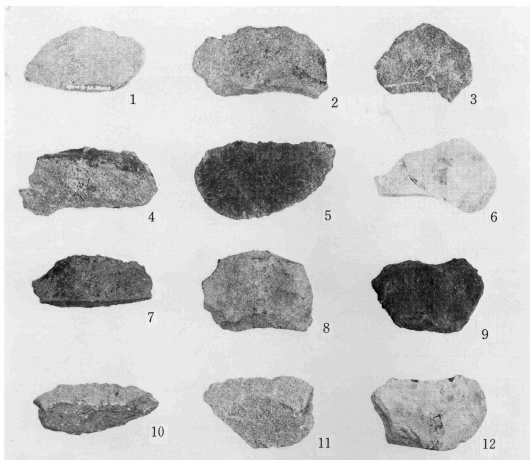


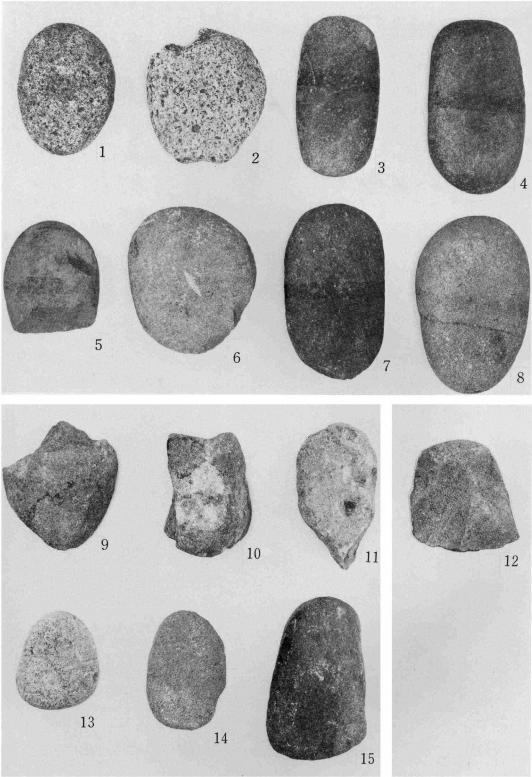
打製石斧・磨製石斧・凹石・台石



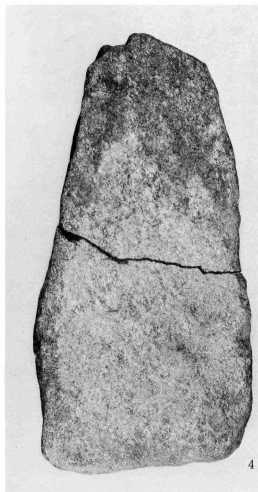
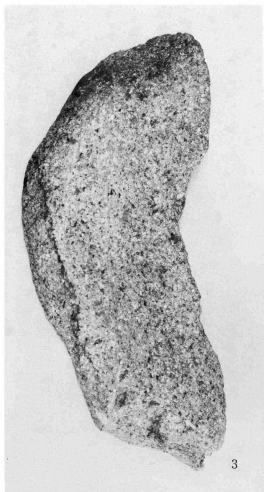
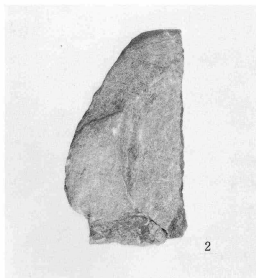
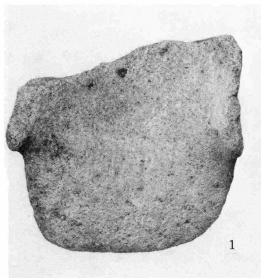
凹石・敲石・棒状石器

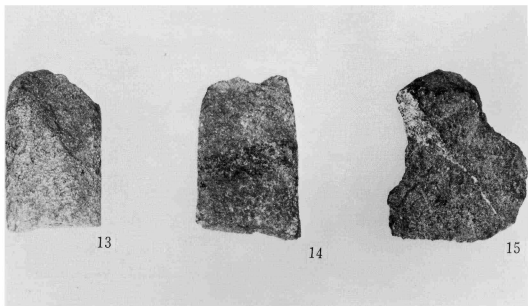
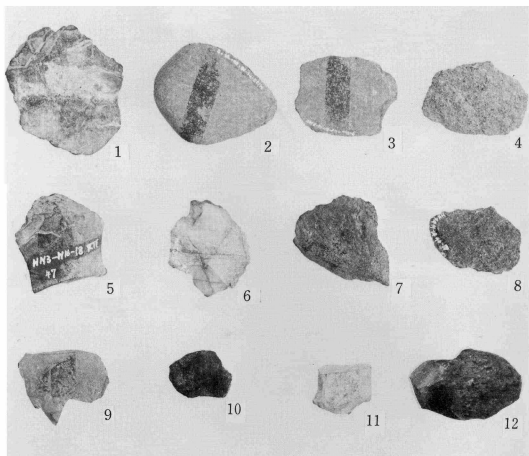




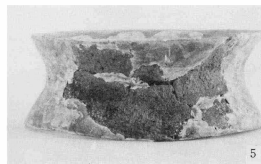
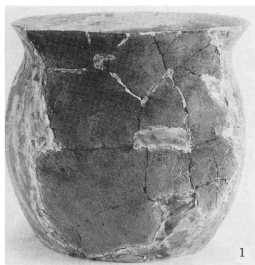


磨石・砥石





小型不定型石器·石匙等



児玉町文化財調査報告書第6集

橋ノ入遺跡Ⅱ

児玉町内遺跡群埋蔵文化財保存事業に伴う調査報告書

昭和61年3月20日印刷

昭和61年3月31日発行

発行者 児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356